

加西市所在

野田窯跡

—青野運動公苑土地信託事業に伴う発掘調査報告書—

平成20(2008)年3月

兵庫県教育委員会

加西市所在

野田窯跡

—青野運動公苑土地信託事業に伴う発掘調査報告書—



平成20(2008)年3月

兵庫県教育委員会



空中写真（国土地理院撮影）

野田窯跡



野田窯跡群 (南東上空から)



野田窯跡群 (南東から)

野田窯跡



1号窯全景

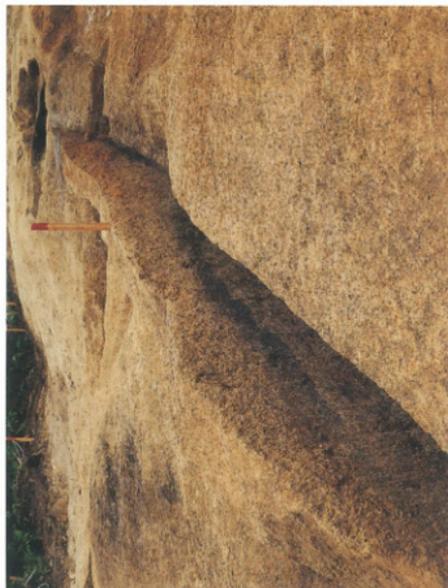


1号窯全景

野田窯跡



1号窯窯体堆積状況



1号窯灰原堆積状況



1号窯窯体堆積状況



1号窯窯体堆積状況

野田竊跡



1号窯東側窯壁



1号窯床面断ち割り



1号窯西側窯壁



1号窯西側窯壁

野田窯跡



2号窯全景



2号窯焚口

野田窯跡



1号窯出土遺物



2号窯出土遺物

高尾遺跡



出土遺物

ダラメ遺跡



出土遺物

例 言

1. 本書は加西市野上町に所在する野田窯跡他の発掘調査報告書である。
2. 県民スポーツレクリエーション施設建設事業に伴う発掘調査の報告で、野田窯跡以外に4遺跡の調査結果を報告している。
3. 本書は兵庫県企画部が計画し、土地信託事業として公募したものであり、東洋信託銀行などが施工した青野運動公園土地信託事業に伴う発掘調査報告書である。
4. 分布調査と確認調査は昭和63年度に、本発掘調査は平成2年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。確認調査は渡辺 昇・村上泰樹が、全面調査は渡辺 昇・柏原正氏が担当した。
5. 調査で使用した方位は国土座標第V系を使用した。また、水準は兵庫県土木事務所設定のB.M.を使用した。
6. 遺構図・土層断面図などは調査員が実測した。
7. 遺構写真は調査担当者が撮影したものである。カラー図版1・写真図版1の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。気球写真は佃産業航空に委託して撮影したものである。
8. 整理作業は、平成18・19年度の2ヵ年にわたって行った。平成18年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、平成19年度第1四半期は兵庫県立考古博物館荒田庁舎で実施した。
9. 執筆は渡辺が行い、編集は友久伸子の協力を得て渡辺が行った。
10. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中500）ならびに魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。ご活用ください。
11. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご指導をいただきました。感謝致します。
奈良文化財研究所・加西市教育委員会
立花 聡・永井信弘・森 幸三（敬称略）



本文目次

I	はじめに	1
	1. 調査に至る経緯	
	2. 確認調査の経過	
	3. 全面調査の経過	
	4. 整理作業の経過	
II	位置と環境	4
III	分布調査ならびに確認調査の結果	8
	1. 分布調査の結果	
	2. 確認調査の結果	
IV	野田窯跡の調査結果	
	(1) 野田1号窯跡	17
	1. 外形	
	2. 窯体	
	3. 灰原	
	4. 出土遺物	
	(2) 野田2号窯跡	34
	1. 外形	
	2. 窯体	
	3. 灰原	
	4. 出土遺物	
V	他遺跡の調査結果	
	(1) ロクロ谷窯跡	39
	(2) ニラミ岩東遺跡	42
	(3) 高尾遺跡	44
	(4) グラメ遺跡 (No.2 墨書土器出土地点)	49
VI	おわりに	51

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	6
第2図	事業地内分布調査結果	9
第3図	No.6～9地点 確認調査グリッド配置図	11
第4図	確認調査土層図	12
第5図	No.6地点(野田窯跡)第2次確認調査結果と地形測量図	13
第6図	No.6地点(野田窯跡)第2次確認調査トレンチ土層図	14
第7図	14地点(ロクロ谷窯跡)確認調査グリッド配置図	15
第8図	野田窯跡 調査後地形測量図	18
第9図	野田窯跡 1号窯 実測図	19
第10図	野田窯跡 1号窯 土層断面図	20
第11図	野田窯跡 1号窯 灰原土層断面図	21
第12図	野田窯跡 1号窯窯体 土器出土状態	22
第13図	野田窯跡 1号窯 出土遺物実測図(1)	28
第14図	野田窯跡 1号窯 出土遺物実測図(2)	29
第15図	野田窯跡 1号窯 出土遺物実測図(3)	30
第16図	野田窯跡 1号窯 出土遺物実測図(4)	31
第17図	野田窯跡 1号窯 出土遺物実測図(5)	32
第18図	野田窯跡 1号窯 出土遺物実測図(6)	33
第19図	野田窯跡 2号窯 実測図	35
第20図	野田窯跡 2号窯 窯体土層断面図	36
第21図	野田窯跡 2号窯 出土遺物実測図	38
第22図	ロクロ谷窯跡 地形測量図	39
第23図	ロクロ谷窯跡 確認調査土層断面図	40
第24図	ロクロ谷窯跡 出土遺物実測図	41
第25図	ニラミ岩東遺跡 トレンチ実測図	43
第26図	高尾遺跡 地形測量図 1 トレンチ西壁土層断面図	45
第27図	高尾遺跡 SK01・SK02 実測図	46
第28図	高尾遺跡 SK03 実測図	47
第29図	高尾遺跡 出土遺物実測図	48
第30図	グラメ遺跡 出土遺物実測図	50

カラー図版目次

カラー図版 1	空中写真 (国土地理院撮影)
カラー図版 2	野田窯跡 上) 野田窯跡群 (南東上空から) 下) 野田窯跡群 (南東から)
カラー図版 3	野田窯跡 上) 1号窯全景 下) 1号窯全景
カラー図版 4	野田窯跡 1号窯窯体・灰原堆積状況
カラー図版 5	野田窯跡 左上) 1号窯東側窯壁 右上) 1号窯床面断ち割り 下) 1号窯西側窯壁
カラー図版 6	野田窯跡 上) 2号窯全景 下) 2号窯焚口
カラー図版 7	野田窯跡 上) 1号窯出土遺物 下) 2号窯出土遺物
カラー図版 8	高尾遺跡 上) 出土遺物 下) 出土遺物 ドラメ遺跡

写真図版目次

写真図版 1	空中写真 (国土地理院撮影)
写真図版 2	野田窯跡 上) 調査地遠景 (南から) 下) 調査前全景 (南東から)
写真図版 3	野田窯跡 上) 野田窯跡遠景 (南東から) 中) 野田窯跡遠景 (南東から) 下) トレンチ 2 西壁
写真図版 4	野田窯跡 上) 空中写真 (南東上空から) 下) 空中写真 (南上空から)
写真図版 5	野田窯跡 上) 1・2号窯全景 下) 1号窯全景
写真図版 6	野田窯跡 1号窯窯体堆積状況
写真図版 7	野田窯跡 上) 1号窯全景 中) 1号窯天井部残存状況 下) 1号窯灰原堆積状況
写真図版 8	野田窯跡 上) 1号窯全景 下) 1号窯灰原堆積状況
写真図版 9	野田窯跡 1号窯窯壁の状況
写真図版10	野田窯跡 1号窯床面遺物出土状況
写真図版11	野田窯跡 上) 1号窯西側窯壁 下) 1号窯床面断ち割り
写真図版12	野田窯跡 2号窯全景
写真図版13	野田窯跡 上) 2号窯窯体堆積状況 中) 2号窯床面遺物出土状況 下) 2号窯断ち割り

写真図版14	ロクロ谷窯跡	上) 遠景 (北から) 中) 全景 下) 窯体の状況
写真図版15	ニラミ岩東遺跡	左) 調査地遠景 (南東から) 右上) 焼土層 (SK01) 検出状況 左中) 堆積状況 右中) 調査風景 下) 全景 (東から)
写真図版16	高尾遺跡	上) 遠景 (北から) 下) 遠景 (南から)
写真図版17	高尾遺跡	上) 全景 (北から) 左下) 全景 (北西から) 右下) 調査風景
写真図版18	高尾遺跡	上) SK01 (東から) 中) SK01土器出土状況 下) SK01 (土器除去後)
写真図版19	高尾遺跡	左上) SK02堆積状況 右上) SK02 (北から) 中) SK02土器出土状況 (西から) 下) SK02 (東から)
写真図版20	高尾遺跡	上) SK03 (西から) 中) SK03 (西から) 下) SK03 (南西から)
写真図版21	野田窯跡	1号窯出土遺物(1)
写真図版22	野田窯跡	1号窯出土遺物(2)
写真図版23	野田窯跡	1号窯出土遺物(3)
写真図版24	野田窯跡	1号窯出土遺物(4)
写真図版25	野田窯跡	1号窯出土遺物(5)
写真図版26	野田窯跡	1号窯出土遺物(6)
写真図版27	野田窯跡	1号窯出土遺物(7)
写真図版28	野田窯跡	1号窯出土遺物(8)
写真図版29	野田窯跡	1号窯出土遺物(9)
写真図版30	野田窯跡	1号窯出土遺物(10)
写真図版31	野田窯跡	1号窯出土遺物(11)
写真図版32	野田窯跡	1号窯出土遺物(12)
写真図版33	野田窯跡	1号窯出土遺物(13)
写真図版34	野田窯跡	1号窯出土遺物(14)
写真図版35	野田窯跡	1号窯出土遺物(15)
写真図版36	野田窯跡	1号窯出土遺物(16)
写真図版37	野田窯跡	2号窯出土遺物(1)
写真図版38	野田窯跡	2号窯出土遺物(2)
写真図版39	高尾遺跡	出土遺物
写真図版40	グラメ遺跡	出土遺物

I はじめに

1. 調査に至る経緯

兵庫県は他地域同様に無秩序な開発を規制し、よりよい環境整備・土地活用を図るために、中国縦貫自動車道建設に際して「中国縦貫自動車道周辺地域の特定用地の取得要綱」に基づいて先行取得した土地がある。昭和48～50年にかけて兵庫県によって将来の中国縦貫自動車道沿線地域の開発に供することを目的としたものであった。それによって、加西市青野町・油谷町・小印南町・田谷町・鍛冶屋町・野上町・和泉町・馬渡谷町にまたがる約153ha（東西2.5km、南北1.3km）の広大な土地が県有地となっていた。場所は加西市の北東部の加東郡滝野町（現加東市）と接する地域で、中国縦貫自動車道の南側の部分である。滝野社インターから6km西に、当時計画段階だった加西インター（現在は供用）から2.3km東に位置している。

引き続き、兵庫県では施策として総合計画「兵庫2001年計画」の中において、東播磨内陸部は阪神都市部の副軸となるよう位置づけられている。地元加西市では市の総合計画の中で、当地域を教育・文化・レクリエーションゾーンに位置づけていた。そのことから、昭和61年1月に加西市長・市議会議長から県知事・県議会議長あてに当地域の整備について陳情書が出された。

当地域の活用について、兵庫県企画部で幾つかの開発手法が検討され、土地信託事業として計画実施の方向となった。東洋信託銀行・住友信託銀行を受託者として事業計画が進められていった。建設期間を含めて概ね28年間の信託期間とし、パブリックゴルフ場（18ホール）とテニスコートを中心としたスポーツ系ファミリーレジャー施設（テニスコート・クラブハウス・自然散策路・コテージ・ゲートボール場・レストハウス・プール・工芸アトリエ・トリムコース）と乗馬施設が計画された。「県民スポーツレクリエーション施設」として昭和63年2月に計画概要書が提出され、関係法令の手続きが行われ、その1つとして埋蔵文化財保護法による協議が行われた。

兵庫県企画部からの依頼により、昭和63年3月23日～25日の3日間分布調査を実施した。153ha全域を対象とした現地調査である。地目は大半が山林であり、久しく遊休地として放置されていたことから荒れており、困難を極めた。尾根部分には古墳・山城は少なく、山裾の窯跡と思われる遺跡が多く確認された。調査は、兵庫県教育委員会社会教育文化財課職員8名（岡崎正雄・吉田昇・吉謙雅仁・大平茂・渡辺昇・村上泰樹・市橋重喜・山田清朝）によって実施した。その結果、20ヶ所で遺跡の可能性が考えられる地点を確認した。

2. 確認調査の経過

分布調査結果を基に工事計画と照らし合わせ、協議を行ったところ12地点の確認調査が必要となった。現状保存が図れるところや設計変更が可能な地点は変更をしたことにより、調査対象から外している。逆に用地外周部に排水路を設置することから、窯跡の可能性のある地点については確認調査地域として追加している。

調査対象地の大半（全体の76%）が山林であり、保安林に指定されていた。その解除や保安林内作業の届出などに手間取り、調査着手は多少遅れた。また、計画予定地周辺の農地では土地改良事業が進められており、特に北側の田谷町・油谷町・鍛冶屋町では遺跡が確認され、加西市教育委員会によって発掘調査も実施されていた。分布調査のNo.2・4・14地点隣接地で調査が行われていた。その結果も参考

にして、埋蔵文化財の有無の確認と遺跡（全面調査）の範囲と掘削深度を確定するために確認調査を実施した。確認調査は、1988（昭和63）年10月13日～11月11日の実働16日間を費やして実施した。その結果、5地点の要全面調査地点が確認されたが、そのうち2地点については現状保存されることとなったので、全面調査対象から外れている。遺跡と確認したことから、No.14地点をロクロ谷窯跡と、No.17地点を中ノ岡遺跡と呼称する。それ以外の3地点についても同様に遺跡名を与えた。No.6・7地点を野田窯跡、No.18地点をニラミ岩東遺跡、No.20地点を高尾遺跡とした。保安林解除の手続きが未了であったことから、トレンチ調査が実施できなかったNo.6・7地点（野田窯跡）の2次確認調査を実施した。全面（本発掘）調査の範囲を確定し、窯跡の基数・深度を明らかにするためである。同様に他の2地点についても2次確認調査を実施したところ、遺跡の範囲は狭小であったことが判明した。そのことから、小面積の全面調査を実施した。第2次確認調査は昭和63年度の1989年2月22日～3月10日までの12日間実施した。第2次確認調査の結果、全面調査が必要となったのは野田窯跡1地点となった。

調査の組織

調査主体	兵庫県教育委員会		
調査事務	兵庫県教育委員会社会教育・文化財課		
課長	中根孝司		
文化財担当参事	日野和広		
副課長	高坂 隆		
課長補佐兼埋蔵文化財調査係長	大村敬通		
調査担当			
主任	渡辺 昇		
技術職員	村上泰樹		
調査補助員	浜田省三・池田哲也・常峰克洋・竹本茂貴・金鹿一茂・藤沢慶一・藤田美紀		
作業委託	小芦建設株式会社		

3. 全面（本発掘）調査の経過

確認調査結果とその後の保存協議で全面調査が必要な地点は1ヶ所となった。その野田窯跡の全面調査は平成2年度に実施した。1990（平成2）年6月21日から8月24日までの梅雨から盛夏にかけて調査を行った。実働42日間を費やした。面積820㎡で窯跡2基を対象として調査を実施した。

調査の組織

調査主体	兵庫県教育委員会		
調査事務	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所		
所長	内田隆義		
所長補佐兼調査第1課長	大村敬通		
総務課長	小池英隆		
主査	井守徳男		
事務職員	小林亮介		

調査担当

主任	渡辺 昇
技術職員	柏原正氏
調査補助員	真狩和成
室内作業員	菅田崇子・菅田三七子
作業委託	アキタ建設株式会社（現場代理人）澤中 治

4. 整理調査の経過

出土遺物の整理作業は発掘調査とはほぼ平行して野田窯跡発掘調査事務所で水洗作業から着手した。出土遺物はコンテナ40箱と多くはない。その後、整理契約は中断しており、調査担当者と前田陽子が各現場事務所で断続的に作業を継続していた。平成18年度に信託事業主体である東洋信託銀行の後身である現在のUFJ信託銀行と整理契約を締結し、作業を本格化した。平成18年度は実測・補強作業までを行い、平成19年度にそれ以降の作業を実施し報告書を刊行した。

平成18年度調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長	平岡恵昭
主幹兼総務課長	若生晃彦
主査	内匠靖彦
主任調査専門員	岡崎正雄
担当課長補佐	森内秀造
主査	菱田淳子

調査担当

担当課長補佐	渡辺 昇
嘱託員	友久伸子・吉田優子・島村順子・蔵幾子・宮野正子・早川有紀・荻野麻衣 谷脇里奈

平成19年度調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県立考古博物館

埋蔵文化財調査部長	若生晃彦
総務課長	若狭健利
主査	内匠靖彦
調査専門員	西口和彦
担当課長補佐	森内秀造
主査	菱田淳子

調査担当

担当課長補佐	渡辺 昇
嘱託員	友久伸子

II 位置と環境

野田窯跡は加西市野上町野田に所在する須恵器窯跡である。加西市は加古川水系中流域になり、加古川の支流である万願寺川・普光寺川・下里川などの小河川によって開析された盆地である。河川はいずれも常時の水量は少なく概ね南北に流れ、万願寺川に集約されて東流し、小野市栗生町で加古川本流に注いでいる。中位段丘面であるが平地となっている。洪積台地で水利の点から近世まで開発が遅れた部分が多い。瀬戸内海式気候で降雨量が少なく、溜池が目立つ地域である。

旧石器時代の遺跡は県内では比較的多く確認されている地域である。主に溜池で石器が採集されている。県内の遺跡数の中で高率を占めている。大半の遺跡は縄文時代の石器も出土している。七つ池で国府型ナイフや削器が、逆池でナイフ型石器11点をはじめ翼状刮片・削器・チョッピングツールが、善坊池からナイフ型石器・削器が採集されている。発掘資料では小野市勝手野遺跡で層位的に確認されている。

縄文時代の遺跡は少なく、明確ではない。石器出土地が多く、土器は後晩期に限られている。野間遺跡・鴨谷遺跡・小谷遺跡などで浅鉢が出土している。中期の土坑が廻山遺跡で検出されている。

弥生時代も以前は女麩山遺跡や笠原遺跡・小谷遺跡などの後期を主体とする遺跡が知られていた程度であったが、圃場整備に伴う調査など最近の調査で遺跡は急増している。弥生前期の土器は出土しているが、明確な遺構は確認されていない。加西市南東方向の小野市では河合中カケ田遺跡や高田小苗代遺跡で前期の遺構が調査されている。河合中カケ田遺跡は後期まで継続する歴史遺跡で、中期には周溝墓が築かれている。当然下流域では東神吉遺跡・岸遺跡・砂部遺跡など縄文晩期から弥生前期にかけての集落跡が知られている。野田窯跡近辺でも最近の調査で弥生後期の竪穴住居跡が確認されている。ロクロ谷窯跡北側の田谷高月遺跡でも3棟確認されている。円形と隅円方形のプランがある。

古墳時代の集落跡も多くなっている。小谷遺跡では前期から後期の遺構が検出され、陶器の古式須恵器が多く出土している。殿原辻井遺跡・満久遺跡・西山谷遺跡でも竪穴住居跡が検出されている。

発生期を考える上に興味深い遺跡が周遍寺山1号墓である。県下で唯一の四隅突出墳の可能性が高い墳墓である。中国地方と北陸地方に集中する墓制で単独に離れて存在する意味は何を示すのであろうか。墳丘墓は加古川市域に確認されている。八つ塚墳墓群・神吉山墳墓群・西条墳墓群などである。西条52号墓は蓋石が存在しない竪穴式石塚かと考えられている。木蓋ではないかと最近では言われている。内行花文鏡が出土しており、弥生土器も出土している。

前期古墳は加古川下流域には日岡古墳群など多数見られるが加西市域では数少ない。上野町の皇塚古墳が挙げられ、径16mの円墳で主体部は竪穴式石室である。鏡・刀剣・玉類・土師器が出土している。東側では敷地大塚や栗生三つ塚古墳・樋詰古墳などが前期末の古墳と思われる。

中期になると玉丘古墳群が形成される。全長105mの優美な典型的な前方後円墳である玉丘古墳を盟主墳とする古墳群である。玉丘古墳は3段築成の壙型周濠を有している。主体部は流紋岩質凝灰岩製の長持形石棺を直葬している可能性が高い。石材が少ないことから、石室ではないと想定されている。石棺の蓋石には格子状の文様が彫られている。「播磨国風土記」にみえる針間朝造許麻の娘根日女の墓と伝承されている。根日女はキャラクターとして使われ、根日女の里として活用されている。玉丘古墳群は盟主墳と2基の陪塚を除いて、3基の前方後円墳と5基の大形円墳から成っている。また、周辺にも同時期の古墳が確認されている。北側の尾根上には亀山古墳が位置している。短甲・眉庇付冑・鏡な

どが出土している。岩盤を削り抜いて石棺にしている特殊な構造である。北山古墳からは多数の鉄器が出土しており、クワンス塚古墳は帆立貝式の古墳である。玉丘古墳群北側の山伏峠には長持形石棺蓋を転用した石棺仏が立っており、さらに多くの中期古墳が存在したようである。玉丘古墳群北西の北条市街地に入る丘陵上にも全長約45mの前方後円墳である女鹿山古墳と、同じく全長約45mの前方後円墳である寺山古墳が存在する。

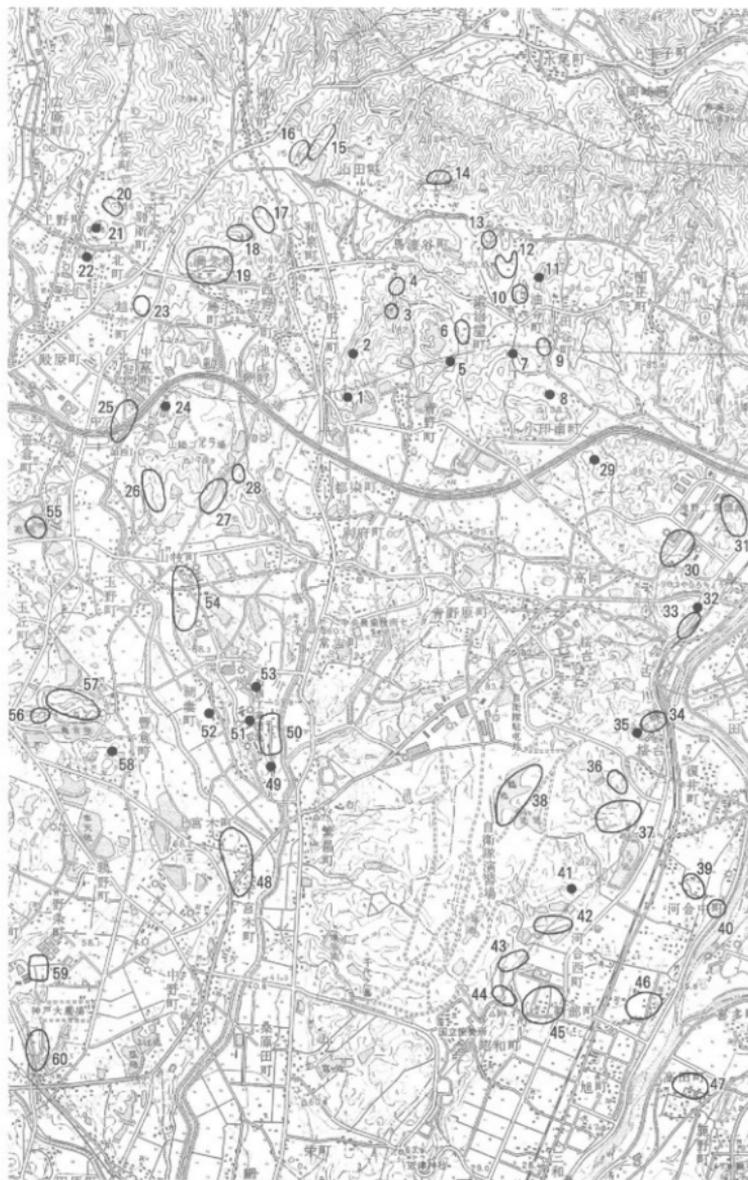
後期になると古墳は増加し、山間部を除いてほぼ市内全域に広がっている。横穴式石室を主体とするものが多いが、木棺直葬の古墳も少なからず確認されている。加古川左岸の小野市域では100基を越す木棺直葬の大形群集墳が築かれている。徳山古墳群・壺山古墳群である。加西市域でも園場整備で周溝だけ検出された古墳がある。これらは木棺直葬の可能性が高い。

横穴式石室を主体とする古墳も多く、特に右岸の方に顕著である。大形石室も同様で、池尻19号墳をはじめとする平荘湖の古墳群が代表的な古墳群である。加古川市域では中期の墓域がそのまま継続して古墳の築造を継続しており、周辺に古墳を拡大している。日岡古墳群・西条古墳群が前期から継続して造墓活動を続けているが、平荘湖古墳群では急激に増加する。加西市では剣坂1号墳が大形石室で、石槨を架橋する特殊な石室である。加古川市域と異なって後期でも後半以降の築造が多い。また、大規模な古墳群はなく、数基から十数基で構成される古墳群である。市域南東部で比較的古墳が集中している。野田窯跡付近では数基から成る古墳群が存在している。

加西市から加古川市・高砂市にかけてはいわゆる龜山石と呼ばれる石棺材の産地であり、多くの石棺などの石材を再利用した石棺仏で知られている。山伏峠の石棺などが代表的なものである。しかし、石室内に置かれている石棺はほとんど存在しない。加古川市との市境に近い後藤山古墳で終末期の菴蒲池型石棺が認められるだけである。発掘調査された愛染古墳は精美な石棺が埋納されていた。しかし、奥新田古墳群の調査で石棺材が破砕されて出土している例があることから、中世に多くの石棺が引き出され再利用されたものと思われる。

この時期は今回の調査対象となった窯跡が多数築かれている。加古川市北部にかけての市境付近に多く存在している。志方窯跡群と総称される窯跡群である。この地域は古代中世に引き継がれるが、野田窯跡など加西市北部の窯跡は単独時期で後世に継続しない。時期的には今回報告するロクろ谷窯跡が最も早い時期の操業と思われる。

奈良時代になると、加古川流域には多くの寺院が建立されるようになる。加西市も例外ではなく、繁昌院寺・野条院寺・吸谷院寺などである。繁昌院寺は瓦を供給した瓦窯も確認され、現地での需給関係が明らかになっている。現存する塔頭である一乗寺も造営されており、石造物として知られる古法華石仏や繁昌の五尊石仏も代表的なものである。この時期の集落も確認されており、また古墳時代から継続する窯跡も南部に多く見られる。それらは平城京にも貢納されている。



第1図 周辺の遺跡

S=1:50,000

遺跡の名称	遺跡の所在地	遺跡番号	時代
1 野田1・2号窯	加西市野上町野田	300463他	古墳
2 向山古墳	加西市野上町向山・青野町エブリ谷	300578	古墳
3 青野城跡	加西市青野町林ノ谷・長谷	300301	中世
4 馬谷城跡甲	加西市馬渡谷町崩谷	300785	中世
5 ニラミ岩東遺跡	加西市鍛冶屋町	—	古墳
6 タラメ遺跡	加西市鍛冶屋町タラメ 他	300467	平安
7 高尾遺跡	加西市田谷町赤坂・田谷町高尾	300418	弥生
8 ロクロ谷1・2号窯	加西市田谷町ロクロ谷	300466他	古墳
9 田谷高月遺跡	加西市田谷町高月	300417	弥生～平安
10 鏡山古墳群	加西市田谷町鏡山	300117他	古墳
11 田谷合業遺跡	加西市田谷町合業	300419	弥生～近世
12 大畑遺跡	加西市鍛冶屋町大畑ケ	300421	古墳～平安
13 鍛冶屋若宮遺跡	加西市鍛冶屋町若宮	300422	中・近世
14 大工町敷布地	加西市大工町けこうじ谷他	300718他	奈良
15 新築一1～7号窯	加西市和泉町新築一	300715他	平安
16 河内向山遺跡	加西市河内町向山・和泉町原ノ垣内・新築一	300305	弥生・古墳
17 溝久谷遺跡	加西市溝久町溝久谷・溝久谷奥	300471	弥生～中世
18 溝久城跡	加西市溝久町溝久谷奥・城山	300184	中世
19 城山遺跡	加西市溝久町城山・新田	300006	弥生
20 天神山城跡	加西市佐谷町下屋敷・長連寺	300782	中世
21 皇塚古墳	加西市上野町池ノ下	300306	古墳
22 池ノ下古墳(石部神社前古墳)	加西市上野町池ノ下	300554	古墳
23 溝久遺跡	加西市溝久町大西	300254	古墳・奈良
24 中富経塚古墳	加西市中富町経塚	300034	古墳
25 野間遺跡	加西市中富町丁市	300277	弥生
26 山枝東山古墳群	加西市山枝町東山	300442他	古墳
27 荒神谷古墳群	加西市中富町廻り塚東・別府町明神山	300227他	古墳
28 桑ノ池上古墳群	加西市別府町明神山	300231他	古墳
29 小印南町古墳	加西市小印南町黒石	300599	古墳
30 黒石山古墳群	加東市河高字黒石	240022他	古墳
31 妙見山古墳群	加東市河高字妙見山	240018他	古墳
32 榑詰古墳	加東市河高字榑詰	240015	古墳
33 榑詰遺跡	加東市河高字榑詰	240005	縄文・弥生
34 血山古墳群	小野市復井町字西山	190001他	古墳
35 復井古墳	小野市復井町字西山	190006	古墳
36 西山古墳群	小野市復井町字西山	190010他	古墳
37 曾我井山古墳群	小野市河合中町字岩谷	190015他	古墳
38 鶴池遺跡	小野市河合西町字鶴池	190032	旧石器・縄文
39 八王子遺跡	小野市河合中町字宮ノ前	190034	平安・中世
40 河合庵寺	小野市河合中町字葉師前ほか	190035	奈良
41 門刺山古墳	小野市河合中町字門刺山	190038	古墳
42 大塚山古墳群	小野市河合西町字大塚山	190039他	古墳
43 河合西古墳群	小野市河合西町字床屋林	190051他	古墳
44 三ツ塚古墳群	小野市新部町丁通	190066他	古墳
45 大寺遺跡・大寺庵寺	小野市新部町字大寺	190062他	弥生・古墳・奈良
46 河合城跡	小野市新部町字横	190060	中世
47 高田宮ノ後遺跡	小野市高田町字宮ノ後	190365	弥生・古墳
48 土井ノ内遺跡	加西市上宮木町土井ノ内・廻り重 他	300281	弥生～平安
49 天神山瓦窯	加西市繁昌町天神	300170	奈良
50 繁昌庵寺	加西市繁昌町山脇	300177	奈良・平安
51 山ノ輪瓦窯	加西市繁昌町山ノ辻	300169	奈良
52 南条古墳	加西市朝妻町南条清サ	300161	古墳
53 尾ノ池1号窯	加西市朝妻町東山	300176	奈良
54 山枝遺跡	加西市山枝町村前・小正開地 他	300007	弥生～中世
55 逆池古墳群	加西市玉野町西ノ谷	300036他	古墳
56 飯盛山古墳群	加西市豊倉町飯盛	300158他	古墳
57 豊倉古墳群	加西市豊倉町三ノ谷	300611他	古墳
58 中村南・北窯	加西市豊倉町中村	300413他	古墳
59 野条庵寺	加西市野条町カミ田	300178	平安・中世
60 中溝遺跡	加西市東笠原町中溝ノ山ノ下	300386	古墳～中世

表1 周辺の遺跡名一覧

Ⅲ 分布調査ならびに確認調査の結果

1. 分布調査の結果

分布調査は全域を対象とした。7割以上が山林であり、早い段階に県有地となっていたことから手入れがされず繁茂状態であった。残りの耕作地も同様に長期間休耕状態であったことから荒れた状態で分布調査を行うのに困難な状況であった。2斑に分けて全域を対象とした。ただし、溜池など調査不可能な地点を除いて悉皆調査を行った。分布調査段階では周知の埋蔵文化財包蔵地は存在していなかった。しかし、対象地北側の田谷町・鍛冶屋町周辺で圃場整備事業に伴う発掘調査が加西市教育委員会によって実施され遺跡が確認されていたことから、遺跡の存在する可能性は高いものと思われた。

通常と同じく尾根部分は古墳や弥生集落を、山腹は集落を、山裾は窯跡を対象として分布調査を実施した。調査の結果、表1のように20ヶ所で遺跡の可能性の高い地点を確認した。No.1・No.10地点は祠や石造物が集められている部分であり、当然墓域の可能性も考えられた。No.1地点は宝篋印塔残欠や五輪塔・一石五輪塔・道標が集められている。細かい調査は行っていないが、竜山石裂で鎌倉時代から江戸

№	所在地	立地	地目	遺構	遺物	時代	想定の種類別	備考
1	鍛冶屋町	山地	雑木林	道標 他		中近世	祭祀	
2	鍛冶屋町グラマ	丘陵・谷	雑木林・水田		須恵器	鎌倉	散布地	墨書「川」
3	鍛冶屋町	山地	雑木林	古墳状			古墳	
4	鍛冶屋町山ノ谷	谷部	水田		須恵器	鎌倉	散布地	
5	鍛冶屋町	山地	雑木林	古墳状			古墳	
6	都染町・野上町	山地・谷部	雑木林・水田		須恵器・陶磁器	古墳	窯跡	
7	都染町	谷部	水田		須恵器・陶磁器	古墳・近世	散布地	
8	都染町	谷部	水田		須恵器	鎌倉	散布地	
9	都染町	谷部	水田		須恵器	鎌倉	散布地	
10	野上町	山地	雑木林	祠		近世	祭祀	
11	野上町	山地	雑木林	古墳		古墳	古墳	石材散乱
12	青野町	山地	雑木林	堀切			山城	
13	野上町	谷部	雑木林		須恵器・陶磁器	中近世	散布地	
14	鍛冶屋町・田谷町	谷部	雑木林	窯体・灰原	須恵器・窯灰	古墳	窯跡	
15	鍛冶屋町	谷部	雑木林	灰原		古墳	窯跡	
16	油谷町	谷部	雑木林	灰原		古墳	窯跡	
17	油谷町	谷部	雑木林	焼土層		古墳	窯跡	
18	鍛冶屋町	谷部	雑木林	焼土層		古墳	窯跡	
19	鍛冶屋町	谷部	水田		須恵器	鎌倉	散布地	用地外で採集
20	田谷町高尾	丘陵	雑木林	土坑	弥生土器	弥生	集落	

表2 分布調査成果表



第2図 事業地内分布調査結果

時代にかけてのものである。No.10地点は祠が置かれ、中にお地藏さんが祀られていた。祠に元文2（1737）年の銘が見られる。ともに里道沿いに位置している。現況では近くに墓標はなく墓が広がっている状況ではないが可能性は残される。

No.2地点は対象地内では遺物を採集できなかったが、下方の用地外になる水田部分において圃場整備が行われており、そこで墨書土器「川」を含む須恵器・土師器を採集した。そのことから、水田部分から丘陵斜面にかけて遺跡が存在する可能性が考えられる。採集した遺物は平安時代末から鎌倉時代にかけての遺物で、その時期の集落が想定される。No.4地点はNo.2地点の西側で同じ谷の向かい側にあたる。やはり、須恵器を採集しており、No.2地点と同一遺跡の可能性がある。

No.3地点は尾根上にあり、古墳状隆起を1ヶ所確認している。高さ0.6mと低墳丘のもので、径も6m余りと小規模である。No.5地点も尾根上で確認した古墳状隆起である。大池の東側の尾根上で比較的緩やかな斜面で、尾根上に3ヶ所の古墳状隆起を確認した。1基は半城状である。No.3地点の隆起と同規模で低墳丘のものである。

No.6地点とNo.7地点は同じ谷の西と東である。用地外の水田で須恵器・陶磁器を採集した。狭長な谷部でその両側に須恵器窯跡の可能性が考えられる。No.8地点とNo.9地点は、No.6地点・No.7地点の谷の東側に位置する谷部にあたる。同じように水田部分で須恵器を採集したことから、窯跡があるものと想定される。

No.11地点は西側の尾根上に存在する。標高156.8mの比較的高い位置に占地している。径20mとやや大きく墳丘も1.5mを越える規模である。中央に盗掘坑と思われる攪乱坑があり石材が散乱している。板状の石材であることから、埋葬主体は竪穴式石室か石棺と思われる。尾根頂部に位置していることや主体部からも前半期の古墳の可能性が高い。

No.12地点は尾根上に平坦面と堀切が存在するもので、山城の可能性を考えている。遺物は採集していない。土塁は認められない。平坦面の一画に「正一位白滝大明神」の札を祀った小社がある。

No.13地点～No.19地点は似た地形に立地している。遺跡の種別は窯跡を想定している。遺物はすべて用地外の水田で採集している。圃場整備事業の断面で焼土層などが露頭している地点もある。No.13地点は水田部で須恵器と近世陶磁器を採集している。No.14地点は北側に向かう斜面で、排水溝断面で灰原が確認されている。地形的に直上に窯体がありそうである。水田部分にも土器が少量広がっていた。断面では窯壁も採集している。No.15地点はNo.14地点の西側谷部である。やはり、断面で焼土層を確認している。

No.16地点は計画地中央南部にあるスリバチ池の西側斜面にあたる。切通し面で灰原の可能性のある灰層を確認している。用地境界ラインで確認している。No.17地点はスリバチ池の東側にあたる。切通し面でレンズ状堆積の焼土面と焼土層を確認している。窯体の可能性がある。

No.18地点はスリバチ池から田谷町へ抜ける里道沿いにある。谷西斜面の切通し面で焼土層を確認している。やはり窯体の可能性がある。No.19地点はNo.18地点の北東部にある谷部で、用地外で2点の須恵器を採集している。ただ、平安時代末から鎌倉時代にかけての須恵器で他地点が古墳時代の窯跡であることからすると違和感がある。

No.20地点は計画地北東部で里道沿いの断面で炭と土師器小片を確認した。小さな峠の鞍部にあたる地域で窯跡ではなく、集落跡か墓跡を想定している。

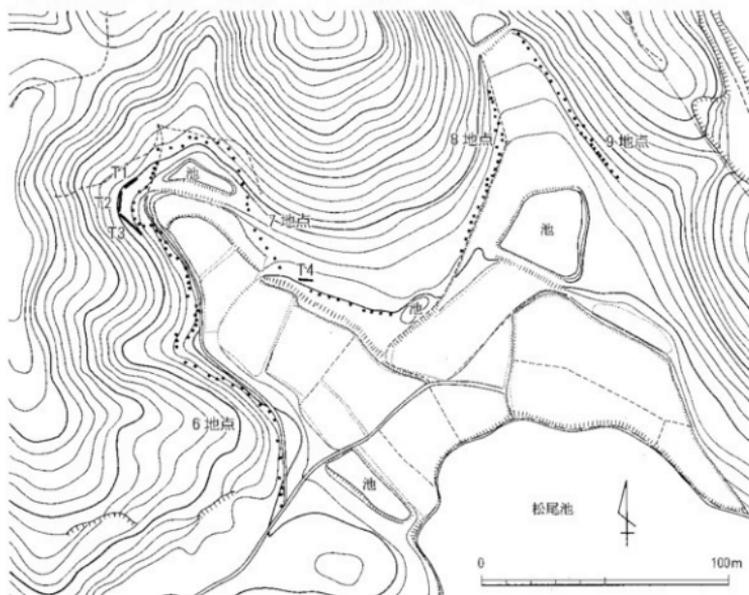
2. 確認調査の結果

分布調査の結果を基に協議を行い、設計変更できる箇所は変更をお願いして調査対象から外した。北西部は第2期工事として乗馬コースが計画されている地域であり、馬が通れるような簡易な工事で済むことから、コースから外すなどの措置を執って載いた。No.11地点の古墳をはじめ、No.2地点～No.4地点・No.12地点がそれに該当する。No.1地点・No.10地点の祭祀の対象となるものも現状保存が図られた。No.13地点は工事が及ばない地域であることから、調査対象から外した。その結果、残り12地点を調査対象として確認調査を実施した。

調査対象地のほとんどの地目が山林である上に、一部は保安林地域に指定されていることから重機を使用することは困難であった。大半は人力掘削によって確認調査を行い、一部重機進入可能な地点のみミニユンボを使用した。

12地点のうち10地点は竪穴を対象としたものであり、他は古墳と集落を対象とした確認調査である。No.5地点は尾根上に位置しており、古墳状隆起3ヶ所を分布調査で確認した地点である。また、東側と北側の平坦面に墳墓が築かれている可能性を考えて確認調査を行った。7本のトレンチを設定して確認調査を実施したが、すべてのトレンチで遺構は確認されなかった。また、遺物も出土しておらず古墳とは思われない。平坦面も同様で自然地形と判断し、墳墓・集落などは存在していない。

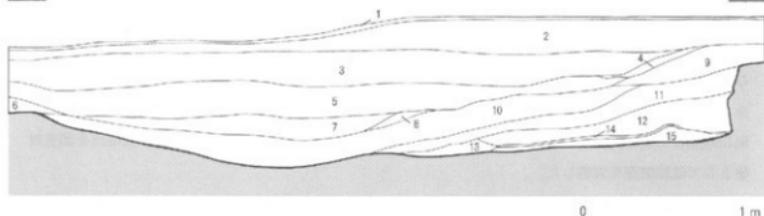
No.6地点は竪穴と思われる地点で、谷入口から奥まで調査対象とした。調査地大半が保安林であることから、最小限の伐採しかできなかった。労力を減らして確認するために、灰原を確認することに主眼を置き、丘陵部から水田への変換線にグリッドを設定した。1辺0.5m～2mのもので、地形や周辺の



第3図 No.6～9地点確認調査グリッド配置図

15地点

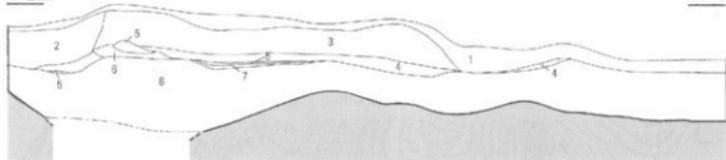
81.1m



- | | |
|---------------------------------------|----------------------------------|
| 1 表土 | 9 明黄褐色シルト 流出土0.5~1cm大の垂角礫(地山礫)混入 |
| 2 暗褐色土 0.5cm大の垂角礫含み、ITで非生土器1片検出 | 10 黄灰色シルト 流出土0.5~1cm大の垂角礫(地山礫)混入 |
| 3 黒色土+灰白色土塊文状に混入 0.5~1cm大の黄褐色山ブワック多混入 | 11 暗黄褐色土 炭粒じり 窯状遺構埋土 |
| 4 暗褐色土 粗砂混じり | 12 黒色炭層 窯状遺構埋土 |
| 5 暗褐色土+黒色土 炭混入 | 13 暗褐色土 炭層 |
| 6 暗灰色土+灰白色粘土混入 1~3cm大の地山礫混入 | 14 黄褐色焼成層 |
| 7 4層と同じ | 15 赤褐色酸化層(二次熱で赤化) |
| 8 黄褐色シルト | |

18地点

83.7m

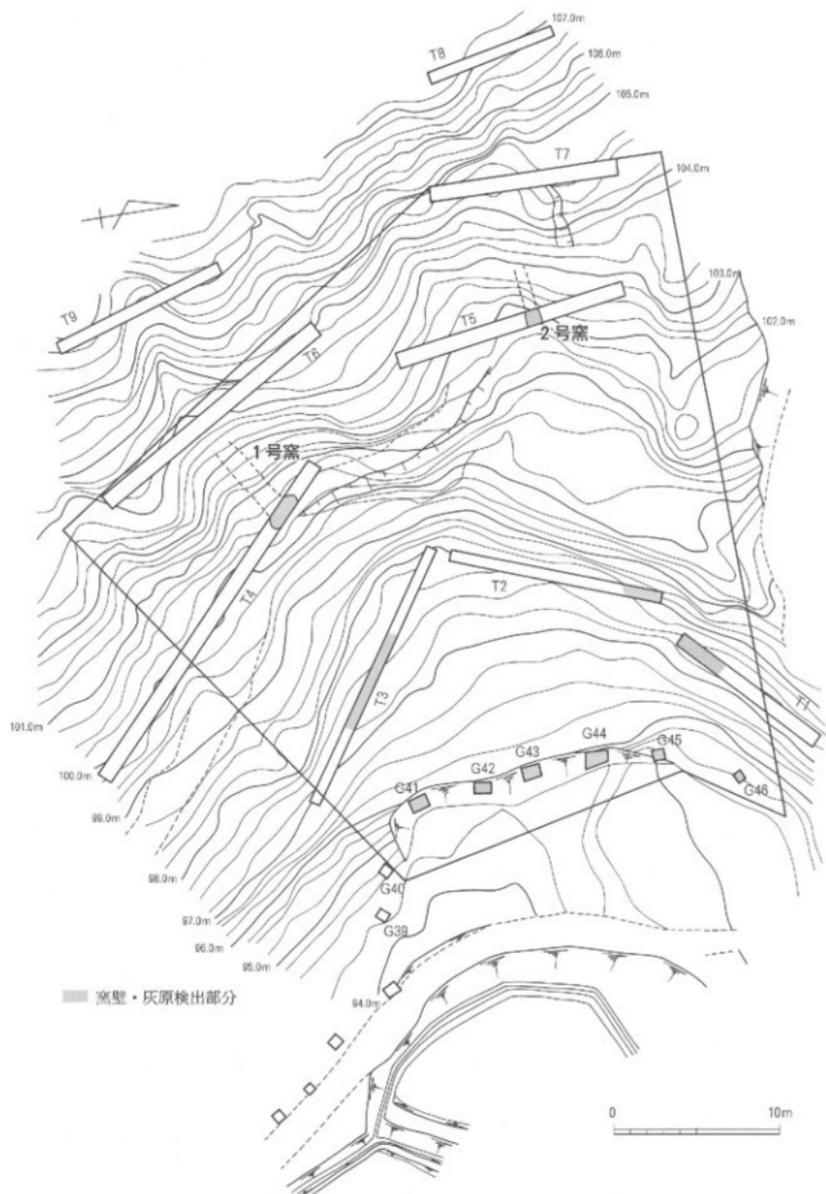


- | |
|-----------------------------------|
| 1 表土 |
| 2 褐色土 |
| 3 橙色土 0.3~0.5cm大の礫 締まり弱い |
| 4 暗褐色土 0.5cm大の礫を少量含む 炭 少量混入 |
| 5 黒褐色土 炭片を含む(灰層) |
| 6 黒灰色土 炭片多量(灰層) |
| 7 赤褐色土(黄土層) |
| 8 黄灰色土 0.5~1cm大の礫 締まっている(谷部2次堆積土) |

第4図 確認調査土層図

状況(立木や岩盤など)で大きさは変化している。谷奥部まで60ヶ所のグリッドを設定して調査したところ、7ヶ所で灰層や焼土層・炭を検出し、須恵器が出土したので最大の広がり確認された。その範囲の上部で窯体の基数を確認すべく1m幅のトレンチを3本設定した。立木の間を縫うように、伐採木を極力減らして調査を行った。北側からトレンチ1~トレンチ3としたが、南北の2本では灰層は確認したものの、夾雑物が混じっており2次堆積と思われる。トレンチ2の北側で検出した灰原は1次堆積のもので、上方に窯体があるかと思われる。ただ、これ以上保安林内での伐採を伴う作業は困難であったことと、現況の調査結果からでは確実な調査範囲を確定することができないので、改めて2次確認調査を実施することとした。

保安林内作業の手続きを行ったのち、改めて2次確認調査を行った。前回同様トレンチ調査とし、幅1mのトレンチを6本設定した。トレンチ1~3の上方にはほぼ等高線に平行に2本のトレンチ(4・5)で確認調査を行ったところ、両トレンチともに灰原を確認した。さらに標高の高い部分に平行に2本のトレンチ(6・7)を設定した。窯体は確認されなかったため、念のためさらに上方に2本のトレンチ(8・9)を設定したが、やはり遺構は検出されなかった。そのことから、2基存在する窯跡の窯体は

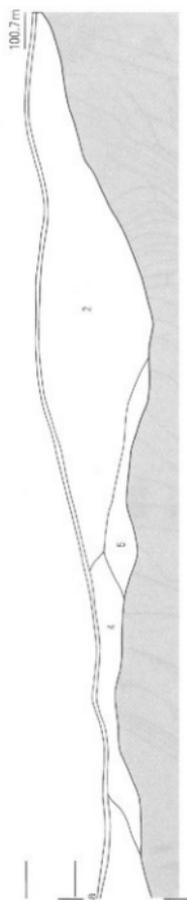


第5図 Na 6地点(野田窯跡)第2次確認調査結果と地形測量図

トレンチ4



- 1 表土
- 2 褐色土 (厚径φ0.5~1.0mの垂角層)
- 3 褐色+褐色土 木の屑層瓦
- 4 黄褐色土 0.3~0.5m厚少量
- 5 黒褐色土 灰層



トレンチ5



- 1 表土
- 2 褐色土
- 3 黄褐色土 粘土層φ0.5~1.0m厚含む
- 4 褐色土 地山層φ1~1.5m大少量含む
- 5 暗赤褐色シロト
- 6 黄褐色土 灰層入 土層片 粘土粒含む 灰層
- 7 褐色土 水を含み砂化している
- 8 黄褐色土 (腐・炭含む)
- 9 暗赤褐色土 (腐・粘土含む)



第6図 Na.6地点(野田窯跡)第2次確認調査トレンチ土層図

トレンチ4・5とトレンチ6・7の間にあるものと判断し、第1次確認調査で確認した灰原部分と合わせて約1,000㎡について全面調査が必要と思われる。小字名から「野田窯跡」と呼称し、南側を野田1号窯跡、北側を野田2号窯跡とする。

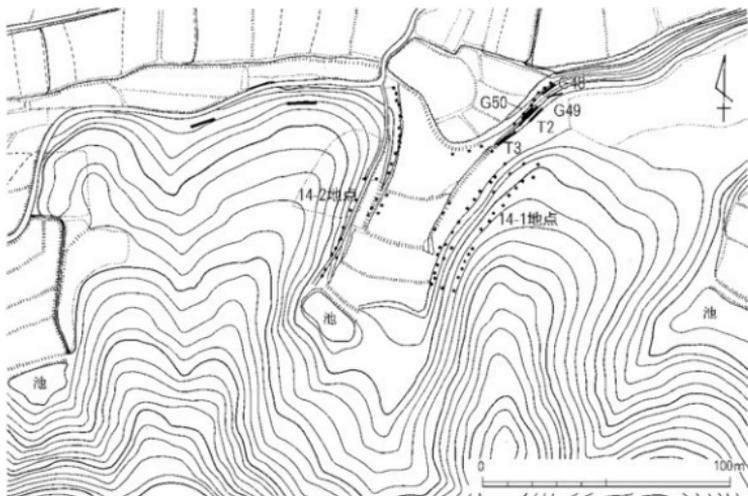
No.7地点はNo.6地点の谷向かい側にあたる。同じような斜面であることと、水田で須恵器を採集したことから確認調査を実施した。18ヶ所のグリッドと1本のトレンチを設定して調査を行ったが、遺構は確認されなかった。

No.8・9地点はNo.6地点の北東部にある谷周辺である。水田で中世の須恵器を採集したこと、地形がNo.6地点と似通っていることから期待されたが、遺構は確認されなかった。両地点とも24ヶ所のグリッドを設定して調査を行った。

No.14地点は分布調査時に圃場整備事業による排水路法面で須恵器・窯壁や灰層を確認した地点である。谷入り口部東側で採集しているが、同様な地形が広がっている谷周辺部を確認調査対象とした。グリッド80ヶ所、トレンチ5本を設定して調査を行ったが、分布調査で確認した地点以外では遺構は確認されなかった。灰層確認周辺の調査では、新たに窯跡を検出することはできなかった。小字名をとって「ロクロ谷窯跡」と呼称した。

No.15地点はNo.14地点の西側の谷から丘陵部に位置している。断面に灰層を確認していた地点の上方トレンチを設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。谷が広いこともあって4小区に分けて窯跡を想定した確認調査を実施したが、遺構は確認されなかった。確認調査を合計トレンチ4本、グリッド118ヶ所設定した。遺物は近世陶磁器と中世の須恵器が少量出土している。

No.16地点はスリバチ池西側の用地外断面で灰層が確認されていることから、その上方にトレンチを設定したが遺構・遺物は確認されなかった。



第7図 No.14地点(ロクロ谷窯跡)確認調査グリッド配置図

No17地点はNo16地点の対面丘陵に位置する。窯跡を想定して、トレンチ2本、グリッド20ヶ所を設定して確認調査を行った。遺構・遺物は確認されなかった。

No18地点は字仁地区の南北に縦断する里道の1つの法面で分布調査時に灰層・焼土層を確認した地点である。隣接した部分ならびにさらに離れた奥と道の反対部分の3本のトレンチを設定したが、新たな遺構は確認されなかった。5㎡前後と小面積の全面調査が必要となったので、第2次確認調査時に全面調査を実施し、「ニラミ岩東遺跡」とした。周辺部分も窯跡の可能性が考えられたので、谷西側に36ヶ所、東側に29ヶ所のグリッドを設定して調査を行ったが、遺構は認められなかった。

No19地点はNo18地点の東側の谷部である。窯跡を想定して41ヶ所のグリッドを設定して調査したが、遺構は確認できなかった。

No20地点は事業用地北東部に位置している。分布調査で田谷町から小印南町・青野町への里道断面で、クロボク層と土師器片（後に弥生土器片と判明）を確認した地点である。里道では緩やかな頂部にあたり、尾根筋では鞍部になっている。僅かな平坦面が存在しているので、道の両側にトレンチを設定した。併せて法面を清掃し断面観察を行った。東側のトレンチ1で土器棺を検出した。弥生時代の集落跡が広がる可能性を考えて、南斜面と尾根部にトレンチを追加設定したが、遺構・包含層など認められなかった。北側の段丘面に集落は展開したのであろうか。その結果、トレンチ1西側小面積で全面調査が必要となったので、第2次確認調査段階に65㎡の調査を行った。遺跡名は小字から「高尾遺跡」とした。

IV 野田窯跡の調査結果

(I) 野田1号窯跡

1. 外形

水田部に隣接した谷の丘陵部に位置している。中国縦貫道が通っている谷地形の南東から北西に入り込む谷の最奥部に存在する。谷入口には松尾池があり、窯跡地形の通常の要因を備えている。最も奥にも小さな溜池が築かれている。

谷奥部の緩やかな斜面から急斜面に変換する部分を選んでいる。窯跡が築かれている部分から北側へも小さな谷が続いているが、緩斜面となっていることから選地されなかったのであろうか。谷入口部の南側はやや急な斜面となっている。北側中央部もやや急な斜面である。

奥まった地形変換線に等高線に直交して築かれている。2基築かれているが、南側の方が1号窯跡である。ともに地形に即して構築されていることから、主軸方向は異なっている。灰原の2次堆積部分では重なっている。標高では松尾池で87m、谷奥部で91.5m、1号窯跡焚口部で101m、煙出し部で104mである。

明瞭な遺構かどうか断定しかねるが、窯体に平行して溝が存在する。窯体北側に標高の高い西側の調査区外から延びている。調査区内で12.5mの長さがあり、幅は1.2~2.2mと変化するが中央部分が狭くなっている。最大の深さは0.7mを測る。

2. 窯体

平面的にはほぼ完存している窯跡である。天井部も一部が残存しており、保存状態の良い方の窯跡であろう。窯跡の全長は7.68mと一般的であるが、燃焼部・前庭部が長いことが特徴である。地山である岩盤を掘り下げて築いた窯で、天井部と一部側壁は窯壁で作った半地下式の登り窯である。調査段階で中央部分の天井部が一部残っていた。その上下は天井が落下しており、窯体に堆積していた。

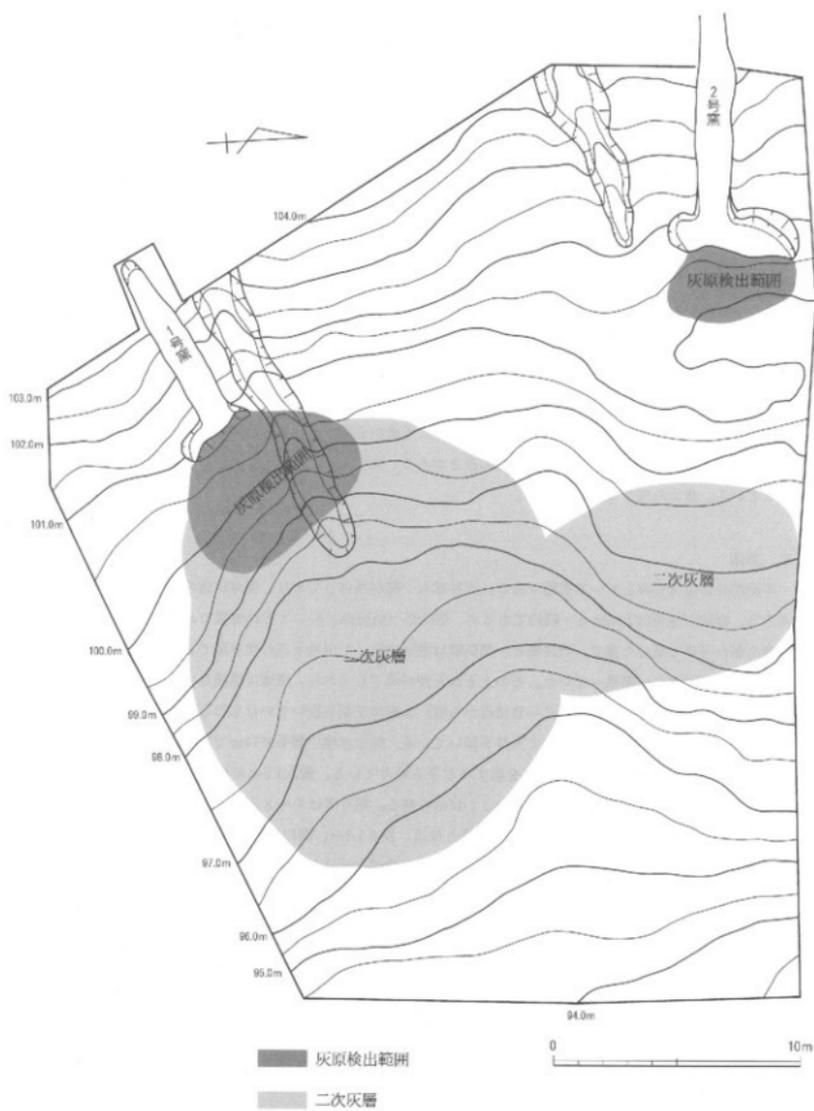
焼成部奥半(平面図(第9図)C-D付近から奥)は岩盤を削り抜いていたものと思われ、岩盤も赤化しており、その内側に粘土を貼って天井を築いている。粘土は厚い箇所では14cmである。

焼成部の燃焼部との境付近は貼り床を施すなど手を加えている。最大1.5mの長さで貼り床がなされている。この部分の幅が最大になっており、1.45mを測る。貼り床は6~8cmと極端に厚くはない。貼り床部分から開口部まではほぼ平坦で、燃焼部となる。長さ1.7m、開口部での幅は1.3mを測る。燃焼部にはほぼ相当して天井部が落下している。換言すれば焼成部は天井が残っていたことになる。両側壁は強く被熱している。側壁は南壁で45cm、北壁で30cm残っている。

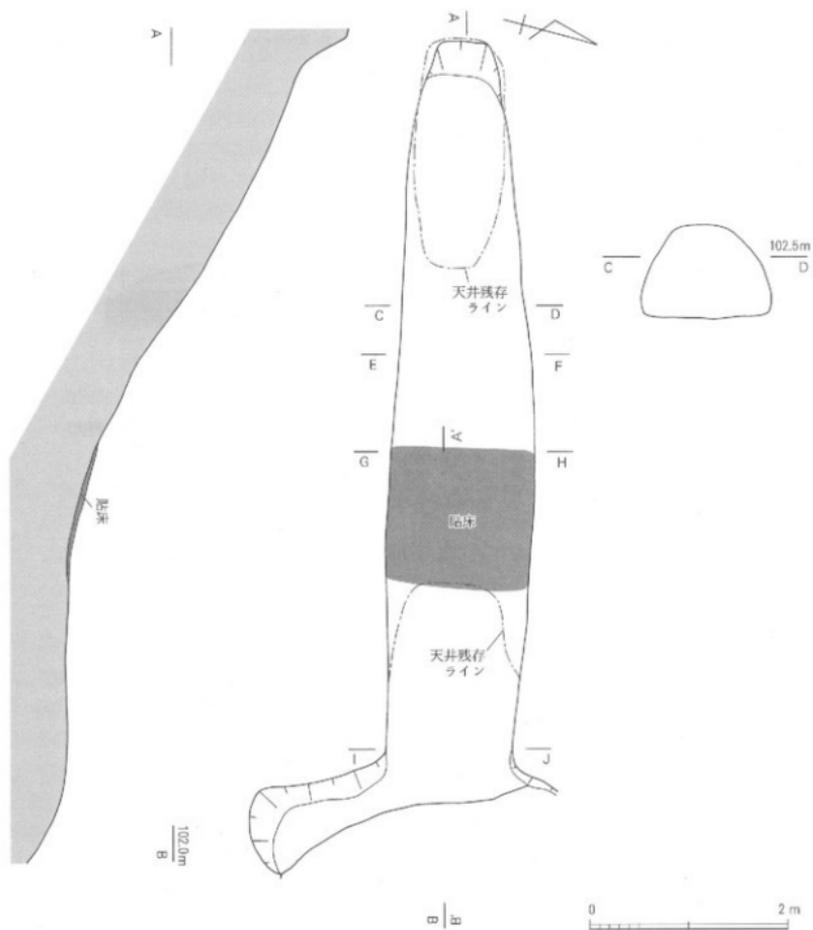
開口部前の前庭部は下方が流失している。南側で1.2mの幅で1.4m、北側で0.6mの幅で0.6m削り出して平坦面を作っている。

焼成部は平面で5.2mの長さを測る。煙出し部に向かって徐々に細くなっている。高さも同様に徐々に低くなっていく。貼り床の西端で幅1.45m、高さ1.2m、中央部で幅1.2m、高さ0.95m、煙出し部前で幅0.8mを測る。

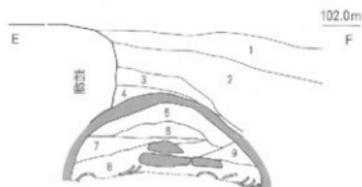
煙出し部は高さ0.5mあり上端で幅0.65mになっている。床や壁は赤変しているものの強く変化していない。



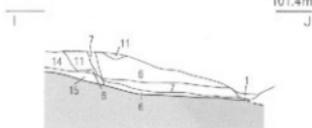
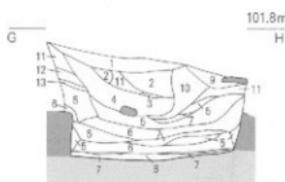
第 8 図 調査後地形測量図



第9図 1号窟実測図

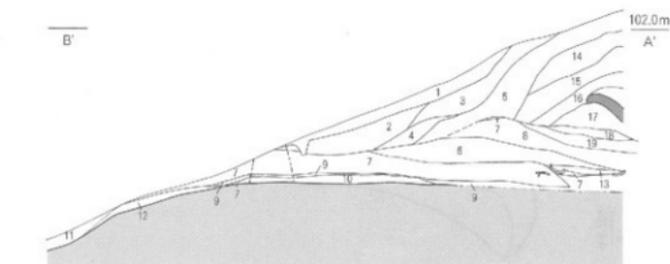


- 1 暗黄灰色砂礫
- 2 暗黄灰色砂礫 (礫なくなる)
- 3 地山客土 (黄灰礫 パラス)
- 4 岩盤赤化部分
- 5 2層と似るが赤化している 礫層
- 6 礫層 (地山礫)
- 7 暗赤褐砂礫
- 8 礫層 (5層と同じ 赤化)
- 9 黄灰色シルト (細砂)



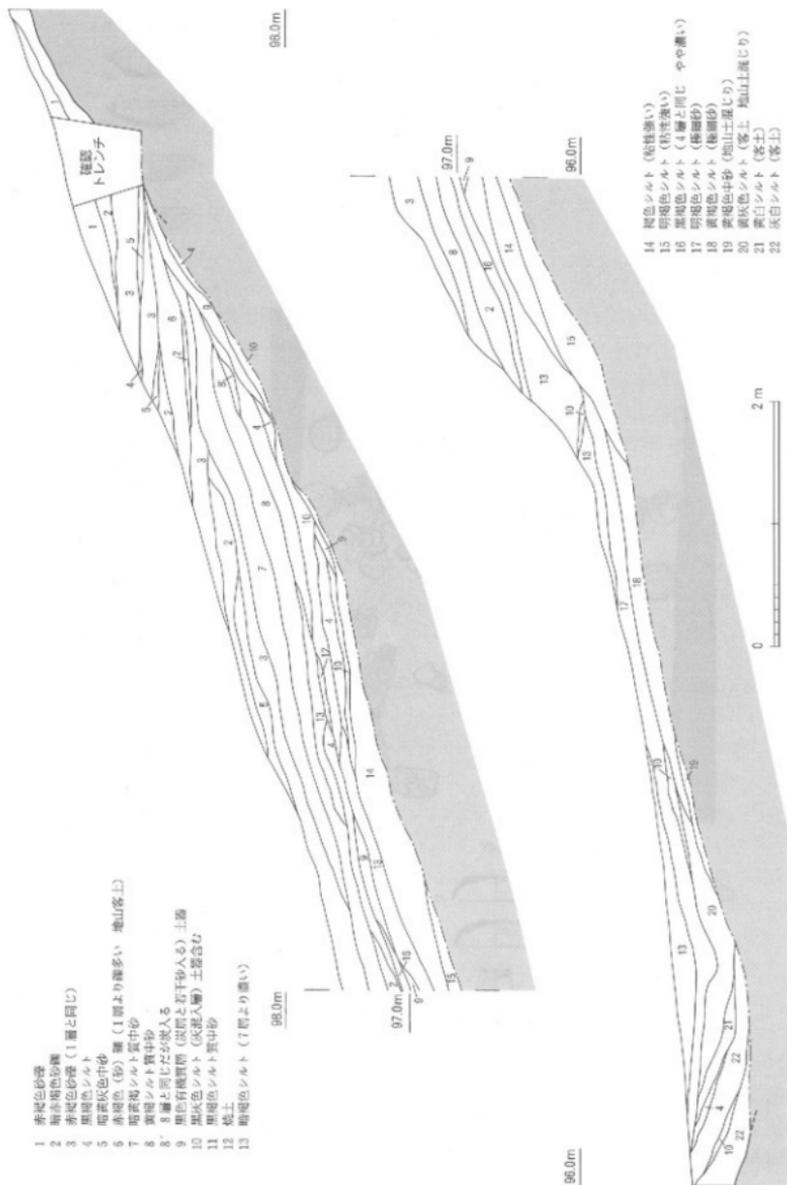
- | | |
|-----------|---|
| 1 暗黄灰色砂礫 | 8 6層に似るが粘性持つ (粘土か 土器少量含む) |
| 2 黄灰色シルト | 9 赤褐色中粗砂 (北部埋土 地山2次堆積) |
| 3 暗黄灰色シルト | 10 暗 (黄) 灰色~暗黄灰色シルト (2層と3層が混ざった土 ブロック状に黄色塊あり) |
| 4 黄灰色シルト | 11 雑土混じり暗赤褐色シルト |
| 5 黒褐色シルト | 12 暗赤土混じり暗赤褐色シルト (遊土多い) |
| 6 炭礫 | 13 暗灰褐色シルト (11層と炭混ざった層) |
| 7 焼土 | 14 暗黄灰色シルト |
| | 15 (暗) 黄灰色砂礫 |

■ 高壁

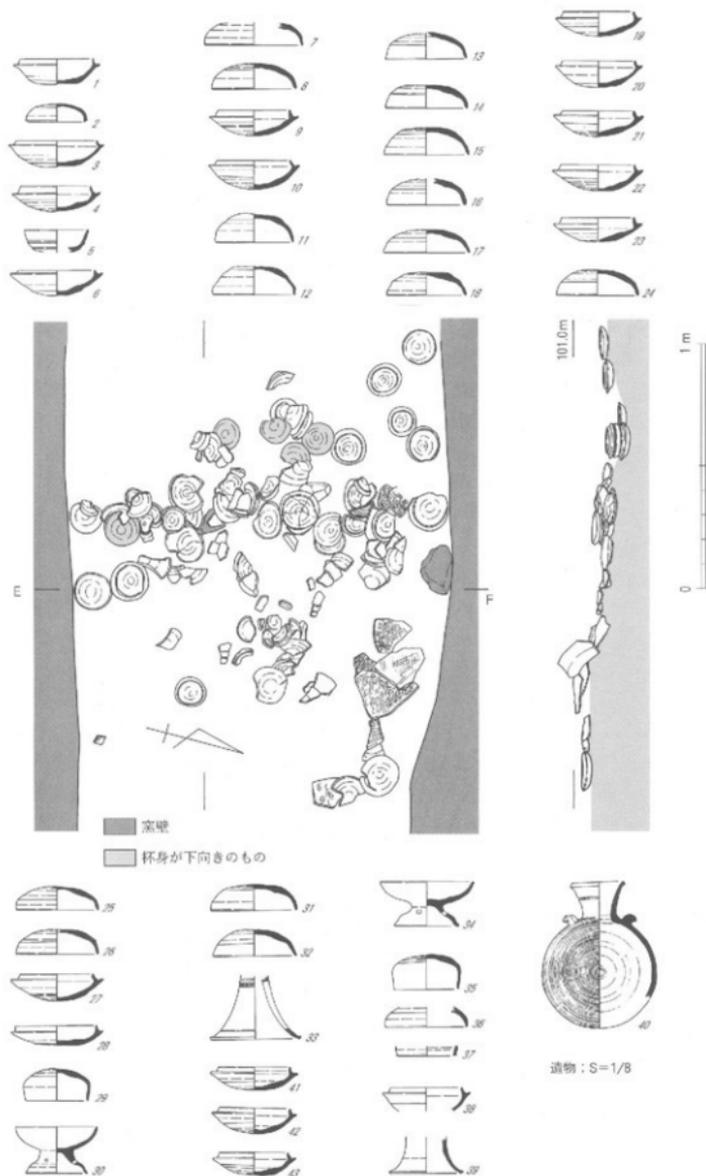


- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1 暗黄灰色砂礫 (地山礫) | 9 焼土 |
| 2 灰色砂礫 (炭灰含む) | 10 黒褐色シルト質中砂 (6層とはほぼ同じ) |
| 3 黄灰色シルト (地山礫若干含む) | 11 黒褐色シルト質中砂 (6層とはほぼ同じ、やや淡い) |
| 4 暗黄灰色シルト (3層に灰が多く含まれたもの) | 12 暗黄灰色中砂 |
| 5 黄灰色シルト (3層よりやや淡いが基本的に同じ) | 13 黄灰色シルト (細砂) |
| 6 黒褐色土 (焼土、炭、灰含む) 土器多い | 14 暗黄灰色砂礫 (15層より礫少なくなる) |
| 7 炭礫 | 15 暗黄灰色砂礫 |
| 8 (地山客土) 黄褐色土 (礫層) | 16 地山礫 (黄灰色礫) |
| | 17 暗黄灰色砂礫 (やや赤化している) |
| | 18 地山礫 |
| | 19 暗赤褐砂礫 |

第10図 1号窯土層断面図



第11図 1号灰原土層断面図



第12図 1号窯窯体土器出土状態

全長は開口部から煙出し部まで7.68mあり、それに前庭部が1.2mあり、全長8.88mとなる。最大幅は中央の焼成部手前で1.45mとなる。床面の傾斜角は燃焼部がほぼ平坦で、焼成部手前(貼り床部)で2°ある。貼り床から1mが最も急になっており、35°になっている。そこから奥も急ではあるがやや緩くなり30°となっており、煙出しは垂直に近い78°である。

床面は焼成部手前の貼り床をしている部分以外では複数は認められない。床面の被熱状況は燃焼部から焼成部手前がより強く変化している。両側壁もほぼ同様な部分で赤変が認められるが、北壁の方が顕著である。天井部が落下している部分は残存している両側壁が強く被熱しており、窯体内の堆積土中に落下した天井部や窯壁もよく焼けている。

天井部が残存しているところの断面形状は半円形になっている。燃焼部など下半分では窯壁が直に立っており、その上に天井が載る方形の上に半円が付く形状になるようである。

窯体床面で須臾器が現状で出土している。最も角度の急な焼成部で出土している。手前に壺・壺の大形品があり、奥側に杯が集中している。蓋も含めて上向きに置かれているものが多い。杯のセットとして焼成するのではなく、どちらも多くは上向きにして焼成している。蓋と身を分けている部分もあり、身と蓋を混ぜて3個重ねているものも認められる。この部分の土器は生焼け状態で、窯詰めの状態を知らせてくれる良好な資料である。

3. 灰原

灰原は広くはない。前庭部下に幅7.5mで長さ5mに及んでいる。そこから、さらに14mの長さの2次堆積部分がある。須臾器を包含する黒褐色土層は厚い部分で20cm前後である。遺物がほとんど入らない純粋な炭層・焼土層もある。2次堆積部分は当然、地山土や砂層が混じっており、また間層が存在する部分もある。遺物量は多い方ではない。

4. 出土遺物(第13図～18図: 1～139)

図化点数は139点と窯跡としては少ない方である。出土総数もコンテナ45箱と少ない。換乗回数が高いことを表しているものと思われる。

(1)～(5)は床面出土の土器で、そのうち(1)～(4)までは出土状態を図化して取り上げた遺物である。報告№は出来る限り取り上げ№に合わせて焼成部下部から番号を付けている。下層のものは後で取り上げたことから、大きな番号になっている。(1)は杯身で口径11.8cm、器高4.15cmを測る。底部は平底ぎみで体部は直線的に広がり、受部は水平に短くなり端部は丸い。立ち上がりは僅かに外反し端部は丸い。底部はへら切りでへら記号が施されている。(2)は壺用蓋で内湾する体部から端部は内外に僅かに肥厚し面となる。内外面ともに自然軸が付着しており、天井部はロクロケズリがなされている。灰色で胎土・焼成は良好である。(3)は杯身で内湾する体部から水平な受部、外反する立ち上がりは短く端部は丸い。底部はへら切りのち板状工具による不定方向のナデがみられる。小石粒を含んでいる。(4)も杯身であるが口径11.2cm、器高4.2cmと(3)より小形である。器形も異なり、立ち上がりが高く直線的に近い外反である。色調もやや白っぽく灰白を呈する。技法は同じである。(5)は高杯で脚部を欠いている。口径10.3cmで、体部に2条の凹線を持ち段になっている。内外面と断面にも自然軸が付着している。(6)は杯身で底部に十字のへら記号がある。体部から受部へ内湾しており、立ち上がりは短く内傾している。(7)は杯蓋片で天井部は残存していない。(8)も杯蓋で内湾する天井部にへら記号がみられる。交差しない2本

の直線である。天井部はロクロケズリであるが、強くない。明瞭な稜線を持たずに端部は丸い。クサリ礫を胎土に含み赤褐の生焼け状態である。口径13.4cm、器高4.2cmを測る。⑨⑩は杯身であるが、器形は微妙に変化がある。⑨は底部から受部へと内湾する。端部は丸く、上方に延びる。受部近くまでロクロケズリが施されているのが特徴である。立ち上がりは直立きみに内傾し、端部は尖る。立ち上がりは1cm余りと高くはない。全体的に器壁は厚めで、特に口縁部は厚い。口径11.6cm、器高4.15cmである。⑩も内湾する体部で、体部は⑨と類似しており厚めである。受部は短く上方に短く延びる。立ち上がりが異なっており、大きく内傾する。端部は丸く、やや肥厚きみである。ロクロケズリの範囲は狭く下半だけである。口径11.8cmで器高4.7cmを測る。⑪～⑬は杯蓋である。原則的に内湾する天井部から口縁部になり、稜線は有さない。口縁端部は丸い。天井部はロクロケズリがみられるものと、ヘラ切りののちナデ調整するものがある。口径は12.5～13.5cmと多少幅がある。器高も3.8～4.75cmと差が認められる。口径が大きい方が器高は低く、口径が小さいものが器高は高いという特徴がある。焼成も良好な土器と不良な土器がある。⑭～⑯は杯身である。口径11.4～11.9cm、器高4.0～4.3cmと大きな差はない。内湾する体部で受部は短く、端部は丸いものと尖るものがある。端部が丸いものは器壁が厚い。⑭だけ底部はヘラ切りで器形も底部がやや平坦になる。⑮のように重ね焼きを行ったことによる別の土器片が付着しているものもある。自然釉が付いている。⑯は底部にヘラ記号がある。⑰～⑱は焼成部の奥寄り北側に置かれていたもので、杯蓋である。⑰は内湾する体部で、⑲⑳は肩部に弱い稜線を持っている。ともに天井部はロクロケズリで内面は1方向の仕上げナデが認められる。㉑は体部が内湾する杯身で他と共通点の高い個体である。立ち上がりは短く外反する。口径11.7cm、器高4.4cmである。㉒も杯身であるが扁平で器高3.3cmと低い。底部もヘラ切りで技法が異なっている。内面はロクロナデで仕上げナデが施されている。受部には重ね焼きによる土器片が付着している。焼け重が著しいが口径13.1cmを測る。㉓は壺用の蓋である。口径9.8cm、器高5.3cmと器高が高い。天井部は内湾し口縁部に向けて内傾する。端部は丸い。天井部はロクロケズリで、生焼けである。㉔は高杯である。内湾する杯部で端部は丸い。脚台は低く、接合部から外傾し屈曲して僅かに外反して丸い端部となる。3方の円形透孔がある。焼成は悪く灰を呈している。表面磨滅著しい。口径13.0cm、器高7.6cmである。㉕㉖は杯蓋で内湾する体部で天井部にはロクロケズリがみられる。内面には仕上げナデが施される。㉗の天井部にはヘラ記号がみられる。㉘は高杯脚部である。ラップ状に裾広がりになり、端部付近で細くなり端部は僅かに肥厚する。3方向に透孔があると思われるが、残存度から数は断定できず幅も不明である。透孔の上下に沈線が施されている。ともに1条の沈線で、上部は透孔のない部分に2条の沈線が認められる。裾部の径14.3cm、残存高10.35cmを測り、灰白をしている。㉙は低脚の高杯である。口径14.9cm、裾部径10.2cm、器高7.35cmを測る。杯部は浅く内湾しており、底部は水平に近い。脚部は外傾してから屈曲し、短く外反する。端部は丸く尖りきみである。脚部上部に円形の透孔があり、3方向かと思われる。杯部下半はロクロケズリで全体はロクロナデである。焼成は甘く、砂粒を含んでいる。㉚は壺用の蓋であろう。口径10.2cm、器高5.7cmを測る。体部は高く内傾する。天井部はロクロケズリで、内面は1方向の仕上げナデが見られる。天井部は器壁が厚くなっている。㉛は杯蓋で天井部を欠いている。焼成は良好であるが赤褐をしている。数片に分かれて出土している。内湾する体部で端部は尖りきみである。㉜は内傾する口縁部を持つ壺用蓋と思われる破片である。ロクロナデで仕上げられており、自然釉が付着している。端部は僅かに内外に肥厚しておりシャープな作りである。口径8.8cm、残存高1.6cmを測る。㉝は杯身で口径11.4cm、残存高3.8cmを測る。内湾する体部から僅かに外反する短い受部になる。立ち上がりは外反し端部

は丸い。④は窯壁が付着した高杯脚部である。外反してから堀が開き端部は肥厚する。自然釉も付着している。小片で透孔の数などは不明である。⑤は提瓶で完形品ではないが、ほぼ全体像を推定できるものである。器高23.9cm、口径8.3cm、最大腹径18.6cmを測る。短く外反する把手が1対付加されている。カキメが施されている。

⑥からは焼成状況を検出し図化した土器群の下から出土した土器である。間に貼り床などがあるのではなく、確實に遡る時期の遺物ではない。⑦～⑩は杯身で3個重ねた状態で検出した。上向きでなく、口縁部を下にして出土している。似た形態の土器で、底部はロクロケズリがなされ、内面は1方向の仕上げナデがみられる。器高に変化があるのは重ねた時の状況によるのであろうか。外反する立ちあがり、口唇部内面にロクロナデによる浅い凹みが認められる。焼成はやや悪く砂粒を胎土に含んでいる。

⑪～⑭は燃焼部に近い床面から出土している。⑫は杯蓋で天井部を欠くが体部上半から天井部にかけては器壁が厚くなっている。直線的で屈曲して直立する口縁部になる。端部は丸い。⑬も杯蓋で丸い天井部を有する。天井部はロクロケズリ、内面は仕上げナデが施されている。口径12.8cm、器高4.05cmを測る。⑭～⑯は杯身で、⑭だけ底部が平底きみでタイプが異なっている。口径も10.7cmとやや小振りである。成形痕の可能性もあるへら記号が底部に認められる。⑭以外の杯身は床面の他の杯身に比べるとやや器壁が厚くなり端部も丸くなっている。ロクロナデで底部はロクロケズリである。

⑰～⑲は床面奥半の出土である。⑰～⑲は杯蓋で、内湾する体部で天井部が丸みを持つもの⑰～⑲と、天井部が丸く口縁部が内湾するもの⑲と、口径が小さめで器高の高いもの⑲と、器高が低く天井部が平坦なもの⑲に分けられる。⑲⑲は天井部にはへら切りが行われナデで仕上げている。それ以外はロクロケズリである。内面はすべて仕上げナデが施されている。⑲～⑲の天井部にはへら記号が認められ、⑲の内面には当て具である同心円文の痕跡が看取される。⑲には自然釉が付着している。

⑳～㉑は杯身である。㉑は平底きみで体部は外傾し、外側に広がる受部につながる。受部端部は短く丸い。立ちあがりには僅かに外反し端部は丸い。比較的シャープなつくりである。底部はへら切りのちナデで仕上げ、全体はロクロナデである。口径12.2cm、器高4.4cmを測る。㉑は平底きみの丸底で体部は外傾する。受部は体部から直線的に延びて短く丸い。立ちあがり短く外反する。端部は尖る。技法は㉑と同じである。㉑は不安定な平たいめの底部から外傾する体部からやや開く受部になる。口縁部は底部に比べると器壁が薄くなっている。立ちあがり外反し端部は丸い。口径11.2cm、器高4.1cmを測る。砂粒を含んでいる。

㉒は高杯蓋で径3.1cmのつまろ部が付いている。口径13.7cm、器高5.65cmを測る。内湾する体部で明瞭な稜線を持たないものの全体的にはシャープなつくりである。天井部はロクロケズリ、内面は1方向の仕上げナデである。焼成は良好で胎土は緻密である。㉓は高杯の杯部の破片で、㉒とセットになるものと思われる。焼きひずりが大きく窯壁・自然釉が付着している。口径13.6cmで、内湾する体部から水平に延びる受部となる。受部は短く端部は丸い。立ちあがり外反している。㉔は提瓶の口縁部である。口径7.8cm、残存高5.95cmを測る。外傾しており、端部は丸い。外面中央に2条の凹線に挟まれた部分にクシによる列点文を施し文様帯としている。㉕は壺口縁部で、口径13.2cm、残存高7.0cmを測る。体部内面は同心円、外面は平行のタタキがみられる。口縁部はロクロナデで、外面はカキメである。外反して端部は折り曲げて面となっている。㉖は壺口縁部で、内面は同心円、外面は平行のタタキがみられる。内湾する体部から短く外反する口縁部になる。端部は内外に肥厚している。㉗も壺口縁部で口径25.8cmと大形である。僅かに内湾する体部から大きく屈曲し外傾する口縁部になる。端部は面になっている。

体部はタキ成形し外面にはカキメがみられる。87は大形の甕口縁部で、口径32.1cm、残存高13.0cmを測る。頸部近くは外傾し途中から緩やかに外反し、端部付近は逆に内湾する。端部は折り曲げて面になっている。端面には斜格子状にへうで施文している。長い頸部はハケ整形ののち2条1組の凹線を中央と下端に2組施している。88は壺の肩部の破片で縦方向に半円形の把手を付けている。個数は不明であるが、3方向であろうか。内面は同心円文、外面は平行タキが見られる。外面はその後カキメを施している。89は提瓶で口縁部を欠いている。内面にも自然軸が付いていることから、焼成時に割れたものと思われる。外面には別の須恵器の破片(變胴部)が付いている。

90~92は床面直上の土器である。大半は窯跡下半の燃焼部から焼成部の平坦な部分にかけてのところから出土している。90~91は杯蓋で天井部が丸みあるものとやや平たいものがある。技法は同じでロクロナデ、天井部はロクロケズリで作っている。91にはへう記号がみられる。92は器高が4.8cmと他より高く口縁部が内湾している。内面の仕上げナデも丁寧である。93は甕用の蓋である。天井部を欠いているが内湾するもので、口縁部は直立きみである。肩部に1条の凹線があり、端部は外側に尖らす。自然軸が付着している。口径10.4cmと小さく、残存高は4.0cmである。94~95は杯身で、94は内湾する底部から水平きみに延びる受部に続く。立ちあがりは外反する。口径11.9cm、器高4.0cmを測る。細砂混じりの胎土で酸化状態の橙を呈している。95は平底きみで底部と体部に变化点があり、甘い稜線になっている。体部は外傾し受部へと続く。立ちあがりは内傾し端部を外側につまみ出している。96は器壁が厚く外傾する体部から水平きみの受部になり、端部は丸い。立ちあがりは僅かに外反する。底部にへう記号が認められる。底部はへう切りののちナデで仕上げている。97は高杯杯部で直立する口縁部から内湾する体部になる。端部は丸く、口径12.0cmを測る。

98~99は窯体埋土から出土している。歪んでいることもあるが、杯蓋の形状は異なっている。98は内湾する天井部から外傾する口縁部になる。端部は丸く、口径13.3cm、器高4.45cmを測る。クサリ礫を胎土に含み、焼成はやや不良である。99は器高4.05cmとやや扁平な形態をしている。天井部は平たく内湾する口縁部になる。端部は丸く、天井部はロクロケズリで、内面は1方向の仕上げナデがみられる。99はさらに扁平で、口径14.0cmで器高2.7cmと低い。器壁は厚めで、天井部は平たく口縁部は内湾する。内面に重ね焼きの痕跡である他の土器片が付いている。自然軸や窯壁も付着しており、大きく歪んでいる。99は甕用の蓋で天井部を欠く。内湾する天井部から内傾する口縁部になり、端部は丸い。变化点の下に1条の凹線がみられる。天井部にはロクロケズリがみられ、口径9.0cmを測る。99は焼き歪みのある甕である。現状では肩の張った内湾する体部から外反する短い口縁部になる。端部は内外に肥厚している。体部内面は同心円タキで、外面は平行タキのちカキメを施している。口縁部内面にへう記号が認められる。灰で焼成は良好、砂粒を少量含んでいる。99は鉢で口径13.6cm、残存高5.2cmを測る。内湾する体部から外反する短い口縁部になり、端部は丸い。全体的に自然軸が付着している。99も鉢である。口径17.4cmが最大径となるもので、角張った端部で短く外反する口縁部である。体部は内湾しているが内側に大きく傾いている。小石粒を含んでいる。

99からは灰原の土器である。99~99は杯蓋である。窯跡出土ということで歪みが大きい土器も多い。窯壁や自然軸・土器片が付いているものも多い。天井部が平たく口縁部が内湾するもの99~99、天井部が丸く外傾する口縁部を持つもの99~99、天井部は緩やかに内湾し外傾する口縁部を持つもの9999に分けられる。99~99には天井部にへう記号がある。99は天井部と体部の境に段を有している。一見、古相を示す形態であるが、全体的には器高・口径も余り変わらないようである。99は歪みが大きい可能性が

高いものである。直線的な天井部から垂下する口縁部になっている。

㉑～㉒は杯身である。器壁が薄いものと厚いものがある。㉑のように薄いものは口のつくりもシャープで個体的に古い時期を示すように思われる。底部もロクロケズリとヘラ切りのものがある。ヘラ切りの方が底部がやや厚いように思われ、㉒のように平底に近い形態もある。㉑の底部にはヘラ記号がある。㉒は変化があり扁平な器形である。器高2.35cmと低く、器壁も厚い。受部・立ちあがりともに低く厚い。口径は12.2cmと余り変化はない。

㉓は高杯でロクロナデで仕上げている。外傾する口縁部で端部は丸い。㉔はハソウ口縁部で、口径13.4cmを測る。頸部から外反し、さらに屈曲して僅かに外反する口縁部となり二重口縁のようになっている。端部は角張りきみで、器壁は薄く仕上げられている。㉕～㉖は高杯脚部である。外反して開き端部が肥厚している。方形透孔の痕跡があるが、小片のため方向個数など不明である。

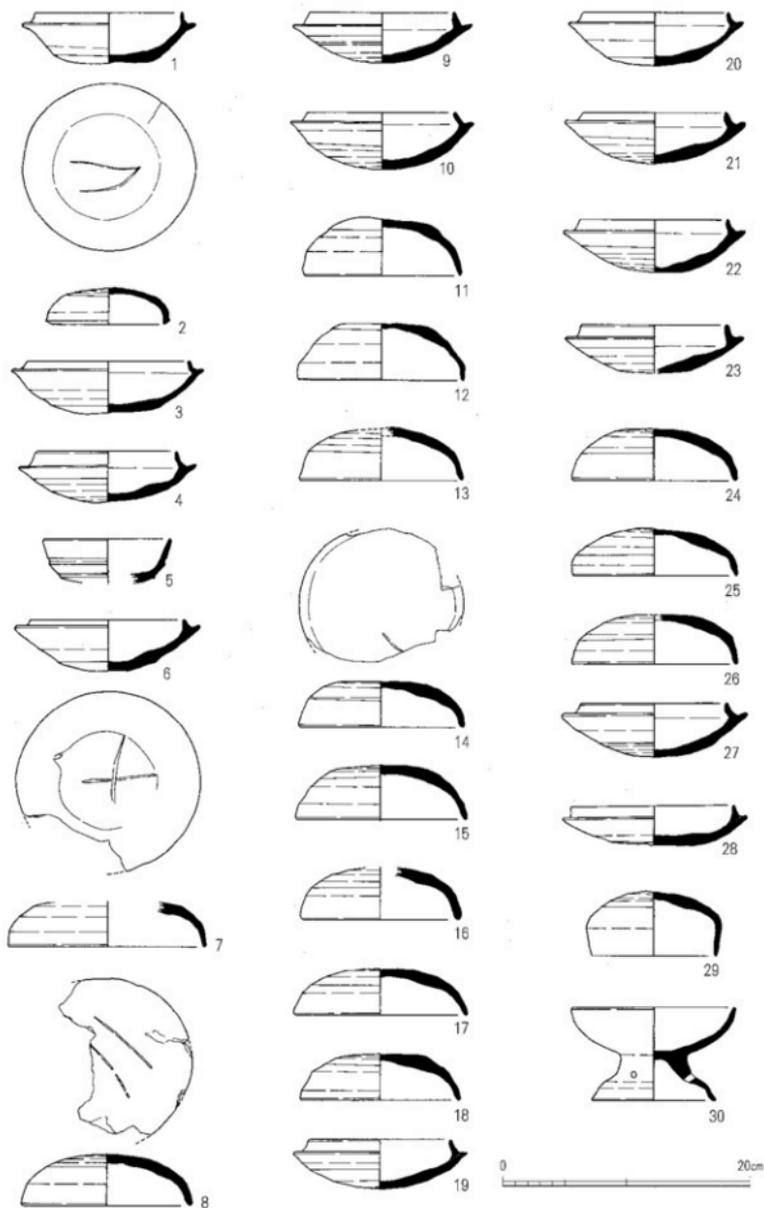
㉗は鉢で、僅かに内湾してそのまま口縁部になる。端部は内外に肥厚している。体部に2条の凹線が施されている。口径13.6cm、残存高7.1cmを測る。自然釉が付着している。台が付くものかもしれない。その場合は台付碗にすべきであろうか。㉘は小形の蓋である。口径8.3cm、残存高2.25cmを測る。内湾する口縁部で端部は僅かに内外に肥厚する。㉙～㉚は提瓶か壺の口縁部である。㉙は外傾し端部付近でやや反っている。端部は丸く、2条の凹線がみられる。㉚は外面下半に刺突文とカキメが施されている。端部は内側に尖らせている。㉛も同様な施文がなされている。口径8.3cmと少し大きく、プローションも外反してから内湾するもので異なっている。㉜は内湾し端部が肥厚するもので、ロクロナデで仕上げている。2条の凹線がある。㉝は体部と接合し、ある程度全体像が把握できる提瓶である。内湾し端部が肥厚する口縁部で、2条の凹線が施されている。

㉞は甕口縁部で内湾する体部から短く外反する口縁部になる。端部は折り曲げて面になっている。内面は同心円タタキ、外面は平行タタキである。㉟㊱は似た形状の甕口縁部である。外反し端部は面になっている。㊲も技法は同じ甕であるが、形状が異なっている。外反し端部を肥厚させている。端面に刺突文が施文されている。カキメも平行タタキののちに施されている。㊳は口径が28.8cmと大形の甕口縁部である。外傾し端部は面となって直立する。端面には斜格子と凹線がみられる。㊴も甕口縁部で端面に刺突文がみられる。㊵は甕体部で把手が付加されている。下方に内湾する把手で先は丸く尖っている。㊶は高杯脚部で外反して開いている。端部は角張っており、僅かに下へつまんでいる。不定形の透孔があるが、個数・方向は破片のため不明である。ロクロナデで自然釉が付着している。

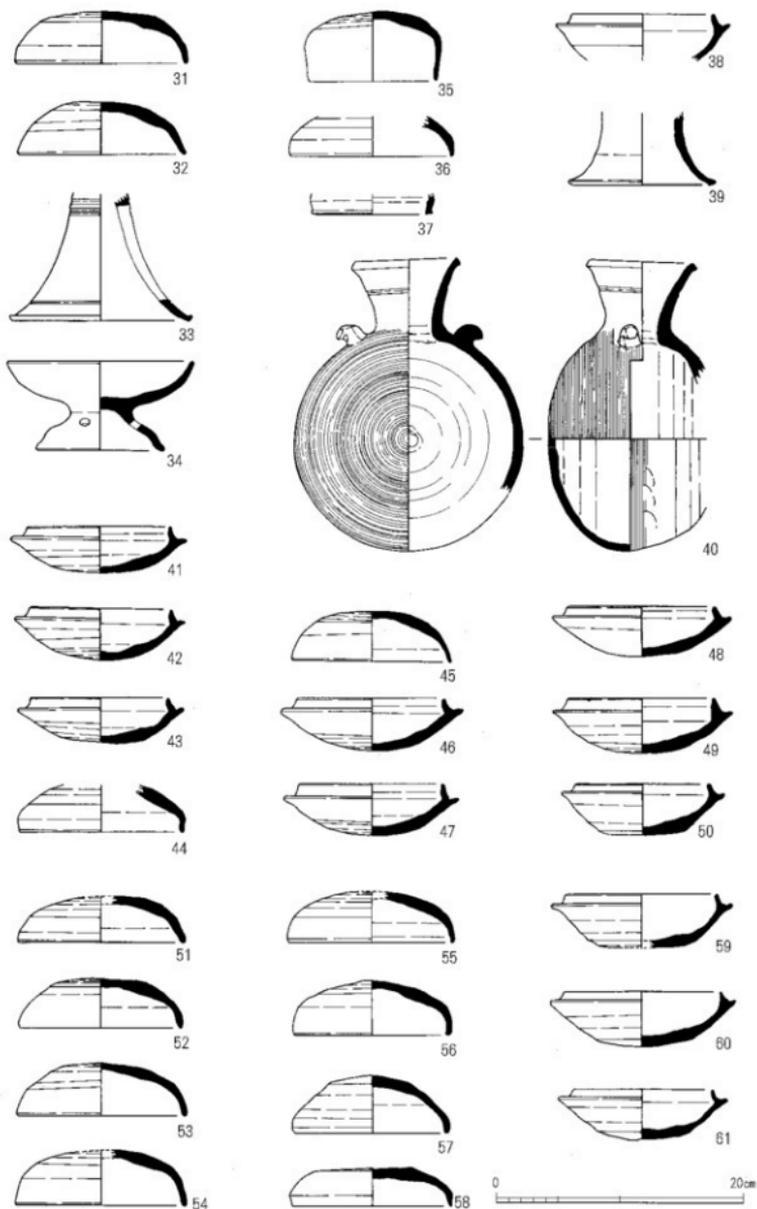
㊷～㊸は機械摺削や表面採集の須臾器である。㊷は壺の蓋で、丸い天井部から直立する口縁部になる。天井部はロクロケズリで内面は仕上げナデである。㊸は杯身で底部はヘラ切りののちナデている。平底きみで、内湾する体部となり、短く水平になる受部である。立ちあがりも短く外反する。端部は尖っている。㊹はすり鉢の底部である。底部はヘラ切りで4分の1の破片であるが、残存部には穿孔はない。平底で端部は肥厚し、内側から外傾する体部になる。

138・139は横瓶の破片である。体部側面の閉塞部分で、粘土板充填の痕跡が残る。外面には平行タタキがほぼ同方向に施されている。

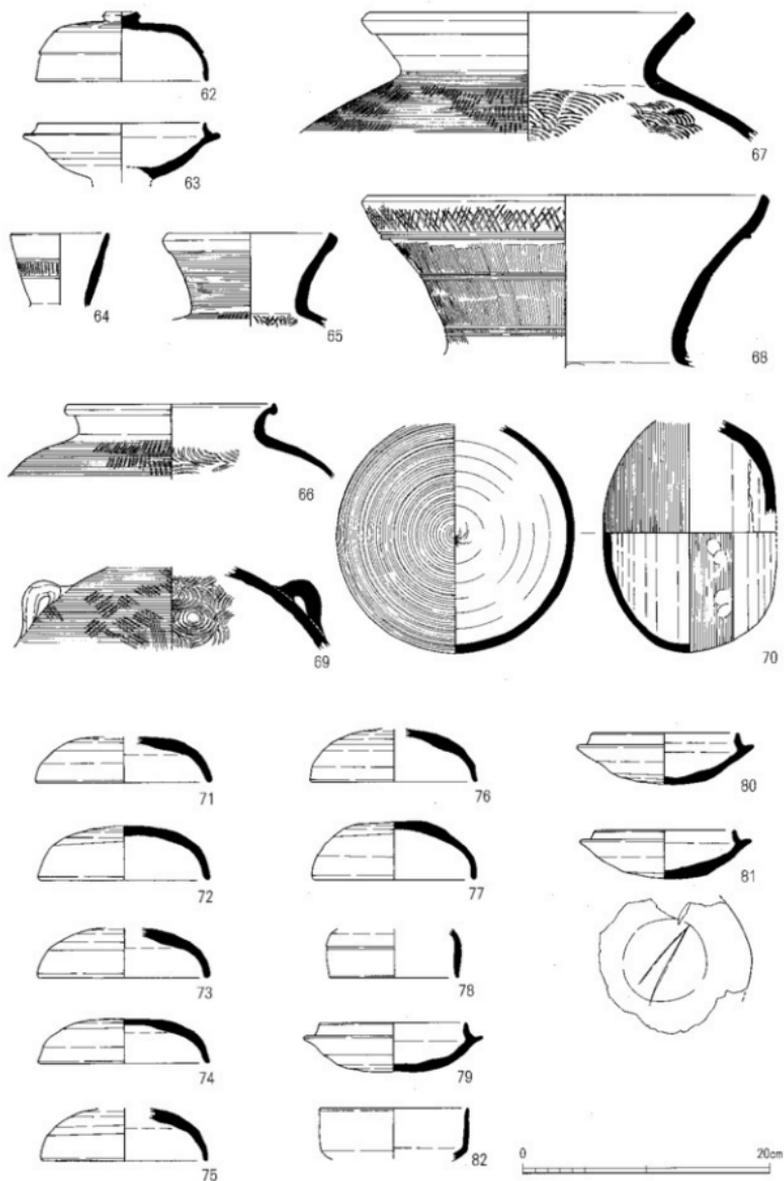
杯にヘラ記号が多いのが特徴の1つである。特徴的なものはないが、1～4本のヘラで記している。「十」「一」「V」などである。



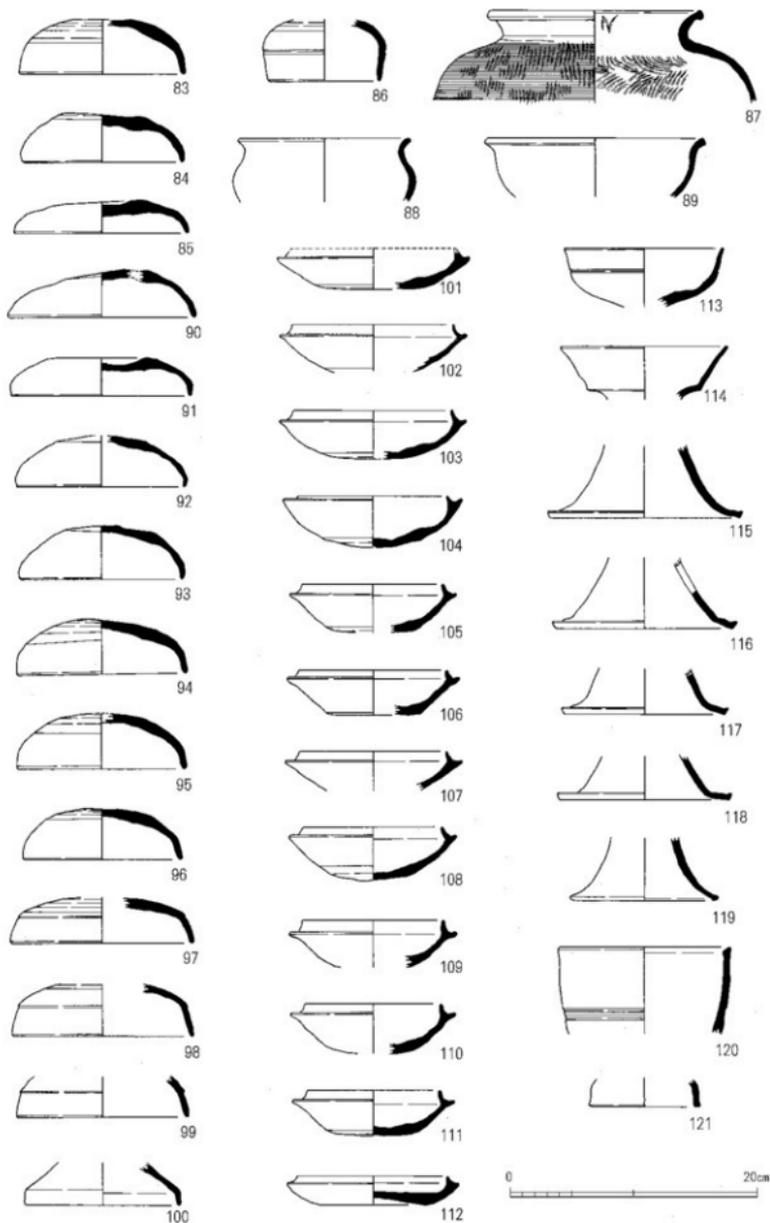
第13图 1号窝出土遗物实测图(1)



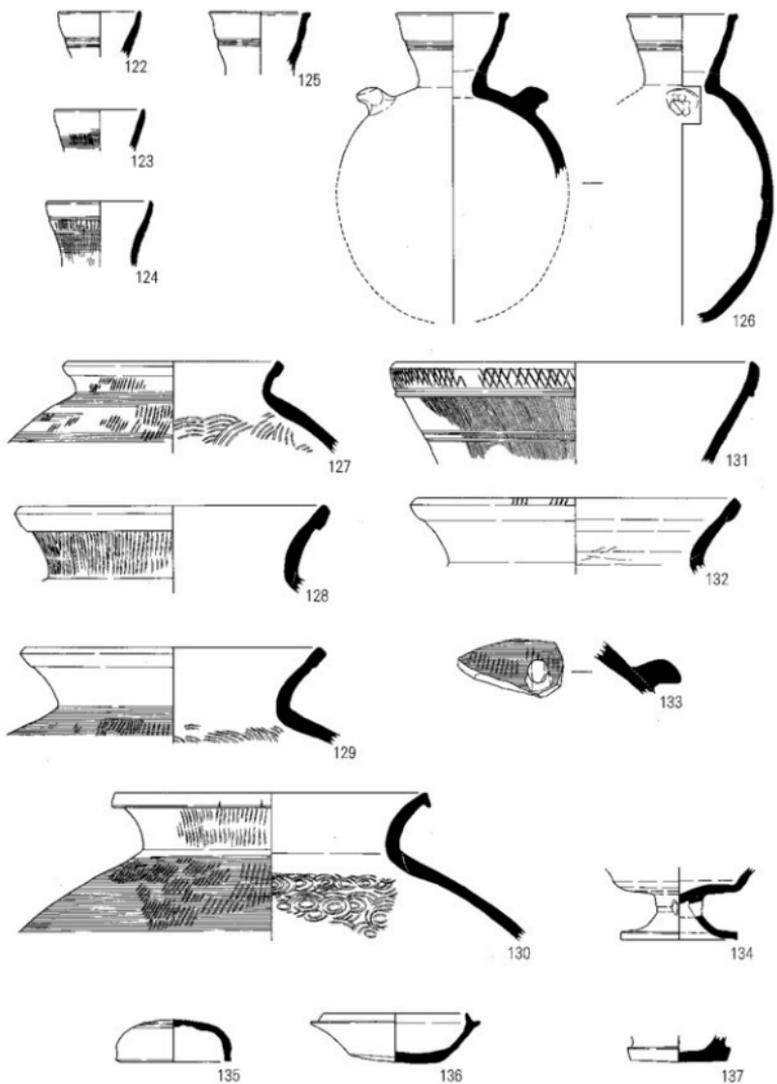
第14图 1号窑出土文物实测图(2)



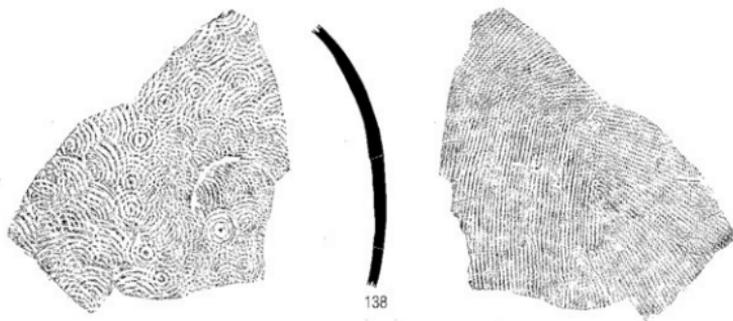
第15图 1号窑出土遗物实测图(3)



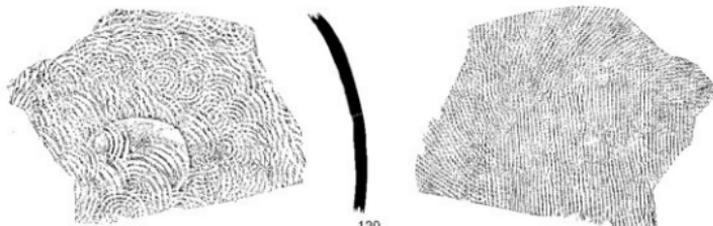
第16图 1号窑出土文物实测图(4)



第17图 1号窯出土遺物実測図(5)

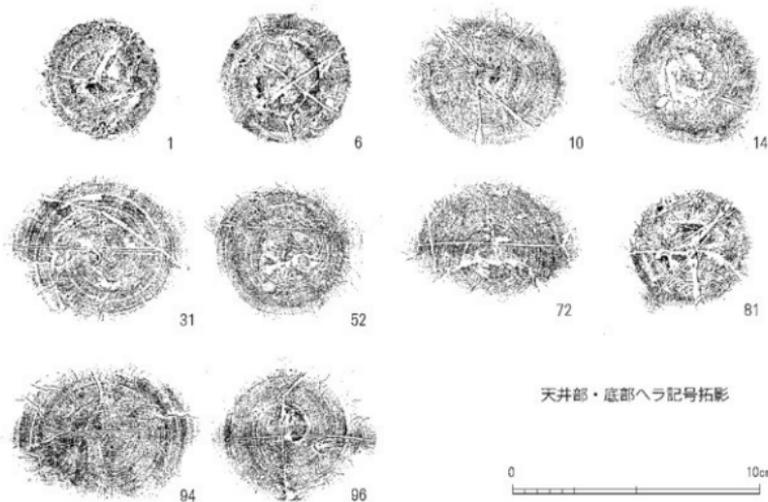


138



139

0 20cm



天井部・底部ヘラ記号拓影

0 10cm

第18図 1号窯出土物実測図(6)

(2) 野田2号窯跡

1. 外形

1号窯跡と基本的に地形は同じである。谷奥部にあたり、窯体の中心間で1号窯跡より22m北側に位置している。地表の状況では1号窯跡より僅かに緩やかな斜面に存在する。窯跡の主軸方位はN97° Eで1号窯跡とは異なっているが、地形的に等高線に直交して築いているためである。

窯体南側に1号窯跡と同じように溝が築かれている。最大幅2.4mで東側の標高の低い方に向かって徐々に細くなっている。深さも同じように西端が0.6mと最も深く、低くなるほど浅くなっている。1号窯跡の溝と比べると自然地形の可能性が高いかもしれない。

2. 窯体

全体の規模は1号窯跡より大きく全長9.8mを測る。地表の傾斜は緩やかであるが、窯跡自体の傾斜角は2号窯跡の方が急である。窯跡の構造は1号窯跡と類似している。燃焼部は平坦で比較長。全体の割合が高いのが特徴である。平坦部分は3.4mの長さがある。幅は開口部で1.23m、平坦面の端部(焼成部との境)で1.4mと中央に行くほど僅かながら幅を広げている。ここから高くなるにつれて幅を僅かながら広げはじめる。約1m奥の部分が最大幅になり1.55mとなる。最大幅の部分から煙出し部に向かって徐々に細くなっていく。煙出し部で幅0.6mになっている。

床面は1面と思われ、貼り床は認められない。調査時に窯体内には窯壁や天井が落下しており、焼成期間が短かったものと思われる。窯跡は岩盤を削り抜いて築いているが、焼成部手前から下については窯壁を立ち上げて築いている。床面の傾斜角は前庭部から燃焼部がほぼ平坦で、焼成部が30°である。焼成部下半の方が僅かに急である。1号窯跡と異なる点は焼成部上端で緩やかになることである。煙出し手前で水平に近いテラスになっている。そこから煙出しになるが10°と傾斜角は緩やかである。床面にはほとんど遺物は認められなかった。

開口部東側に前庭部を設けており、幅5.2mで長さ1.5mに地山を削り出して平坦面になっている。北側の方が広く設定されている。

窯壁は床面から立ち上げている。天井部が残存していないことから、高さは不明であるが、直に立ち上げていない分、1号窯跡よりは低いように思われる。断面形状は歪んだ半円形となっている。

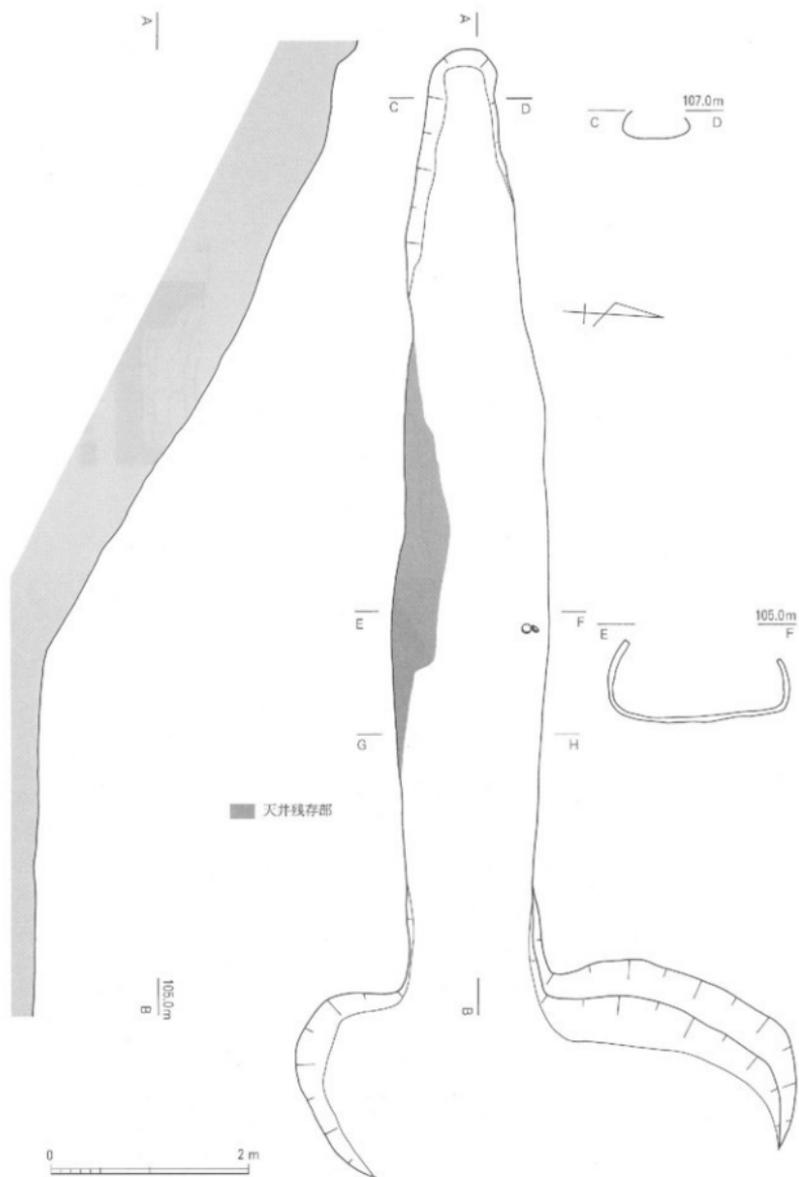
3. 灰原

灰原の範囲は狭い。前庭部の幅で4.5mの範囲に広がっている。遺物の密度は希薄であり、窯の操業状態を示すものと思われる。灰層の2次堆積は1号窯跡の灰層と接するところまで広がっている。須恵器はほとんど含まず、灰層の2次堆積と言える。

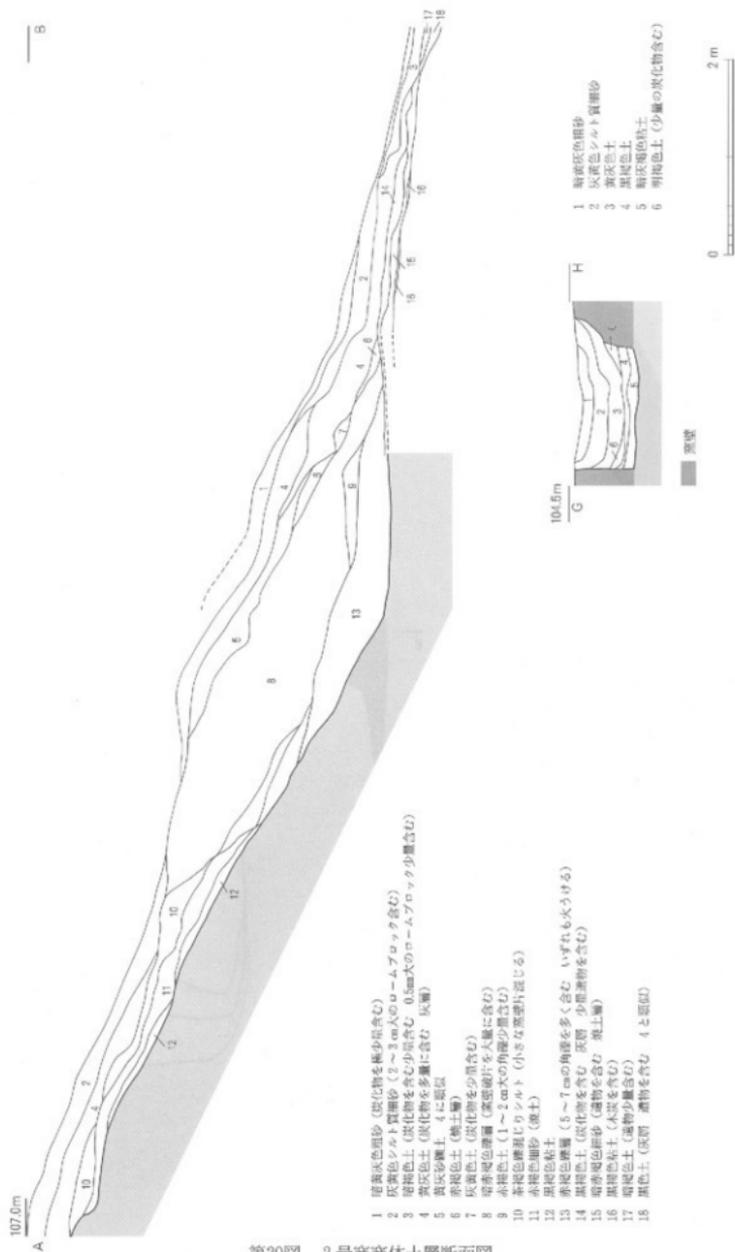
4. 出土遺物 (第21図: 140~157)

出土遺物の総量はコンテナ5箱と少なく、当然図化点数も18点と少ない。器種は杯・高杯・壺・甕・すり鉢・器台・蓋と変化に富んでいる。反面、通有に多く見られる杯の占める割合は低く、全体の土器量は少ない。

①②~④は窯体焼成部出土である。①は杯身で形態など1号窯跡のものと類似している。受部は体部から直線的に斜め方向に延び、端部は丸くなっている。立ち上がりは短く内傾している。立ち上がりを



第19图 2号窟实测图

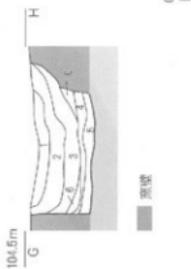


107.0m
A

B

- 1 暗灰色粗砂 (炭化物を極少量含む)
- 2 灰黄色シルト質細砂 (2~3cmのロームブロック含む)
- 3 暗褐色土 (炭化物を含む少量含む)
- 4 黄灰色土 (炭化物を多量に含む 灰層)
- 5 黄区砂礫土 4に泥炭
- 6 赤褐色土 (粘土層)
- 7 灰黄色土 (炭化物を少量含む)
- 8 暗赤褐色礫層 (炭質破片を大量に含む)
- 9 赤褐色土 (1~2cmの角礫少量含む)
- 10 赤褐色粘質シルト (小さな炭質片混じる)
- 11 赤褐色細砂 (硬土)
- 12 赤褐色粘土
- 13 赤褐色礫土 (5~7cmの角礫を多く含む いずれも火くける)
- 14 灰黄色土 (炭化物を含む 炭質 少量炭粉を含む)
- 15 暗赤褐色細砂 (炭粉を含む 硬土層)
- 16 暗褐色粘土 (木炭を含む)
- 17 暗褐色土 (炭粉少量含む)
- 18 黒色土 (炭質 炭粉を含む 4と類似)

- 1 暗赤褐色粗砂
- 2 灰黄色シルト質細砂
- 3 暗褐色土
- 4 黄区砂礫土
- 5 暗赤褐色粘土
- 6 暗褐色土 (少量の炭化物を含む)

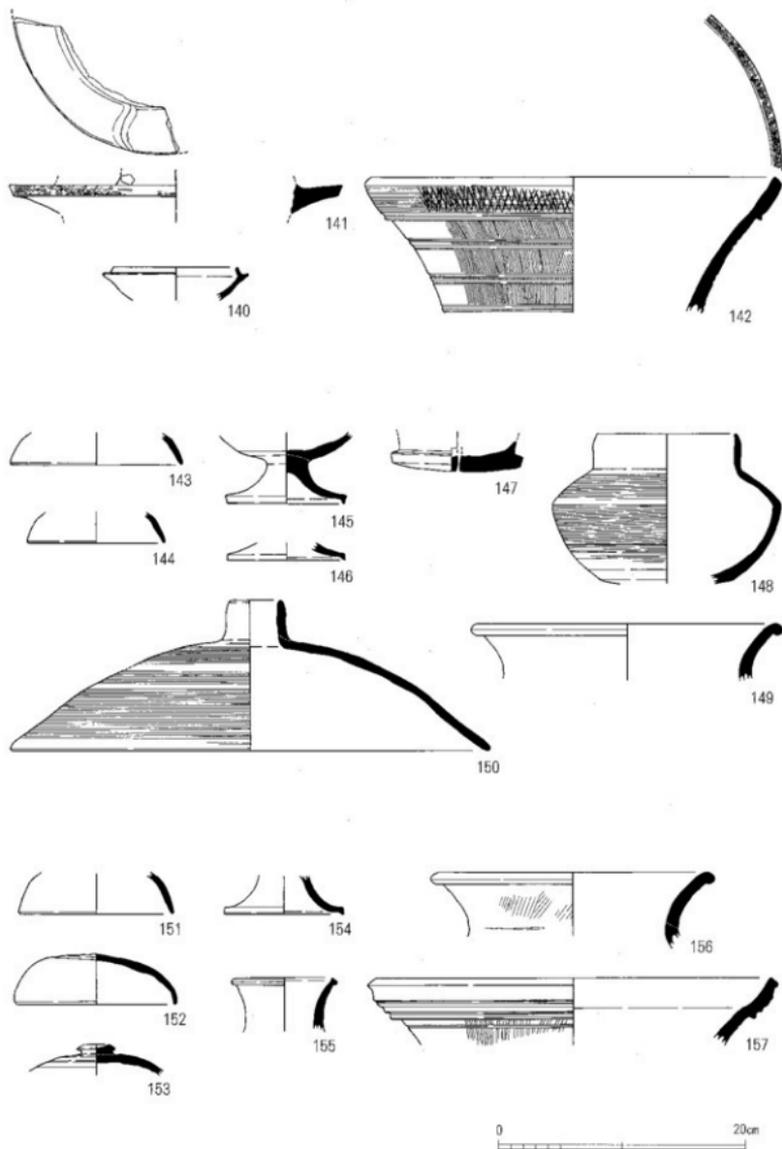


第20図 2号炭層体土層断面図

作る際の整形時に生じるへこみが体部にみられる。Ⅲは器台か壺で内面に装飾土器の取れた痕跡が認められる。罎の幅に手持ち壺などを装着した粘土が残っており、そのことから装飾土器と考えられる。色調は褐灰で胎土は良好である。罎部端面には波状文が施されている。Ⅳは壺口縁部で、外傾しており端部は玉縁状に大きく折り返している。断面が長方形になる端部で、その面に斜格字文を施している。外面はハケ整形ののち2条単位の沈線が3ヶ所に認められる。口縁端部には4条の波状文が施されている。口径32.7cm、残存高11.05cmを測る。破片は散らばっており、遠くは焚き口から出土している。

Ⅴ～Ⅷは燃焼部床面焼き口周辺出土の須恵器である。Ⅴの焼成は良好である。杯蓋の破片で内湾しており、端部は尖りぎみである。ロクロナデで調整しているが、天井部近くには1方向の仕上げナデが認められる。Ⅵも杯蓋の破片である。ロクロナデで、口縁部に重ね焼の痕跡が認められる。口径は11.0cmと小振りで、体部は内湾する。Ⅶは高杯脚部である。杯部は内湾し丸底に低脚が付く。外反する脚部で端部は下方につまみ出し、端部は尖っている。焼成は甘く浅黄橙を呈する。杯部底付近はロクロケズリがみられる。Ⅷも高杯脚部である。裾部の破片で、端部はやはり下方につまみ出ししている。Ⅷはすり鉢底部で、底面はへら切り、体部はロクロナデである。底部は中央が出た不安定なもので、中央に穿孔がみられる。体部は直立ちぎみに広がると思われる。小石粒を含み、灰白色を呈する。Ⅷは短頸壺で底部は欠いている。直立する短い口縁部で、僅かに内湾し端部は丸い。肩は張っており、算盤玉状に近い形状をしている。最大腹径と底部までの中央付近の下半はロクロケズリがなされている。頸部までカキメがみられる。体部下半は厚くなっている。最大腹径18.6cmと大型である。口径11.2cm、残存高12.2cmを測る。Ⅷは中型壺口縁部である。外反し端部は折り曲げて丸くしている。口径24.2cmを測りロクロナデで仕上げている。にぶい黄橙で、焼成はやや甘い。Ⅷは蓋状をした特殊な大形の土器である。緩やかに内湾する体部から天井部で頂部に円筒形のつまみ状のものが付いている。つまみ部は僅かに内傾し端部は丸い。高さ3.2cm、幅(口径)4.1cmのつまみである。外面は全体にカキメが施されている。端部は丸い。全体的に磨減しており、焼成は甘い。裾部径38.5cm、器高12.25cmを測る。

Ⅸ～Ⅺは灰原出土土器である。Ⅸは口径12.4cmを測る杯蓋である。内湾しているが直線的に広がる体部である。Ⅹも杯蓋である。ほぼ完形の土器で、口径12.8cm、器高4.15cmを測る。天井部にはロクロケズリがみられる。内湾する体部で、比較的薄く仕上げられている。内外面ともに自然釉が付着しており、強く焼けている。小石粒を含んでいる。Ⅺは有蓋高杯の蓋である。口縁部は欠失しており、天井部とつまみ部が残っている。内湾する天井部で中央が窪んだ円形のつまみを付加している。天井部はロクロケズリののち不定方向仕上げナデが認められる。Ⅻは高杯脚部である。外反する裾部は端部近くで水平に近くなり、端部は下方につまみ出ししている。外面全体と内面の一部に自然釉が付着している。Ⅻは壺か提瓶の口縁部である。直立から外反する口縁部で端部は内外に肥厚する。ロクロナデ仕上げで、焼成は良好である。口径7.8cm、残存高4.4cmを測る。Ⅻは壺口縁部で外反している。端部は丸く僅かに曲げている。外面は平行タタキののちナデている。口径は21.6cmに復元される。Ⅻは器台下台の裾部であると思っているが、一応壺口縁としておく。外側に直線的に広がっている。端部付近で厚くなり、この部分は内湾する。厚く端部となっている部分には3条の凹線があり、端部は角張っている。その下部は粗い原体で直線文を施したのち1条の凹線をする。口径32.0cmで残存高は5.5cmである。



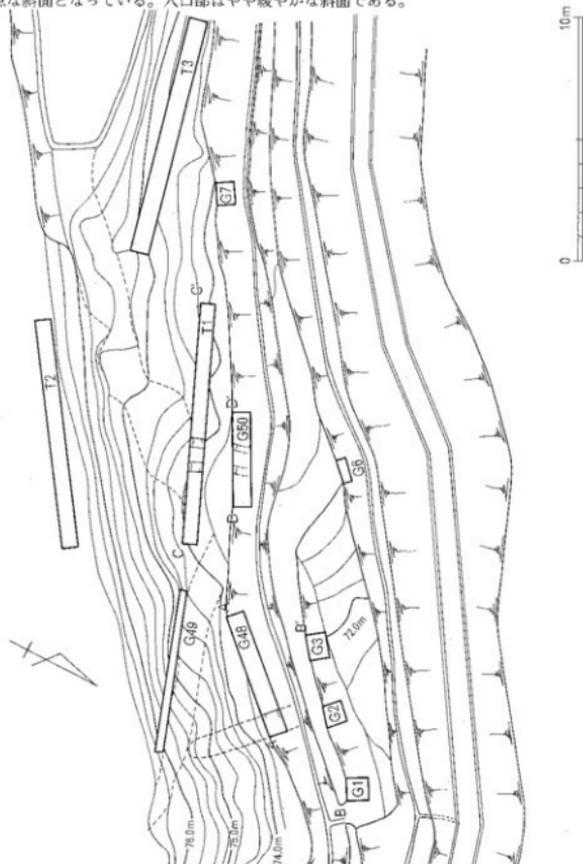
第21图 2号窟出土物实测图

V その他の遺跡の調査結果

(1) ロクロ谷窯跡

1. 外形

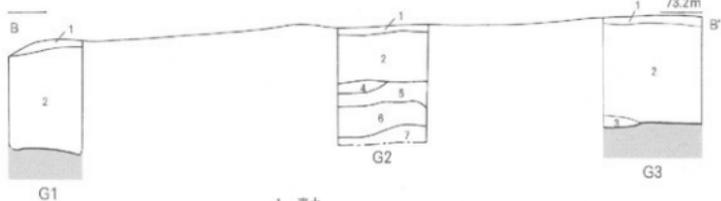
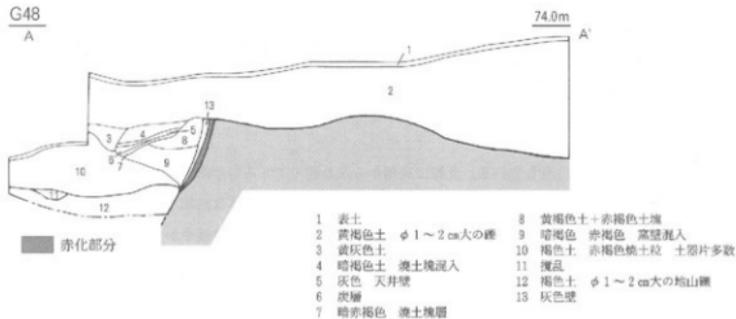
事業地東端の北側に位置している。北側は東側から入り組んでくる谷の南斜面に立地している。地目は雑木林で傾斜変換点から北は水田となっている。東から入ってくる谷は内部でさらに小さな谷を形成しており、南側に延びる支谷の入口東側に窯跡は築かれている。谷奥部は緩やかな斜面であるが、中間部分はやや急な斜面となっている。入口部はやや緩やかな斜面である。



第22図 ロクロ谷窯跡地形測量図

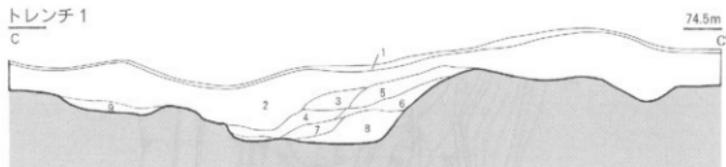
G48

A



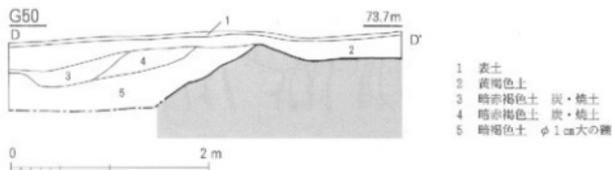
- 1 表土
- 2 黄褐色土 φ2~3cm大の礫
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土+褐色土 炭・焼土混入
- 5 黄褐色土 空壁ブロック・炭混入
- 6 黒褐色土 炭・焼土粒混入 土器多数
- 7 暗灰色土 炭・焼土粒混入 φ1cm大の礫混入

トレンチ 1



- 1 表土
- 2 暗褐色土 φ2~3cm大の礫
- 3 暗褐色土 土器多数 炭混入
- 4 褐色土 砂礫層 炭混入
- 5 黄褐色土 地山礫φ3cm大混入 焼土塊混入
- 6 暗褐色土+灰白色土 炭混入
- 7 暗赤褐色土 焼土混入
- 8 暗赤褐色土→黄褐色地山ブロック

G50



- 1 表土
- 2 黄褐色土
- 3 暗赤褐色土 炭・焼土
- 4 暗赤褐色土 炭・焼土
- 5 暗褐色土 φ1cm大の礫

第23図 ロクロ谷跡跡確認調査土層断面図

2. 窯体

確認調査であることから、全体像は把握していない。確認調査グリッド2で灰原を検出しており、その上方に設定したグリッド48で窯体を検出している。その断面から見ると、表土下40cmで窯体の一部を検出している。表土下の黄褐色土は後世の堆積土である。窯体は西側の側壁が検出されている。床は地山が出ているが、強くは被熱していない。床からの残存高は70cmを測る。東側の側壁は調査区内では検出されていない。東側に立木があり拡張できなかったことから、全体幅を確認できなかったことは惜しまれる。



ロクロ谷窯跡遠景

調査した床面の幅は1.65mあり、それ以上の幅となる。床面上の層には須恵器が多く含まれ、その上に窯壁の含まれた焼土層が堆積している。窯体が崩れた状況を示しており、窯体でも下半の焚口近くではないかと思われる。さらに上方に設定したグリッド49では表土下が地山になっており、窯体は続いていない。

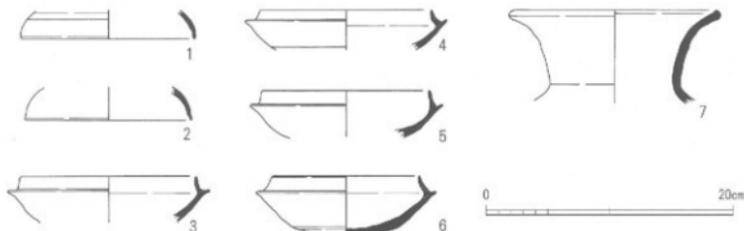
3. 灰原

確認調査のグリッド2で灰原が確認されているが、両側に設定したグリッド1・3では灰層は確認されていない。ただ、圃場整備の排水路断面では広がりが見られている。

西側の緩やかな部分に設定したトレンチ1とその下に設定したグリッド50では溝状の遺構内に灰層と炭・須恵器が出土している。確認調査で検出した窯体より位置的に高くなるので、もう1基別の窯跡が存在していることは確実である。トレンチ1で幅1.8m、深さ0.65mの溝状遺構は西側が高くなっており、地形通りの北東方向に延びている。グリッド50では灰層は浅くなっている。

4. 出土遺物

図化点数は7点と少ない。杯蓋2点、杯身4点と壺1点である。口径は(1)が13.9cm、(2)が13.4cmを測る。残存度の違いによる可能性があるが、(1)は天井部にロクロケズリが見られる。口縁端部近くでわずかに屈曲しているのが特徴である。内湾ぎみで端部は尖る。(1)には重ね焼きの痕跡が残っている。



第24図 ロクロ谷窯跡出土遺物実測図

(3)~(6)は杯身で、内湾する体部からそのまま延びて受部となる。受部は(3)だけ水平さみだが、他は上方を向いている。端部は比較的シャープで尖っている。立ち上がりは外反している。

(7)は壺口縁部である。口径16.4cm、残存高7.3cmを測る。体部は残存していないが、頸部は明瞭な稜線を持たない。大きくラップ状に外反し、端部は丸く肥厚している。

5. 小結

確認調査だけで全体像は明らかに出来なかったが、野田窯跡に近接した時期に一時期の小規模な窯跡群を築いている。遺物量や焼成状況から1回かもしくは2回程度しか焼成していない窯跡と思われ、基数も2基かと思われる。時期は6世紀後半のTK43期頃と思われる。



ロクロ谷窯跡周辺確認調査風景

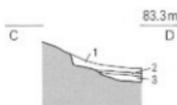
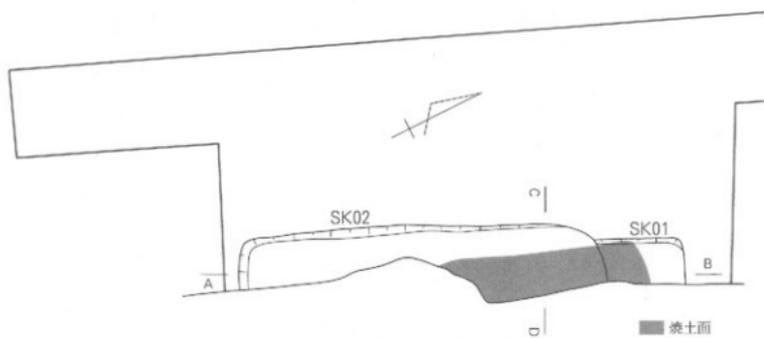
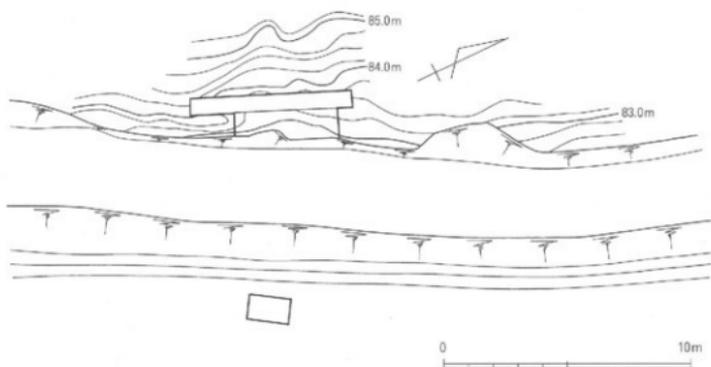
(2) ニラミ岩東遺跡

今回事業地を縦断する里道沿いにある遺跡である。丘陵斜面で水田になる手前の僅かに平坦になっている部分に築かれた炭土坑である。小さな南北方向の谷に面した西側の山腹に位置している。分布調査で炭層を確認したもので、確認調査を行ったが断面の炭層以外は確認されなかった。その結果、約1×5mの5㎡の小面積の全面調査を行った。

検出した遺構は切り合い関係のある2基の土坑である。縦方向に半分は道によって削られている。新しい方のSK02は長さ2.95mで残存幅0.65m、深さ0.15mを測る。北西隅は丸くなっているが、南西隅は角張っている。長方形の土坑で埋土は炭で、充填している。特に南辺付近には大きな炭が固まっていた。遺物は出土していない。

SK01はSK02に切られた焼土坑である。北西コーナーだけが残存している。焼土がSK02の底に見られ、SK01の埋土と思われることから、平面的な切り合い以上の長さが確認されている。残存長1.95m、残存幅0.4m、深さ0.1mを測る。底には焼土が堆積し、上層に炭混じりの黒灰中砂がレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

以上、2基の土坑を調査した。古い方のSK01は焼土坑で、新しい方のSK02は炭土坑である。ともにやや大型の土坑で、遺物は出土していない。時期を確定することは困難であるが、周辺遺跡の類別からすると中世から近世にかけてかと思われる。



- 1 炭層
- 2 灰産じり黒灰色中～細砂
- 3 焼土層



第25図 ニラミ岩東遺跡トレンチ実測図

(3) 高尾遺跡

1. 位置

田谷町から小印南町・青野町に抜ける里道沿い、地形的に丘陵部の最も低い部分を南北に越える低い峠道沿いである。尾根筋でいえば鞍部周辺に営まれた遺跡である。緩斜面から平坦面になった部分に遺跡は営まれている。鞍部付近だけに広がる小さな平坦部で、東西ともに急斜面となって尾根状になる。特に西側は急傾斜となっており、遺跡は存在しないものと思われた。東側丘陵は南東から北西に向かう尾根筋はやや緩斜面となっている。

里道を北へ下ると比高差15m程度で水田部分となる。山裾部分は旧河道で低くなっており、北側に向かって高くなっていく。

2. 遺構

里道東側だけで遺構が検出された。土壌3基で、南側からSK01・SK02・SK03とした。標高ではほぼ同じような位置に築かれている。

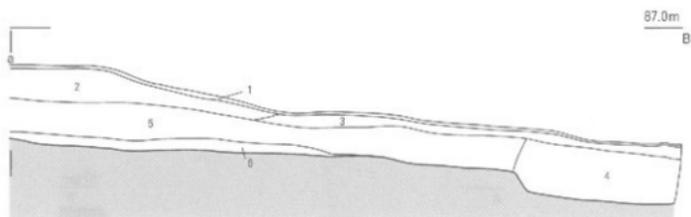
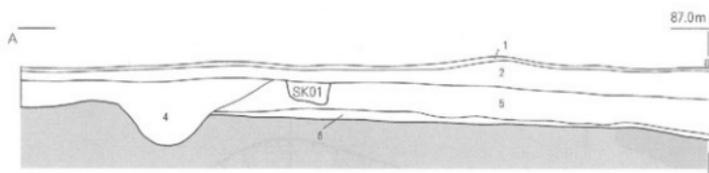
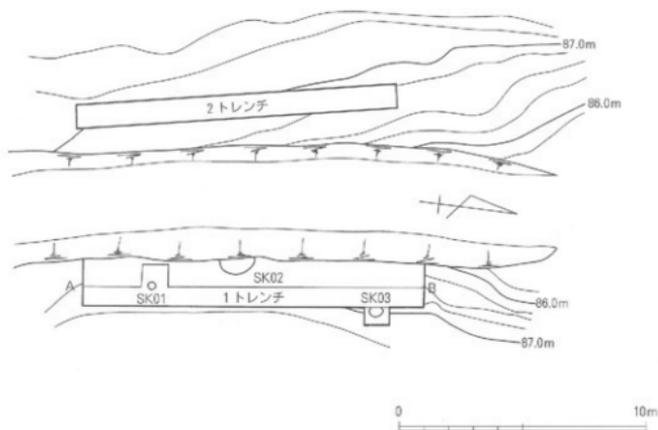
SK01は確認調査の1トレンチで検出した遺構で、西壁沿いで確認した。断面観察ののち西側に拡張して全面調査を行った。最大長で南北42cmの不定形の土壌で深さは26cmを測る。底は比較的平たくなっており、東側の方が深くなっている。浅い方の西側に壺底部を斜めに据えている。地山に接するのではなく、地山土を含んだ暗褐色中砂を敷いた上に置いている。確認トレンチでは土器片が認められなかったことから、壺は口頸部を欠いたものが使われたと思われる。他の土器片や石材は確認していない。

SK02は里道ではほぼ半分を削平された土壌である。今回調査したなかでは大形の土壌である。やや垂な円形と思われ、最大長155cmを測る。深さ25~30cmで底は平坦である。埋土は地山土を含んだクロボク層である。堀内からは遺物は出土していない。北側肩部で弥生土器片が出土している。大形の壺口縁部と体部の破片である。他の2基が土器棺蓋であることから、SK02も土器棺蓋の可能性が高いものと思われる。

SK03は最も北側で検出された土壌である。やはり土器を棺に利用した土壌である。南北に長い楕円形を呈している。南北は63cmを測り、東西の残存長は42cmで復元長は50cm前後である。南西方向が深くなっており、最大で28cmの深さを測る。深い方に底部を斜め位置に据えている。水差し形土器で検出時には口縁部は割れていたが、口縁部の破片があることから完形品を棺身としたと思われる。斜めでも水水平から25°と横位置に近い角度で置かれている。



高尾遺跡調査風景

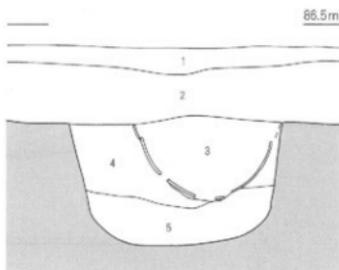
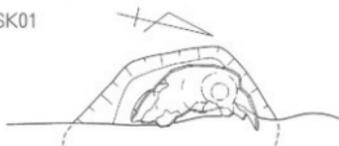


- 1 表土
- 2 黄褐色山砂
- 3 褐色中砂 (小礫含む)
- 4 赤褐色
- 5 黒褐色細砂 (クログク羅)
- 6 黒褐~褐色細砂



第26図 高尾遺跡地形測量図・1 トレンチ西壁土層断面図

SK01

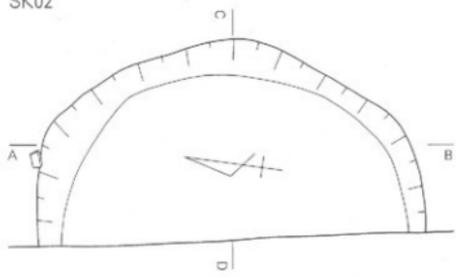


66.5m

- 1 表土
- 2 黄褐色中砂
- 3 暗褐色土+褐色土 結まり弱い
- 4 暗褐色土 クロボク
- 5 暗褐色土 少量の黄色地山土含む



SK02



87.0m

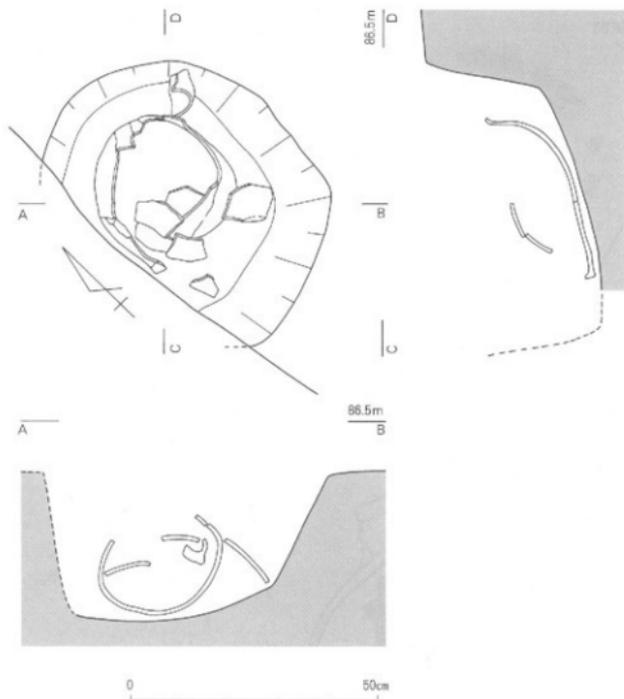


87.0m



第27図 高尾遺跡SK01・SK02実測図

SK03



第28図 高尾遺跡SK03実測図

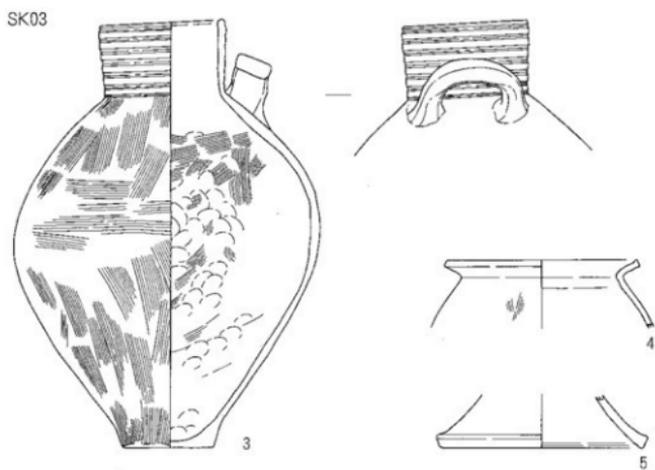
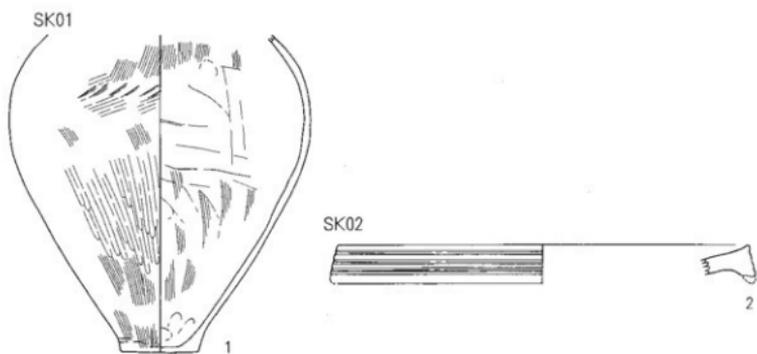
3. 出土遺物

8点の弥生土器を図化している。出土遺物量は少なく、図化した以外の土器は10数点だけである。

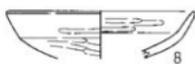
(1)はSK01出土の壺である。棺身として使用されたものである。底径6.4cm、残存高26.0cmを測る。平底でやや急に立ち上がって倒卵形の体部になる。口縁部を欠いているが(3)と似たスタイルをしている。内面はユビ成形ののち指ナデ・板ナデで整形・仕上げられている。外面はハケ整形ののちヘラミガキが施されている。最大口径の上位に刺突文が施文されている。ハケ原体による刺突である。2次焼成を受けている。

(2)はSK02出土の壺口縁部である。大形土器の口縁部で水平に広がっている。直立する頸部から球形の体部になるものと思われる。復原される口径は34.0cmで残存高は2.6cmである。ヨコナデで仕上げられている。端部は内外に肥厚し、端面に4条の凹線文が施されている。

(3)~(5)はSK03出土である。(3)は棺身として使われた壺で、ほぼ完形に復原できる。器高35.1cm、底径7.4cm、口径9.9cmを測る。内面はユビ成形ののちナデ整形を行う。外面はハケ整形ののちナデで調整する。倒卵形の体部で底部は平底である。口縁部は直立し、端部は外側につまみ出している。外面には6条の凹線文が施されている。口縁部は全体が残っていないことから、注ぎ口を持っているかどうか不



包含層



第29图 高尾遺跡出土遺物実測図

明である。肩部には把手が付加されている。断面方形の板状の把手でU字形になっている。残存度から1対になるか、1個かは不明である。

(4)は甕口縁部で、口径15.0cm、残存高5.7cmを測る。直線的な僅かに内湾する体部からくの字に屈曲する口縁部になる。端部は上部につまみ出す。体部外面はハケ整形からナデ調整で、口縁部はヨコナデで仕上げている。

(5)は高杯脚部である。裾広がりに外反し端部は僅かに肥厚している。表面磨減が著しいが、ナデ調整であろう。裾部径16.0cm、残存高4.3cmを測る。

(6)~(8)は遺構外出土である。(6)は無頸壺の口縁部で口径22.0cm、残存高4.7cmである。外傾しており、端部付近で内湾し端部は内外に肥厚している。ヨコナデで仕上げられており、端部下に2条の凹線文が認められる。

(7)は平底から外反する体部になる底部である。底径7.0cm、残存高4.4cmである。内面はユビ成形のちナデ調整、外面もナデ調整である。

(8)は高杯杯部である。口径15.0cm、残存高3.8cmの碗形である。不明瞭な稜線を持つ内湾する杯部で、端部は丸い。ナデのちヘラミガキで仕上げている。(5)の杯部になる可能性もある。

4. 小結

高尾遺跡は鞍部の平坦部に築かれた遺跡である。土壌3基が調査されており、2基は土器棺墓であることから、3基とも墓と思われる。弥生時代中期後半の墓域と思われる。確認調査時に集落跡の可能性を考慮して東刺尾根筋や平坦面の試験トレンチを設定したが、遺構は検出されなかった。墓域とした集落は北側の段丘面に展開するのであろうか。2基の土器棺はともに壺を棺身とするもので、壺は存在していない。当然、副葬品も保有していない。斜め位置に棺身を置いている。棺蓋をするものには直立するものがあるが、多くは斜めに置いていることは、周辺の出土例と共通している。

(4) ダラメ遺跡

1. 位置

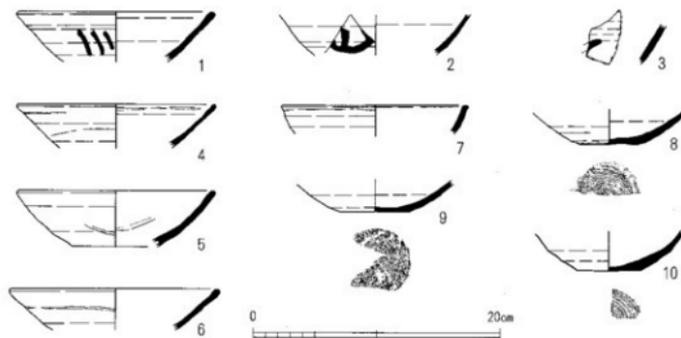
事業地北西部分に位置しているが、境界部分だけが用地内である。鍛冶屋町にあり、分布調査によって確認した遺跡である。水田部分は圃場整備事業が行われており、その排水路の掘削排土で土器を採集したものである。遺跡は丘陵部分には延びておらず、水田部分に存在する遺跡であることが判明した。谷奥部に位置しており、立地条件は良好とはいえない。北側に開く谷部の最も奥にあり、南西部には谷部を埋め立てて形成した大池が存在する。

遺物採集地点は用地外であることから、確認調査は実施していない。分布調査の結果から谷全域に遺物が広がっている。墨書土器が含まれていることは重要である。

2. 出土遺物

採集遺物の一部について図化した。図化した土器は10点ですべて須恵器碗である。分布調査では他に土師器も採集しているが、小片で図化できなかった。

図化した10点のうち3点が墨書がみられる。(1)は三本の線が見られ「三」か「川」と思われる。口径15.6cm、残存高4.1cmを測る。僅かに内湾する体部で端部は丸く肥厚している。小砂粒を含み色調は灰で



第30図 グラメ遺跡出土遺物実測図

ある。ロクロナデが施され、口縁部には重ね焼きの痕跡が残る。(2)は口縁部、底部を欠く内湾する体部で、外面に墨書が見られる。「山」と記されている。やはり、灰色を呈し砂粒を含んでいる。(3)も内湾する体部の小破片である。墨書が認められるが、ほんの一部で文字として判読できない。胎土や色調・焼成は共通している。(4)は口径15.7cm、残存高3.6cmを測る底部を欠く椀である。体部はやや直線的で口縁端部は丸く僅かに肥厚している。黄灰を呈している。(5)は底面を欠くものの比較的全体像がわかる破片である。口径15.7cm、底径7.0cm、器高4.6cmを測る。器壁はやや厚く内湾している。端部は丸く、ベタ高台になるかもしれない。残存していないが糸切りと思われる。ロクロナデのち仕上げナデが見られる。灰色で重ね焼きの痕跡が認められる。(6)は口縁部でやや浅めで口縁端部は肥厚している。口径16.6cm、残存高3.4cmを測る。ロクロナデで灰色をしている。(7)も口縁部で端部はやや反っている。直ぎみに内湾する体部で外側に尖らせつまみだしている。口径14.8cm、残存高2.3cmを測り、砂粒を含んでいる。(8)は底部で糸切りである。内湾する体部から僅かに上げ底になる平たく薄い底部になる。底径は4.7cm、残存高2.8cmである。外面に煤が付着している。(9)も糸切りの底部で底径は5.5cm、残存高2.6cmを測る。ロクロナデのち内面は仕上げナデが見られる。黄灰で砂粒を含んでいる。(10)も糸切りの底部であるが、変化点に稜を持つ平底である。底径は5.2cm、残存高3.3cmである。胎土は僅かに砂粒を含み、灰色を呈している。

3. 小結

採集遺物だけであるが、墨書土器を保有していることは特記されよう。谷部の良好な立地とはいえないが、谷ふところの安定した地域であったかと思われる。事前の調査が行われなかったことが、惜しまれる。小規模な集落が存在したのであろうが、墨書土器が出土していることは特殊である。この時期の窯跡は周辺で確認されておらず、集落跡も知られていない現在、多くを語ることは出来ない。が、墨書土器の保有からだけでも、遺跡の性格の一端を推定することが許されるならば、寺院や官衙が遺跡周辺に認められないことから、それらの遺跡を維持する集団の集落と推定したい。

VI おわりに

本報告にかかる加西市県民スポーツレクリエーション施設建設に伴う分布調査は、昭和62年度の年度末の昭和63年3月に行った。昭和が終わろうとする時期になる。それから翌年度に確認調査を実施し、1年開いて平成2年度に全面調査を行ったものである。組織も社会教育文化財調査埋蔵文化財調査係から埋蔵文化財調査事務所に独立した時である。さらに報告書刊行時は兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部となっている。調査終了から早いもので17年経過したことになる。担当者としては、その後も永年継続して遺跡の調査に携わっていることから、時の流れをさほど感じていなかった。が、改めて調査経過を振り返り報告書を執筆してみると、長期間経過したことを痛感し、時の早さに驚かされる。

今は本調査と呼称しており、専門業者によって調査が進行している。当時は全面調査と呼称し請負工事の始まりで、地元業者が落札しているもの、現地雇用から一步進んだ程度であった。十分な体制ではなかったが、その分ゆったりとしていたように思える。確認調査を含めて3ヵ年にまたがる調査で幾つかの成果を挙げたので、紹介する。

5つの遺跡を調査した。内訳は窯跡が2遺跡で、弥生時代の墓を1遺跡、残り2遺跡が中世の遺跡である。窯跡は2遺跡で4基確認している。古墳時代の窯跡で6世紀代のものである。窯業地域とされる播磨ではあるが、意外と古墳時代の窯跡は少ない。さらに6世紀代に遡る窯跡は明石郡揖保郡を中心に14遺跡30数基が知られている程度である。加西市では今までこの時期に該当する窯跡は知られていなかった。その初例となったのが、野田窯跡・ロクロ谷窯跡である。調査期間・調査対象としても大半を費やしているように、今回の調査の最も大きな成果であろう。ロクロ谷窯跡は焚1地周辺と灰原の一部を確認しただけであるが、野田窯跡より僅かに先行する窯跡と考えられる。6世紀後半のTK10型式に操業を開始し、TK43期まで継続したと思われる。加西市で最も古い須恵器窯跡である。野田窯跡の杯よりもやや立ち上がりが高く古くなると考えている。灰原のトレンチ結果から2基の窯跡が想定される。2期に渡るのは窯跡の時期差かもしれない。野田窯跡は型式からはTK43期操業の窯跡群である。2基から成っている小規模な一時期の窯跡である。ロクロ谷窯跡から野田窯跡へ移動した可能性も考えられる。野田窯跡の2号窯で須恵器生産は終焉し、209型式まで継続しない。4基の窯跡は、ロクロ谷1号窯—ロクロ谷2号窯—野田1号窯—野田2号窯の順になる。

ロクロ谷1号窯は杯蓋と杯身・蓋しか出土していない。杯蓋には天井部と体部を画する稜線は甘く明瞭ではない。杯蓋は2点しかないが、そのうちの1点には凹線が認められ天井部と体部を画する意図があるものと思われる。ロクロ谷2号窯は灰原の状況から2基の窯跡の存在が確認され、型式的に新しい小片があることから2号窯を新しく位置付けた。が、ロクロ谷1号窯も焚口周辺をトレンチ調査しただけであるので、複数の床面があり、時期幅がある可能性も残されているものの、野田1・2号窯がほぼ1時期であることもあって、2号窯が新しいと考えた。野田1号窯は139点と最も多く図化している。窯詰め状態で天井が崩壊して廃絶したことから、一括性が確実な資料として評価される。82点が床面出土である。杯身・杯蓋が大半で、高杯・提瓶・壺・壺・壺用蓋が少量含まれる。貼床下の土器は埋戻し古いことになるが、型式的な差異を示すことは出来ない。杯蓋は天井部が丸く、明瞭な稜線はなく凹線も認められない。口径は11～4cmで、13cm代のものが中心で、この時期（TK43期）として一般的である。端部は丸くなるものが多く、天井部にヘラ記号があるものも数点ある。杯身も丸底のものが多く、底部へラ切りのままの平底風の底部もある。高杯は少数しかないが低脚と長脚がある。低脚は円形透孔

(大小あり)、長脚は方形の透孔である。提瓶・壺・蓋も数点ずつ床面から出土しているが、甕は製品ではなく、焼き台として使用されたと思われる。提瓶・壺・甕は灰原から多く出土しており、掘鉢も2点出土している。野田2号窯は窯跡の保存状態の割には床面出土土器は少ない。18点図化した。その中に特殊な器形が含まれているのが特徴である。杯身・杯蓋は数点だけ出土しており、それからTK43型式の範疇に入るが、1号窯より新しい。口径も小さくなりはじめ立ち上がりも低く新しい要素を有している。特殊な土器は裝飾付き器台である。裝飾部分は欠失しているが、接合部の粘土が鈣部分に残っていることから、子壺などが裝飾されていたと思われる。近隣の遺跡で裝飾土器の類例では勝手野古墳がある。全体像が明らかでないことから断言は出来ないが、野田2号窯と勝手野古墳群とは需給関係にあり、生産地と消費地が明らかとなった稀少例となる。その観点から見て(四)の土器も甕口縁部ではなく、器台下台裾部ではないかと考えている。(四)の土器は蓋としたが、同様に上部に円筒状のものが接続する特殊土器を想定している。蓋にしても特殊な器形で、儀礼的な場での使用が推測できる。2号窯の規模が大きいのも大形土器を焼成することと関係があるのではと思われる。

高尾遺跡は谷奥の逼塞した地点で検出された弥生時代中期の墓跡である。尾根上に高地性集落が展開する方が一般的であるが水田部の集落の墓域とも思われ、今後の周辺の調査成果によって再度評価する必要がある。

中世になるニラミ岩遺跡の性格は不明ながら焼上を伴った遺跡である。南北の集落間の古道にあたる位置で、常時の居住空間ではない。ダラム遺跡は墨書土器を保有する遺跡で、本体の調査を行っていないが、特殊な遺跡である。立地は谷奥の開けたとはいえない地域である。他の地域へ抜ける道沿いでもない地点で墨書土器を持つ集落の存在は興味深い。

観測番号	出土区	出土遺構	種別	器種	口径	口径	底径	技法	他	形態の特徴	備考
13 22	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 身	11.9	4.3		底部に回転ヘラケズリ に仕上げナデ	内面	底面は丸みを帯び内側に外方に開く体部 受け部はほぼ水平に並び内側をなす立ち上がりを持つ	へう記号
13 23	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 身	(11.7)	4.0		底部に回転ヘラケズリ		底面は丸みを帯び内側に外方に開く体部 受け部はほぼ水平に並び内側をなす立ち上がりを持つ	
13 24	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 蓋	13.0	4.25		天井部に回転ヘラケズリ		天井部は丸みを帯び内側で口縁部に続く 口縁端部は丸く収める	
13 25	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 蓋	(13.1)	3.9		天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナデ	内面	天井部は丸みを帯び内側に外方に開く体部 受け部は斜上方に並び、内側をなす立ち上がりを持つ	
13 26	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 蓋	(13.2)	4.0		天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナデ	内面	天井部は丸みを帯び内側に外方に開く体部 受け部は斜上方に並び、内側をなす立ち上がりを持つ	
13 27	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 身	11.7	4.4		底面に回転ヘラケズリ		底面は丸みを帯び内側に外方に開く体部 受け部は斜上方に並び、内側をなす立ち上がりを持つ	受け部に重ね焼きの土器片付着
13 28	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 身	(13.1)	3.3		底面へラ切り調整		口縁端部は丸く収める	
13 29	1号窯	窯体床面	須恵器	蓋	9.8	5.3		天井部に回転ヘラケズリ		口縁端部は丸く収める	筒である可能性がある
13 30	1号窯	窯体床面	須恵器	高 杯	(13.0)	7.6	9.8	杯底部に回転ヘラケズリ?		碗状の杯部 深く低い腹部はS字状に曲線を描いて開く3方にかさね内形跡がみられる	
14 31	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 蓋	(13.7)	4.25		天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内側で口縁部に続く 口縁端部は丸く収める	へう記号
14 32	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 蓋	13.4	4.35		天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内側で口縁部に続く 口縁端部は丸く収める	
14 33	1号窯	窯体床面	須恵器	高 杯			(10.35)	回転ナデ		天井部は丸みを帯び内側で口縁部に続く 口縁端部は丸く収める	
14 34	1号窯	窯体床面	須恵器	高 杯	(14.9)	7.35	10.2	杯底部に回転ヘラケズリ後ナデ		杯底部は丸みを帯び内側で口縁部に続く 口縁端部は丸く収める	
14 35	1号窯	窯体床面	須恵器	蓋	(10.2)	5.7		天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内側で口縁部に続く 口縁端部は丸く収める	
14 36	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 蓋	(13.1)	(3.25)		天井部に回転ヘラケズリ		天井部は丸みを帯び内側で口縁部に続く 口縁端部は丸く収める	
14 37	1号窯	窯体床面	須恵器	蓋	(8.8)	(1.6)		回転ナデ		思曲して内側する口縁部 口縁端部は外側に膨脹する	自然軸付着
14 38	1号窯	窯体床面	須恵器	杯 身	(11.4)	(3.8)		底面に回転ヘラケズリ		底面は丸みを帯び内側に外方に開く体部 受け部は斜上方に並び、内側をなす立ち上がりを持つ	
14 39	1号窯	窯体床面	須恵器	高 杯		(6.0)	(11.0)	回転ナデ		外反して開く脚部 脚端部は内側に膨脹させ、端面を作る	自然軸付着 窯底燒着
14 40	1号窯	窯体床面	須恵器	提 瓶	8.3	23.9	最大口径 18.6	口縁部は回転ナデ 体部の出土位置は不明 又反対側はヘラケズリが施される 側面にはユエ割きえ頭が残る		外反して開く口縁部、中腹に1条の沈線をもくくられ、脚部を膨脹する 扁平な体部の肩部には短い筒状の手が付く	自然軸付着

出土遺物観察表(2)

編年 期別	調査 番号	出土 地	出土遺物	種別	口径	法量 (cm)		枝法	形態	特徴	備考
						器高	器径				
14	41	1号窯	窯体床面 灰層	須臾器 杯 身	11.6	3.8	底部に回転ヘラケズリ に仕上げナゲ	内面	扁平な底部に縁やかかに外方に開く体部 受け部はほぼ水平 に延び、内傾する短い立ち上がりを持つ		
14	42	1号窯	窯体床面 灰層	須臾器 杯 身	11.4	4.2	底部に回転ヘラケズリ に仕上げナゲ	内面	底部は丸みを帯び縁やかかに外方に開く体部 受け部はほぼ 水平に延び、内傾気味の立ち上がりを持つ		
14	43	1号窯	窯体床面 灰層	須臾器 杯 身	(11.1)	3.7	底部に回転ヘラケズリ に仕上げナゲ	内面	扁平な底部に縁やかかに外方に開く体部 受け部は斜上方に 延び、内傾する短い立ち上がりを持つ		
14	44	1号窯	窯体床面 下層床面	須臾器 杯 蓋	(13.2)	(3.9)	天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び内湾して立ち上がる口縁部に縁く く縁部は丸く収める		
14	45	1号窯	窯体床面 下層床面	須臾器 杯 蓋	12.8	4.05	天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び内湾して立ち上がる口縁部に縁く く縁部は丸く収める		
14	46	1号窯	窯体床面 下層床面	須臾器 杯 身	11.8	4.3	底部に回転ヘラケズリ に仕上げナゲ	内面	底部は丸みを帯び縁やかかに外方に開く体部 受け部は斜上 方に延び、内傾する立ち上がりを持つ		
14	47	1号窯	窯体床面 下層床面	須臾器 杯 身	11.7	4.2	底部に回転ヘラケズリ に仕上げナゲ	内面	底部は丸みを帯び縁やかかに外方に開く体部 受け部は斜上 方に延び、内傾する立ち上がりを持つ		
14	48	1号窯	窯体床面 下層床面	須臾器 杯 身	11.9	4.0	底部に回転ヘラケズリ に仕上げナゲ	内面	底部は丸みを帯び縁やかかに外方に開く体部 受け部は斜上 方に延び、内傾する立ち上がりを持つ		
14	49	1号窯	窯体床面 下層床面	須臾器 杯 身	11.8	4.45	底部に回転ヘラケズリ に仕上げナゲ	内面	底部は丸みを帯び縁やかかに外方に開く体部 受け部は斜上 方に延び、内傾する立ち上がりを持つ		
14	50	1号窯	窯体床面 下層床面	須臾器 杯 身	10.7	4.2	底部へラ切り後ナゲ調整 天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		扁平な底部に縁やかかに外方に開く体部 受け部は斜上方に 延び、内傾する立ち上がりを持つ	へラ記号 自然釉付着 土器片付着	
14	51	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 蓋	13.35	(3.8)	天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び縁い縁部を持つてほぼ直立する口縁部に縁く 縁く 口縁部は丸く収める		
14	52	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 蓋	(13.1)	4.1	天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び内湾してほぼ直立する口縁部に縁く 縁く 口縁部は丸く収める	へラ記号	
14	53	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 蓋	(13.5)	4.4	天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び内湾してほぼ直立する口縁部に縁く 縁く 口縁部は丸く収める	へラ記号?	
14	54	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 蓋	(13.7)	(4.75)	天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び内湾してほぼ直立する口縁部に縁く 縁く 口縁部は丸く収める	へラ記号	
14	55	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 蓋	(13.2)	(4.2)	天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び内湾してほぼ直立する口縁部に縁く 縁く 口縁部は丸く収める		
14	56	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 蓋	12.35	4.5	天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び内湾してほぼ直立する口縁部に縁く 縁く 口縁部は丸く収める		
14	57	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 蓋	12.2	4.75	天井部に回転ヘラケズリ 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び内湾してほぼ直立する口縁部に縁く 縁く 口縁部は丸く収める		
14	58	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 蓋	(12.9)	3.2	天井部へラ切り後ナゲ調整 内面に仕上げナゲ		天井部は丸みを帯び内湾してほぼ直立する口縁部に縁く 口縁 部は丸く収める		
14	59	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 身	(12.2)	4.4	底部へラ切り後ナゲ調整		扁平な底部に縁やかかに外方に開く体部 受け部は斜上方に 延び、内傾する立ち上がりを持つ		
14	60	1号窯	窯体床面 (灰層)	須臾器 杯 身	(12.6)	4.5	底部へラ切り後ナゲ調整		扁平な底部に縁やかかに外方に開く体部 受け部は斜上方に 延び、内傾する立ち上がりを持つ		

出土遺物総表(3)

標 号 順 号	出 土 区 地	出土遺構	種別器種	法量 (cm)		技法他	形態の特徴	備考
				口径	底径			
14	1号窯	窯体床面	須臾器 杯 身	11.2	4.1	底部へラ切刃後未調整	扁平な裏面に溝やかまに外方に開く体部 受け部は斜上方に延び、内側する立ち上り付を付す	自然釉付着 濃淡融着
15	62	窯体床面 (風半)	須臾器 蓋	13.7	5.65	天井部に凹転へラケズリ 内面に仕上ナナデ	天井部は丸みを帯び内側してほぼ直立する。口縁部に鋭く横白は縁が形成される。天井部中央に見ゆる凹んだ縁のみが付く。口縁端部は丸く収める	
15	63	窯体床面	須臾器 高 杯	(18.6)	(4.6)	内面に仕上ナナデ	底部は丸みを帯び縁やかまに外方に開く体部 受け部は斜上方に延び、内側する立ち上り付を付す。裏面は欠損する。わずかに外縁して鋭く口縁部 中程には2条の浅溝、その間に彫文が施される	自然釉付着 高濃融着
15	64	窯体床面	須臾器 提 瓶	(7.8)	(5.95)	凹転ナナデ		
15	65	窯体床面	須臾器 瓶?	13.2	(7.0)	肩外面に平行タタキ、内面に凹転ナナデ、須臾器へ内面仕上り目調整	外反して鋭く口縁 端部を肥厚する	
15	66	窯体床面 (風半)	須臾器 蓋	(16.7)	(5.9)	肩外面に平行タタキ後カキ目調整、内面に凹転ナナデ	外反して鋭く口縁 端部を肥厚し、上方へ引き上げる	
15	67	窯体床面 (風半)	須臾器 蓋	(25.8)	(9.9)	肩外面に平行タタキ後カキ目調整、内面に凹転ナナデ	外方へ開く口縁 端部を肥厚する	
15	68	窯体床面 (風半)	須臾器 蓋	(32.1)	(13.0)	肩外面に平行タタキ、頸部内面に凹転ナナデ、頸部外面にへラ目調整	外反して開く口縁、内側縁部に立ち上りがある口縁端部を肥厚し、横と交差で開す。外方にへラ状工具により斜縁支を施す。頸部外面下端と中程には2条1筋の浅溝をめぐらせる	
15	69	窯体床面 (風半)	須臾器 瓶	(6.9)	(6.9)	肩外面に平行タタキ、内面に凹転ナナデ、須臾器へ外面仕上り目調整	緩く内高する肩溝、楕状把手か1新成存する	
15	70	窯体床面 (風半)	須臾器 提 瓶	(18.8)	(18.8)	肩外面に平行タタキ、内面に凹転ナナデ、須臾器へ外面仕上り目調整	扁平な体部 口縁部を欠く	自然釉付着 土滴片付着
15	71	窯体床面	須臾器 杯 蓋	(14.0)	(3.75)	天井部に凹転へラケズリ	天井部は丸みを帯び内側して口縁部に鋭く、口縁端部は丸く収める	へラ記号
15	72	窯体床面	須臾器 杯 蓋	(13.6)	4.45	天井部に凹転へラケズリ	天井部は丸みを帯び内側して口縁部に鋭く、口縁端部は丸く収める	へラ記号
15	73	窯体床面	須臾器 杯 蓋	(13.5)	(4.05)	天井部に凹転へラケズリ	天井部は丸みを帯び内側して口縁部に鋭く、口縁端部は丸く収める	
15	74	窯体床面	須臾器 杯 蓋	(13.7)	3.7	天井部に凹転へラケズリ	天井部は扁平で内側して口縁部に鋭く、口縁端部は丸く収める	
15	75	窯体床面	須臾器 杯 蓋	13.3	(4.3)	天井部に凹転へラケズリ	天井部は丸みを帯び内側して口縁部に鋭く、口縁端部は丸く収める	
15	76	窯体床面	須臾器 杯 蓋	(13.3)	(4.4)	天井部に凹転へラケズリ	天井部は扁平で内側してはほぼ直立する口縁部に鋭く、口縁端部は丸く収める	
15	77	窯体床面	須臾器 杯 蓋	12.95	4.8	天井部に凹転へラケズリ 内面に仕上ナナデ	天井部は丸みを帯び内側して内傾傾味に立ち上りがある口縁部に鋭く、口縁部は丸く収める。口縁端部は丸く収める	自然釉付着 釉の可塑性がある
15	78	窯体床面	須臾器 蓋	(10.4)	(4.0)	凹転ナナデ	底部は丸みを帯び縁やかまに外方に開く体部 受け部はほぼ外方に延び、内側縁部の立ち上り付を付す	
15	79	窯体床面	須臾器 杯 身	(11.9)	4.0	底部に凹転へラケズリ		

出土遺物観察表(4)

観音 番号	出土 地区	出土遺構	種別	器種	口径	法量 (cm)		技法	他	形態	特徴	備考
						口径	高さ					
15 80	1号窯	窯体床面	須恵器	杯	(11.7)	4.25		底部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ	内面	扁平な底面に縁やかに外方に開く。縁部 受け運は稍上方に差び、内傾する立ち上がりを持つ	松葉状に一端で閉じ、2葉のヘラ記号	
15 81	1号窯	窯体床面	須恵器	杯	(11.2)	3.9		底面へラ切り後ナデ調整		扁平な底面に縁やかに外方に開く。縁部 受け運は稍上方に差び、内傾する立ち上がりを持つ		
15 82	1号窯	窯体床面	須恵器	碗	(12.0)	(4.15)		回転ナデ		屈曲して直立する口縁部。口縁部は丸く収める		
16 83	1号窯	窯体内	須恵器	杯	(13.3)	(4.45)		天井部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内湾して口縁部に接く。口縁部は丸く収める		
16 84	1号窯	窯体IV間ア	須恵器	杯	12.9	4.05		天井部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ		天井部は扁平で内湾して口縁部に接く。口縁部は丸く収める	自然釉付著 窯壁・土器片粘着	
16 85	1号窯	窯体上層	須恵器	杯	(14.0)	2.7		天井部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ		全体に扁平で天井部中央が凹む。口縁部は丸く収める	自然釉付著	
16 86	1号窯	窯体内	須恵器	壺	(3.0)	(5.0)		天井部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び屈曲して、楕円に1条の折線をめぐらし、内傾縁に差び、内湾して口縁部に接く。口縁部は丸く収める	自然釉付著	
16 87	1号窯	窯体I区	須恵器	壺	(17.0)	(7.5)		西面外側に平行タタキ後カキ白磁粉、内面に同心円タタキ		外反して短く立ち上がる口縁部。肩部を肥厚し、上方へ引き上げる	口縁部内面にヘラ記号	
16 88	1号窯	窯体IV間ア	須恵器	鉢	(13.6)	(5.2)		回転ナデ		内湾する体部からS字体に曲線を描いて、闊く口縁が接く	自然釉付著	
16 89	1号窯	窯体I区	須恵器	鉢	(17.4)	(4.9)		調整不明		口縁部は丸く収める		
16 90	1号窯	灰原I区	須恵器	杯	(15.0)	3.9		底面へラ切り後板目状調整		天井部はやや扁平で内湾して口縁部に接く		
16 91	1号窯	灰原II区	須恵器	杯	(14.4)	(3.1)		回転ナデ		全体に扁平で天井部中央が凹む。口縁部はほぼ直立し、口縁部は丸く収める	自然釉付著 天井部に付着物	
16 92	1号窯	灰原I区	須恵器	杯	(13.5)	(4.2)		外歪自然釉により調整不明(天井部へラ切り?) 内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内湾してはほぼ直立する口縁部に接く	自然釉付著	
16 93	1号窯	灰原II区	須恵器	杯	(13.1)	4.4		外歪自然釉により調整不明(天井部へラ切り?) 内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内湾してはほぼ直立する口縁部に接く	自然釉付著	
16 94	1号窯	灰原II区	須恵器	杯	13.5	4.5		天井部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内湾してはほぼ直立する口縁部に接く	ヘラ記号	
16 95	1号窯	灰原II区	須恵器	杯	(13.5)	(4.55)		天井部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内湾してはほぼ直立する口縁部に接く	ヘラ記号	
16 96	1号窯	灰原II区	須恵器	杯	(12.8)	4.15		天井部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内湾してはほぼ直立する口縁部に接く	ヘラ記号	
16 97	1号窯	灰原II区	須恵器	杯	(14.7)	(3.75)		天井部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内湾してはほぼ直立する口縁部に接く	ヘラ記号	
16 98	1号窯	灰原I区	須恵器	杯	(14.6)	(4.25)		天井部に回転ヘラケズリ内面に仕上げナデ		天井部は丸みを帯び内湾してはほぼ直立する口縁部に接く	自然釉付著 内面に付着物	
16 99	1号窯	灰原II区	須恵器	杯	(13.8)	(3.35)		回転ナデ		天井部は丸みを帯び内湾して、楕円に1条の折線をめぐらし、内傾縁に差び、内湾して口縁部に接く。口縁部は丸く収める		
16 100	1号窯	灰原I区	須恵器	杯	(12.5)	(3.5)		回転ナデ		天井部は楕円的に広がり、ほぼ直立する口縁部に接く。口縁部は丸く収める	自然釉付著	

出土遺物観察表(5)

標号	出土地区	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)		技法	他	形態の特徴	備考
					口径	高さ				
16 101	1号窯	灰原I区	須恵器	杯身	(3.1)		底部に凹転ヘラケズリ内面に仕上げナデ	厚さが既述の縁やかに外方に開く。受け部は斜上方に反り、内側する立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 102	1号窯	庭下灰原	須恵器	杯身	(3.85)		底部に凹転ヘラケズリ	既述の立ち上がりは縁やかに外方に開く。受け部は斜上方に反り、内側する立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 103	1号窯	灰原I区	須恵器	杯身	(3.95)		底部に凹転ヘラケズリ	既述の立ち上がりは縁やかに外方に開く。受け部は斜上方に反り、内側する立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 104	1号窯	灰原II区	須恵器	杯身	(4.2)		底部へラ切り後未調整	既述の立ち上がりは縁やかに外方に開く。受け部は斜上方に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 105	1号窯	灰原I区	須恵器	杯身	(3.9)		底部に凹転ヘラケズリ	扁平な既述の縁やかに外方に開く。受け部はほぼ水平に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 106	1号窯	灰原I区	須恵器	杯身	(3.6)		底部へラ切り後未調整?	扁平な既述の縁やかに外方に開く。受け部はほぼ水平に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 107	1号窯	灰原I区	須恵器	杯身	(3.2)		凹転ナデ	既述の立ち上がりは縁やかに外方に開く。受け部は斜上方に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 108	1号窯	下方灰原	須恵器	杯身	(4.4)		底部へラ切り後ナデ調整	既述の立ち上がりは縁やかに外方に開く。受け部は斜上方に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	受け部に重ね焼きの土器片付着	
16 109	1号窯	下方灰原	須恵器	杯身	(3.8)		凹転ナデ 軸により底部調整	既述の立ち上がりは縁やかに外方に開く。受け部はほぼ水平に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 110	1号窯	灰原I区	須恵器	杯身	(4.05)		凹転ナデ 軸により底部調整	既述の立ち上がりは縁やかに外方に開く。受け部はほぼ水平に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 111	1号窯	灰原II区	須恵器	杯身	(3.7)		底部へラ切り後未調整	扁平な既述の縁やかに外方に開く。受け部はほぼ水平に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 112	1号窯	灰原II区	須恵器	杯身	(2.2)		底部へラ切り後未調整	既述の立ち上がりは縁やかに外方に開く。受け部はほぼ水平に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 113	1号窯	灰原I・II区	須恵器	高杯	(4.8)		凹転ナデ	既述の立ち上がりは縁やかに外方に開く。受け部はほぼ水平に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 114	1号窯	灰原I区	須恵器	ハコウ	(4.3)		頸部外面に平行タタキの痕跡	外反する頸部から屈曲して外方へ立ち上がる口縁部	自然軸付着	
16 115	1号窯	灰原I区	須恵器	高杯	(5.9)	(15.3)	凹転ナデ	外反して開く頸部 脚部はほぼ水平に反り、内側する短い立ち上がりを持つ	自然軸付着	
16 116	1号窯	下方灰原	須恵器	高杯	(5.75)	(14.2)	凹転ナデ	外反して開く頸部 脚部は上方に拡張させ端面を作る	自然軸付着	
16 117	1号窯	灰原I区	須恵器	高杯	(3.75)	(12.9)	凹転ナデ	外反して開く頸部 脚部は上方に拡張させ端面を作る	自然軸付着	
16 118	1号窯	灰原I区	須恵器	高杯	(3.85)	(13.6)	凹転ナデ	外反して開く頸部 脚部は上方に拡張させ端面を作る	自然軸付着	
16 119	1号窯	灰原I区	須恵器	高杯	(5.2)	(11.3)	凹転ナデ	外反して開く頸部 脚部は上方に拡張させ端面を作る	自然軸付着	
16 120	1号窯	灰原II区	須恵器	鉢	(13.6)	(7.1)	凹転ナデ	内湾型時に立ち上がる頸部の口縁部 口縁部は内側に拡張させる 外面に反り、その外縁がめぐる	自然軸付着	

出土遺物観察表(6)

調査 番号	出土 地区	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)		技法	他	形態の特徴	備考
					口径	底径				
16 121	1号窯	灰原Ⅱ区	須置器	壺	8.3	(2.25)	回転ナデ	ほぼ直立する口縁部 口縁部は外側に肥厚する 内湾気味に閉く口頂部 口縁部は丸く取める 外面中層 に2本の沈線がめぐる	自然焼付着	
17 122	1号窯	灰原Ⅱ区	須置器	提瓶	(6.5)	(3.8)	回転ナデ	内湾気味に閉く口頂部 口縁部は丸く取める 外面にカ キ目、中層に輪状工具による斜交文がめぐる	自然焼付着	
17 123	1号窯	灰原Ⅰ区	須置器	提瓶	(7.1)	(3.45)	回転ナデ	内湾気味に閉く口頂部 口縁部は丸く取める 外面にカ キ目、中層に輪状工具による斜交文がめぐる	自然焼付着	
17 124	1号窯	灰原Ⅰ区	須置器	提瓶	(8.3)	(5.3)	回転ナデ	内湾気味に閉く口頂部 口縁部は丸く取める 外面にカ キ目、中層に輪状工具による斜交文がめぐる	自然焼付着	
17 125	1号窯	灰原Ⅰ区	須置器	提瓶	(8.0)	(5.2)	回転ナデ	内湾気味に閉く口頂部 口縁部は丸く取める 外面にカ キ目、中層に輪状工具による斜交文がめぐる	自然焼付着	
17 126	1号窯	灰原Ⅱ区	須置器	提瓶	(8.8)	(25.3)	口縁部は出転ナデ、体部の粘 土被覆される側面回転ナデ	内湾気味に閉く口頂部 口縁部は内側に拡張さ す、外面にカキ目、中層に輪状工具による斜交文がめぐる	自然焼付着	
17 127	1号窯	灰原Ⅱ区	須置器	壺	(17.0)	(6.7)	肩部外面に平行タタキ後カキ 目調整、内面に同心円タタキ	外反して立ち上がる口縁部 肩部を肥厚する	自然焼付着	
17 128	1号窯	灰原Ⅰ区	須置器	壺	(24.6)	(6.1)	肩部外面に平行タタキ	外反して立ち上がる口縁部 肩部を肥厚する	自然焼付着	
17 129	1号窯	灰原Ⅳ区	須置器	壺	(23.6)	(7.2)	肩部外面に平行タタキ後カキ 目調整、内面に同心円タタキ	外反して立ち上がる口縁部 肩部を肥厚する	自然焼付着	
17 130	1号窯	灰原Ⅰ区	須置器	壺	(22.2)	(8.4)	肩部外面に平行タタキ後カキ 目調整、内面に同心円タタキ	外反して立ち上がる口縁部 肩部を下方に拡張し、外面を作 り、輪状工具による斜交文が不定間隔で施される	自然焼付着	
17 131	1号窯	灰原Ⅰ区	須置器	壺	(28.8)	(8.4)	肩部外面にハケ目調整	外反して閉く口縁 内湾気味に立ち上がる口縁部を肥厚 し、肩部と突縁を並置する 外面にへう状土具による斜交文 を施す 頸部外面中層には2条1組の沈線をめぐる	自然焼付着	
17 132	1号窯	灰原Ⅱ区	須置器	壺	(25.8)	(6.2)	頸部に近い輪状把手が付く	外反して立ち上がる口縁部 肩部を肥厚する 面に輪状 工具による斜交文	自然焼付着	
17 133	1号窯	灰原Ⅱ区	須置器	瓶		(4.4)	肩部外面に平行タタキ後カキ 目調整、内面に同心円タタキ	外反して立ち上がる口縁部 肩部を肥厚する 面に輪状 工具による斜交文	自然焼付着	
17 134	1号窯	灰原Ⅱ区	須置器	高杯		(5.8)	回転ナデ	杯縁はほぼ直線的な面から腹曲へ外反して立ち上がる口縁 部が長く、杯縁部は不定形の気体の穿孔が1周縁に引 き出す	自然焼付着	
17 135	1号窯		須置器	壺	8.6	3.45	外側部に回転ナデヘラズリ 仕上げ、内面に平行タタキ	口の直線部からほぼ直立する口縁部が長く、口縁部 部は直線的な面から腹曲へ外反して立ち上がる口縁部 に直線的な面から腹曲へ外反して立ち上がる口縁部	自然焼付着	
17 136	1号窯		須置器	杯身	(12.6)	4.1	外面に仕上げナデ調整 内面に仕上げナデ	口縁部はほぼ直線的な面から腹曲へ外反して立ち上がる口縁部 に直線的な面から腹曲へ外反して立ち上がる口縁部	自然焼付着	
17 137	1号窯		須置器	すり鉢		(2.1)	底面ヘラズリ 外周に平行タタキ後カキ目、内 面に同心円タタキ	平皿状底面から体部がわずかに外傾して立ち上がる 底部 は外方に突出する	自然焼付着	
18 138	1号窯		須置器	樽			外周に平行タタキ後カキ目、内 面に同心円タタキ	凸凹状の体部の肥厚部分で、粘土板充填の痕がよく残る	自然焼付着	

出土遺物観察表(7)

期別 番号	出土 場所	出土遺構 種別	器種	法量 (cm)		技法	他	形態の特徴	備考
				口径	底径				
18	139	1号窯	須恵器 須恵器	瓶	器高 (2.7)	外面平行タテカキ目、内 面同心出タテキ		凸面状の体部の附屬部分で、粘土板充填の痕がよく残る	
21	140	2号窯	須恵器	杯	(10.0)	溝敷不明		底部は丸みを帯びる縁やかに外方に開く体部。受け幅は斜上 方に延び、内側に立ち上がりをつけて	袋状土器
21	141	2号窯	須恵器	器台		回転ナデ		や上面に水平方向に延びる受け部。底部は面を形成し、 磨滅被衣状をめぐらせる。上面には割縁痕有り	
21	142	2号窯	須恵器	甕	(32.7) (11.05)	頸部外面にハケ目調整		外反して開口縁。内面縁は立ち上り、開口縁部を肥厚 斜格子上交差で産した外面に半日の後へう状工目により 頸部外面には2条1組の溝を3帯めぐらせる	自然軸付着
21	143	2号窯	須恵器	蓋	(13.8) (2.55)	回転ナデ		天井部は丸みを帯び内高して口縁部に続く。口縁部蓋は丸 く収める。	口縁部に重ねね巻き度
21	144	2号窯	須恵器	蓋	(11.0) (2.5)	回転ナデ		天井部は丸みを帯び内高して口縁部に続く。口縁部蓋は丸 く収める。	
21	145	2号窯	須恵器	高杯	(5.55)	杯・脚の接合部にユビナデ		杯部は丸みを帯び大きく広がり、端部は下方に引き出す 端部は下方に引き出す	
21	146	2号窯	須恵器	高杯	(1.4) (9.5)	回転ナデ		底部は外反して大きく広がり、端部は下方に引き出す	
21	147	2号窯	須恵器	すり鉢	(2.5) (10.3)	底面へラ切り 下端部に回転 ヘラケズリ		平直な壁部から底部がわずかに外積して立ち上がる。底部は外方 に突き出す。底部中央に径約3mmの縦溝(小孔)が穿たれる	
21	148	2号窯	須恵器	須恵器 器台	(11.2) (12.2)	外面外直上平反カキ目、下半 部に回転ヘラケズリ		いわゆる草履型に似た体部で、大きく屈曲させた肩から短 く直立して口縁部の縁く。口縁部はやや内側に、丸く収める	
21	149	2号窯	須恵器	甕	(24.2) (4.4)	回転ナデ		外反して開く口縁部。端部を肥厚する	
21	150	2号窯	須恵器	蓋	(4.0) (12.25)	外面にカキ目		短い體部の頂部は閉塞せず、頂部して内面縁味に大きく広 がって口縁部に続く。口縁部蓋は丸く収める。	
21	151	2号窯	須恵器	蓋	(12.4) (3.4)	回転ナデ		天井部から屈曲して直線的に口縁部に続く。口縁部蓋は丸 く収める。	
21	152	2号窯	須恵器	杯	(12.8) 4.15	天井部に回転ヘラケズリ		天井部は丸みを帯び内高してほぼ直立する口縁部に続く 口縁部蓋丸く収める	
21	153	2号窯	須恵器	蓋	(2.4)	天井部に回転ヘラケズリ		天井部は丸みを帯び中央部に溝みが付く。溝みは真ん中が 凹み外側に伏る	
21	154	2号窯	須恵器	高杯	(3.15) (3.6)	回転ナデ		脚部は外反して大きく広がり、端部は下方に引き出す	自然軸付着
21	155	2号窯	須恵器	高杯	(7.8) (4.4)	回転ナデ		わずかに外反して開く口縁部。端部を上下に拡張する	
21	156	2号窯	須恵器	蓋	(21.6) (5.15)	頸部外面平行タテカキ目、後ナデ 下部に粘土の垂き目残る		外反して開く口縁部。端部を肥厚する	
21	157	2号窯	須恵器	蓋	(32.0) (5.5)	回転ナデ、外面に粗いハケ目		大きく開く口縁部。口縁部蓋は突帯で肩から内面縁味に内面 に立ち上がる。突帯の上には2条、下に1条の溝がめぐる	器台の可能性あり

出土遺物観察表(8)

タラメ遺跡

調査 番号	出土 地区	出土遺構	種別	器種	法量 (cm)		技法	他	形態の特徴	備考	
					口径	器高					
30 1	第2層	クロボク罎	須恵器	碗	(15.6)	(4.1)	回転ナデ	内湾気味に開く体部	口縁部は肥厚される	口縁部に重ね焼き痕 墨書あり	
30 2	第2層	クロボク罎	須恵器	碗		(3.3)	回転ナデ	内湾気味に開く体部		墨書あり	
30 3	第2層	クロボク罎	須恵器	碗			回転ナデ	内湾気味に開く体部		墨書あり	
30 4	第2層	クロボク罎	須恵器	碗	(15.7)	(3.6)	回転ナデ	内湾気味に開く体部	口縁部は肥厚される	口縁部に重ね焼き痕	
30 5	第2層	クロボク罎	須恵器	碗	(15.7)	4.6	回転ナデ ナデ	不定方向に仕上げ 底面水切り?	内湾気味に開く体部	口縁部は肥厚される	口縁部に重ね焼き痕
30 6	第2層	クロボク罎	須恵器	碗	(16.6)	(3.4)	回転ナデ	内湾気味に開く体部	口縁部は肥厚される		
30 7	第2層	クロボク罎	須恵器	碗	(14.8)	(2.3)	回転ナデ	内湾気味に開く体部	口縁部は肥厚される	口縁部に重ね焼き痕	
30 8	第2層	クロボク罎	須恵器	碗		(2.8)	回転ナデ ナデ	外面下半に仕上げ 底面水切り	内湾気味に開く体部	口縁部は肥厚され、わずかに外反する	外反縁付蓋により黒色
30 9	第2層	クロボク罎	須恵器	碗		(2.6)	回転ナデ ナデ	外面下半に仕上げ 底面水切り	内湾気味に開く体部		
30 10	第2層	クロボク罎	須恵器	碗		(3.3)	回転ナデ ナデ	外面下半に仕上げ 底面水切り	内湾気味に開く体部		

出土遺物観察表⑩

写 真 图 版



空中写真（国土地理院撮影）



調査地遺景（南から）



調査前全景（南東から）

野田窯跡遠景
(南東から)



野田窯跡遠景
(南東から)



トレンチ 2 西壁





空中写真（南東上空から）



空中写真（南上空から）



1・2号窯全景

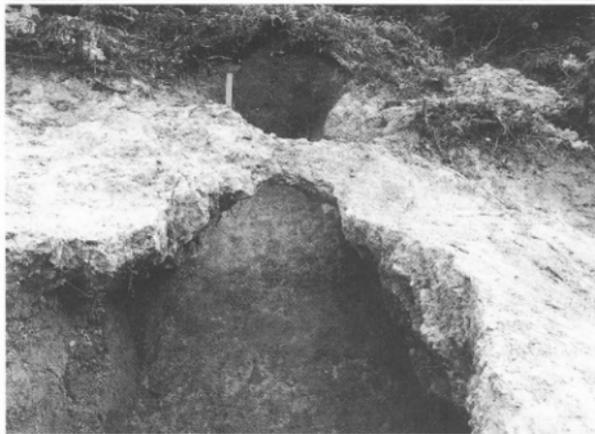


1号窯全景





1号窯全景



1号窯天井部残存状況



1号窯灰原堆積状況



1号窯全景



1号窯灰原堆積状況



1号窯
窯壁の状況

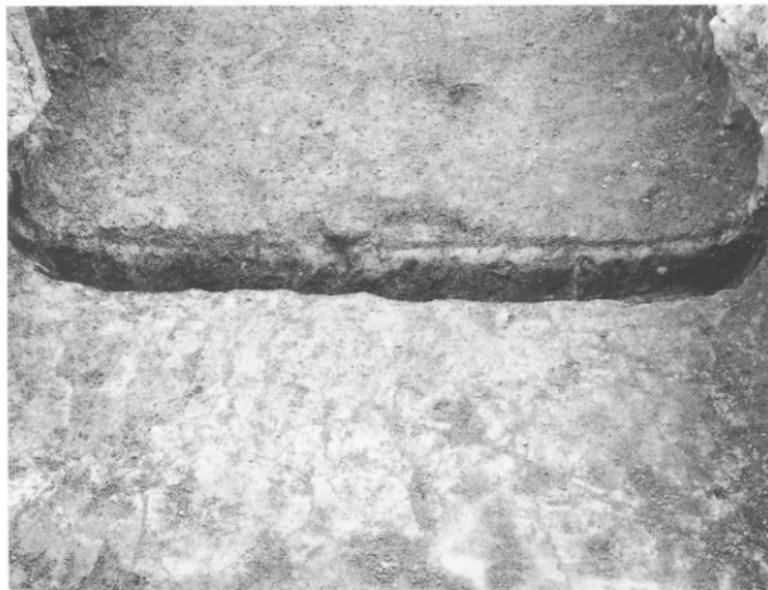




1号窯床面遺物出土状況



1号窯西側窯壁



1号窯床面断ち割り



2号窯全景



2号窯窯体堆積状況



2号窯床面遺物出土状況



2号窯断ち割り



遠景（北から）



全景



窯体の状況



調査地遠景（南東から）



焼土層（SK01）検出状況



堆積状況



調査風景



全景（東から）



遠景（北から）



遠景（南から）



全景（北から）



全景（北西から）

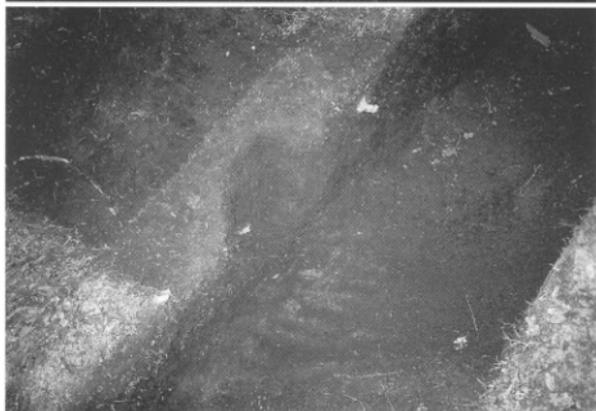
調査風景



SK01 (東から)



SK01土器出土状況



SK01 (土器除去後)



SK02堆積状況



SK02 (北から)



SK02土器出土状況
(西から)



SK02 (東から)



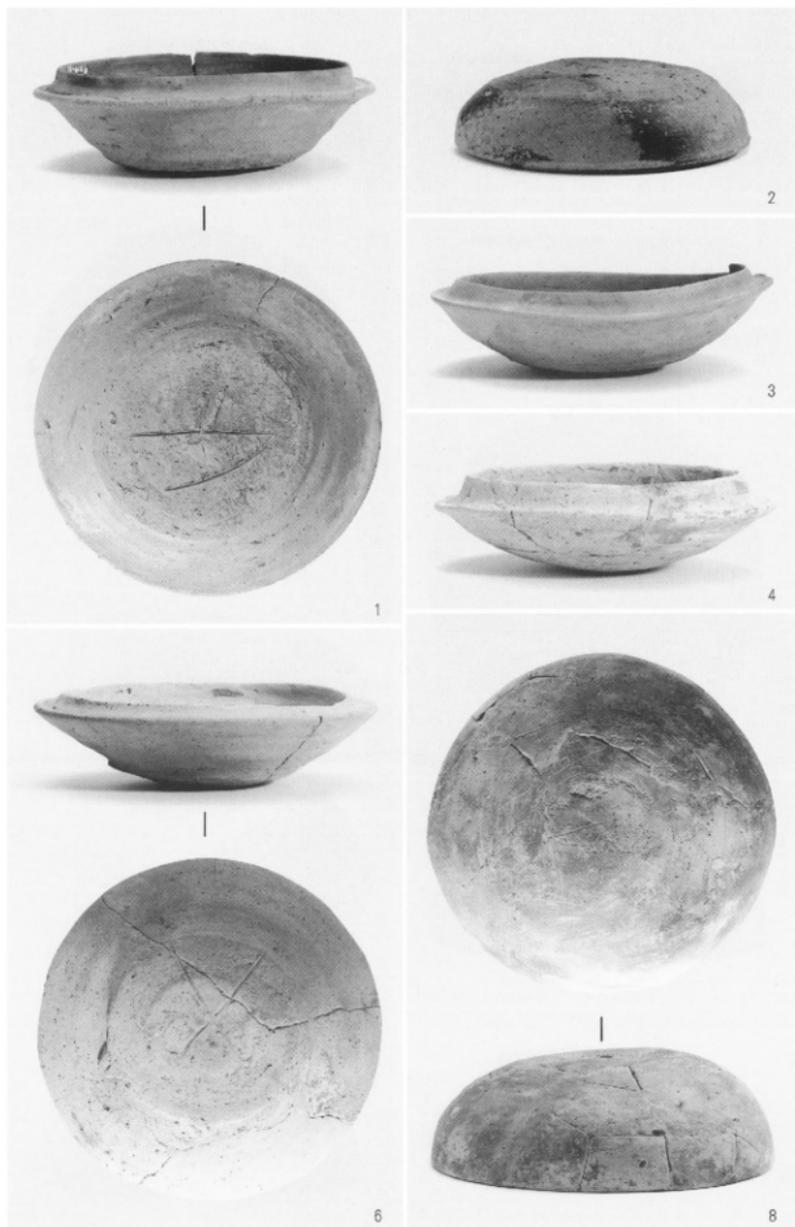
SK03 (西から)



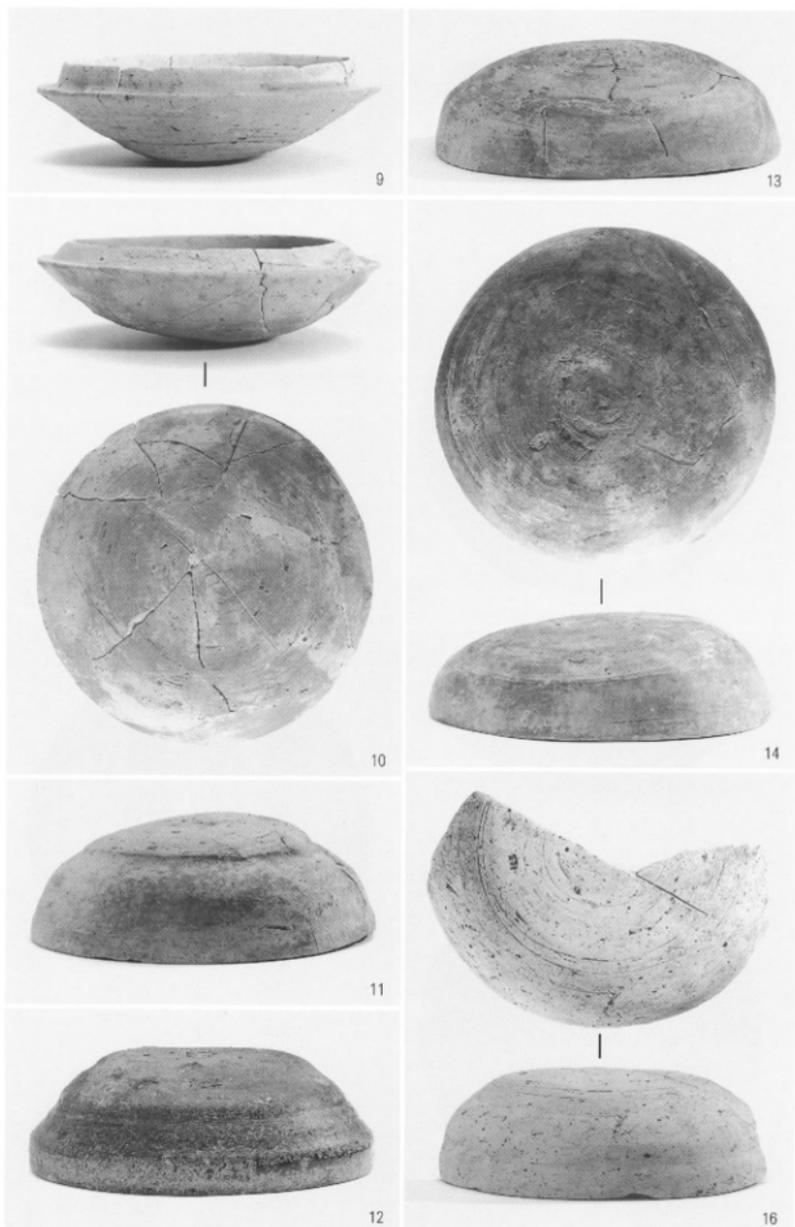
SK03 (西から)



SK03 (南西から)

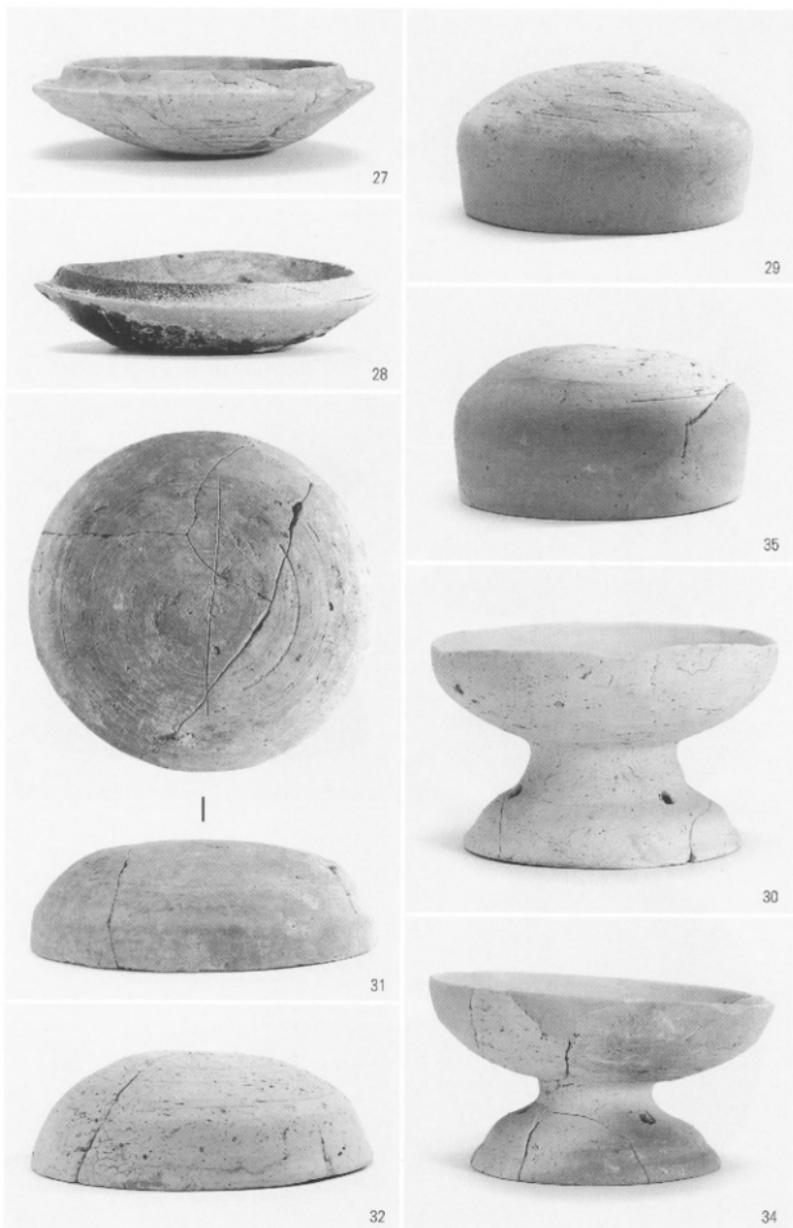


1号窯出土遺物(1)

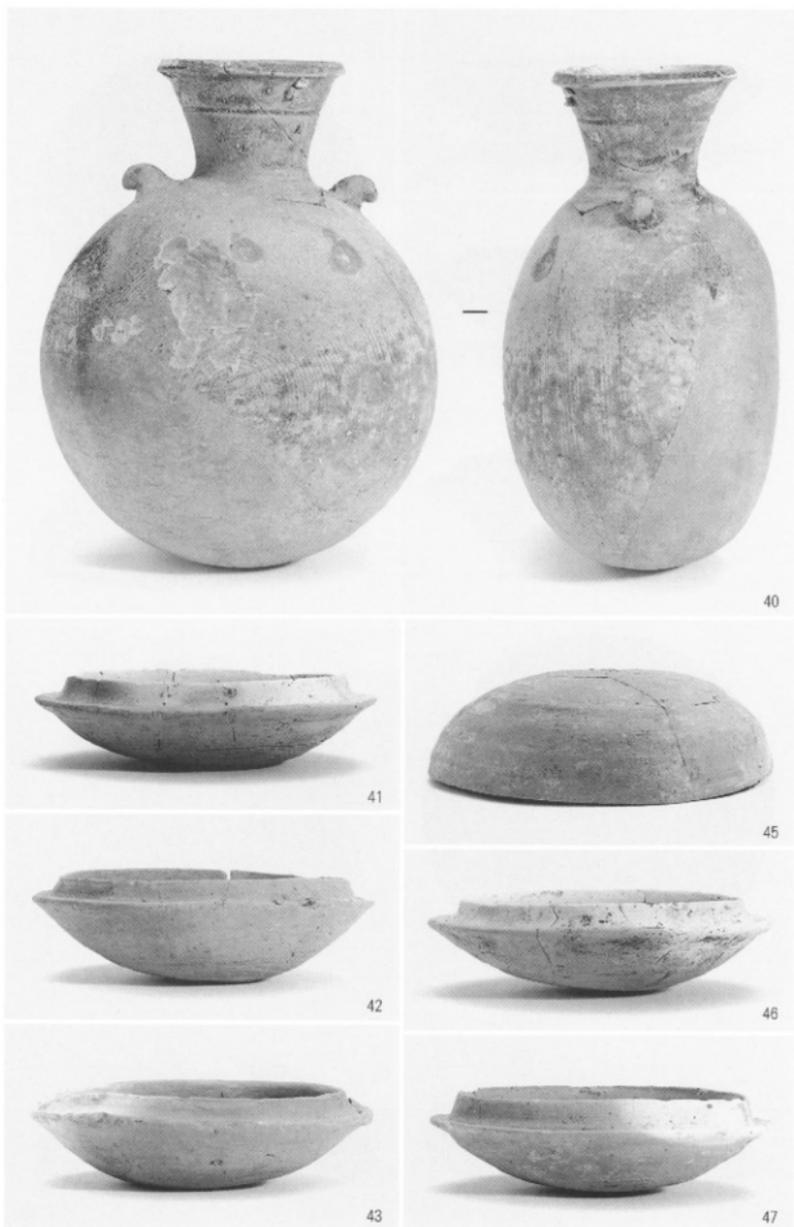


1号窯出土遺物(2)

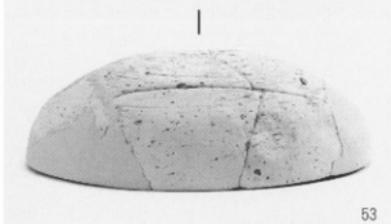
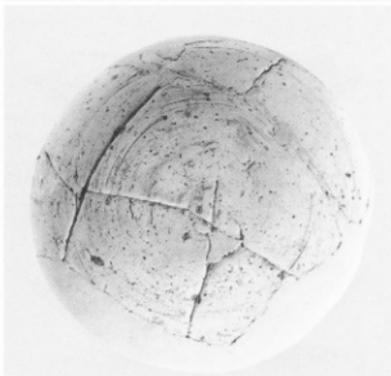
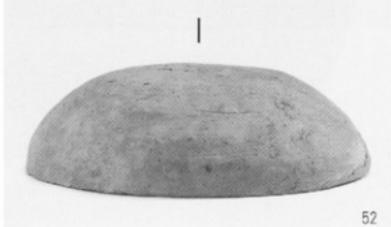
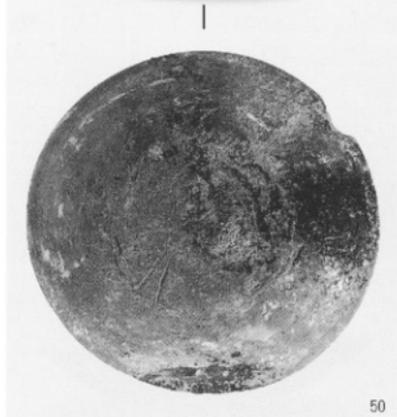


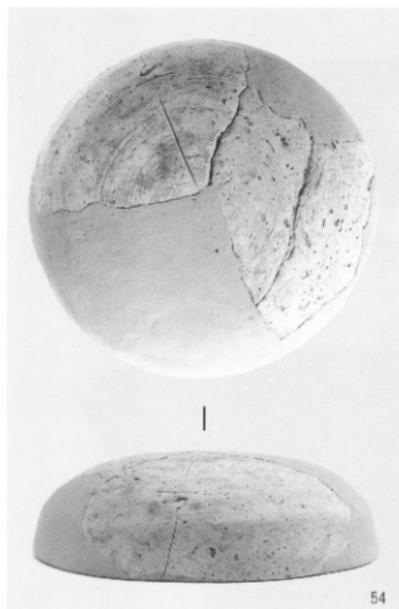


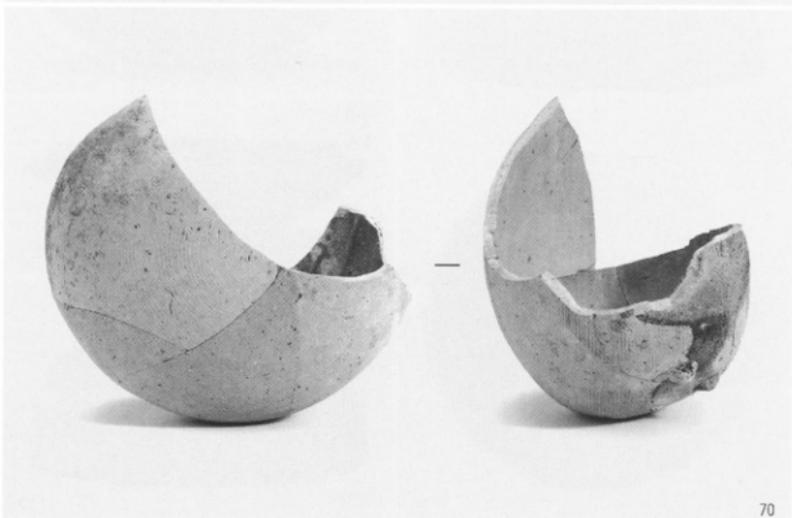
1号窯出土遺物(4)

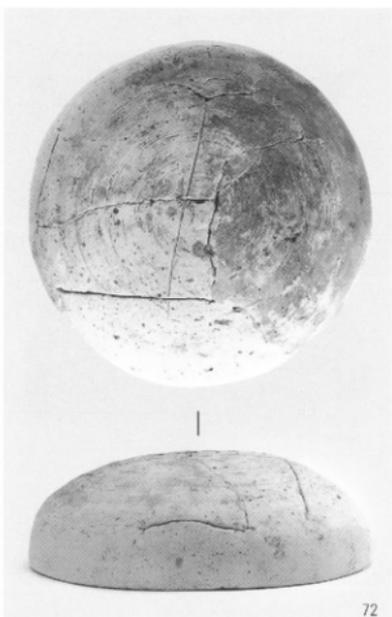
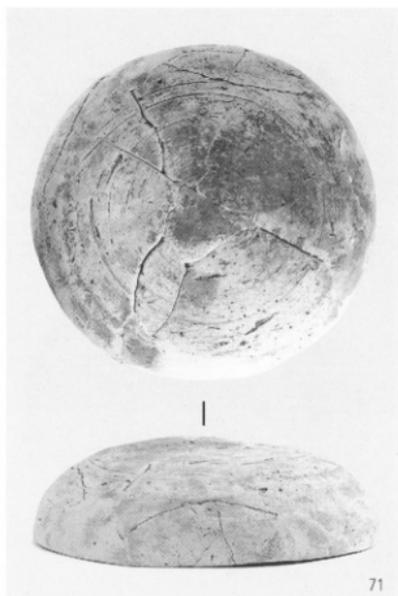


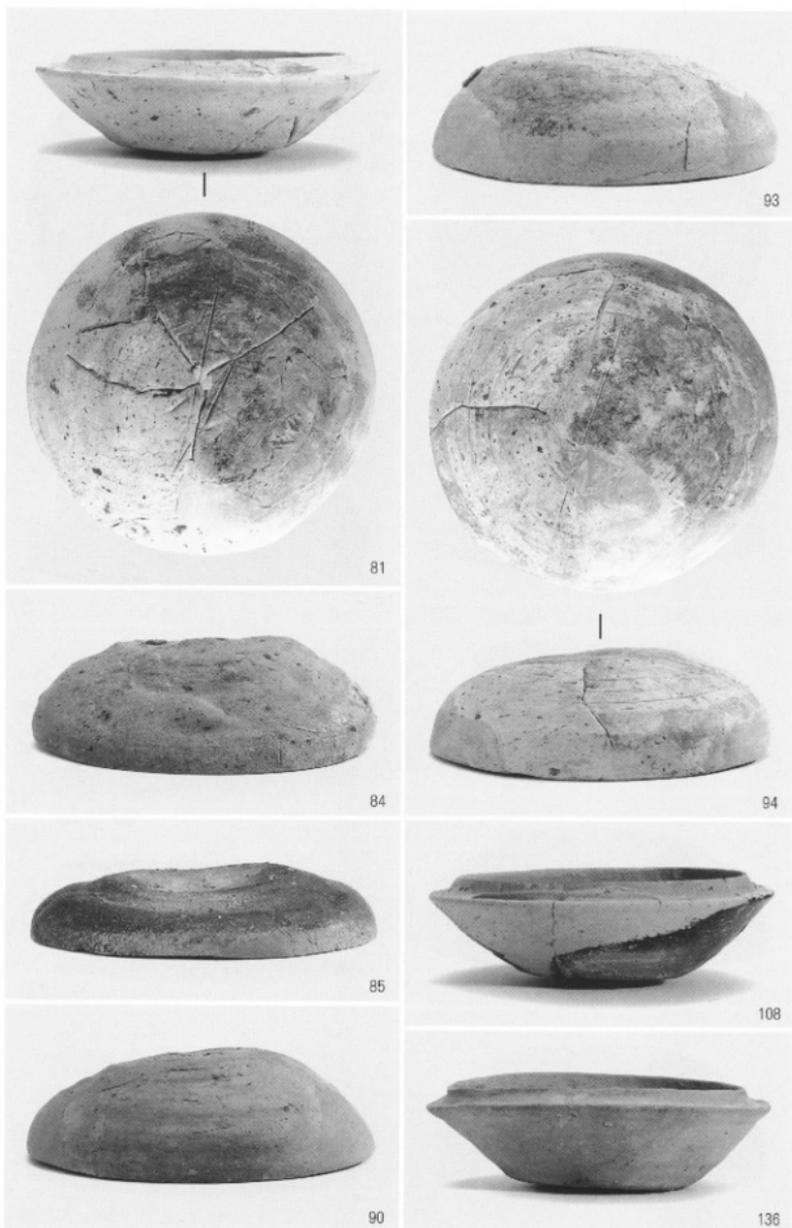
1号窯出土遺物(5)

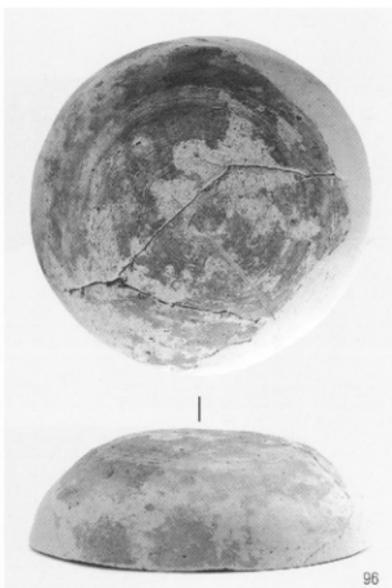
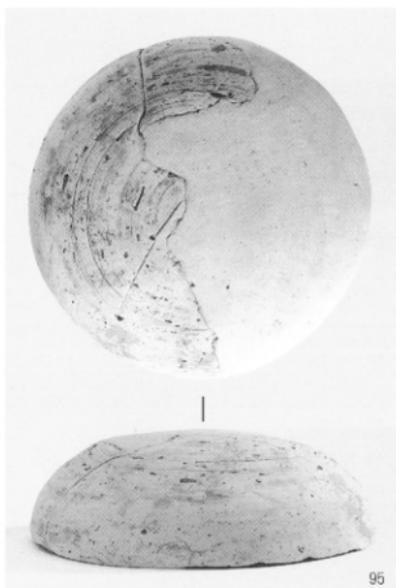


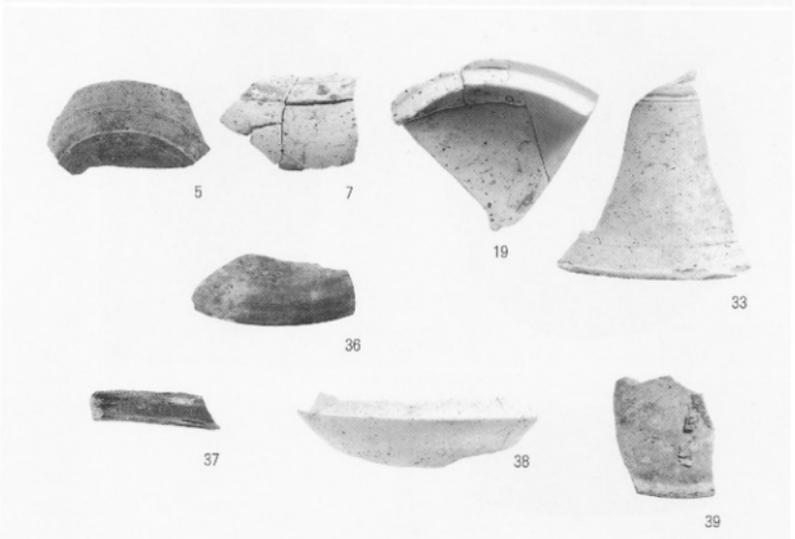
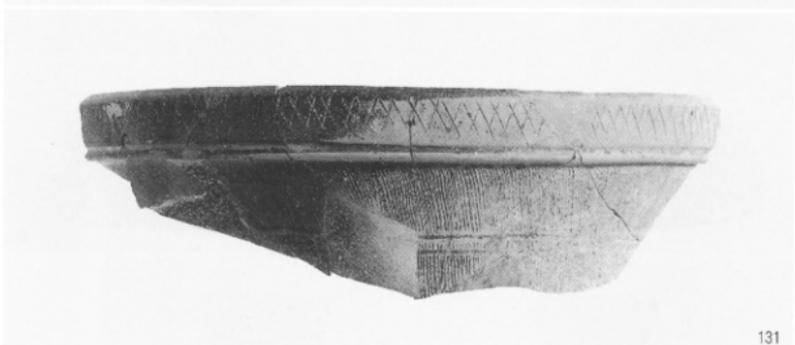
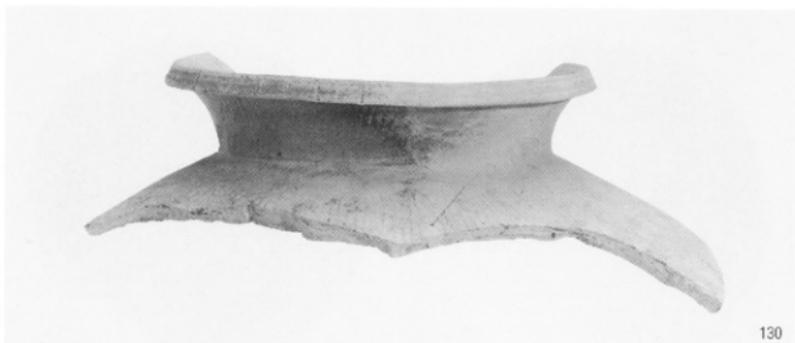


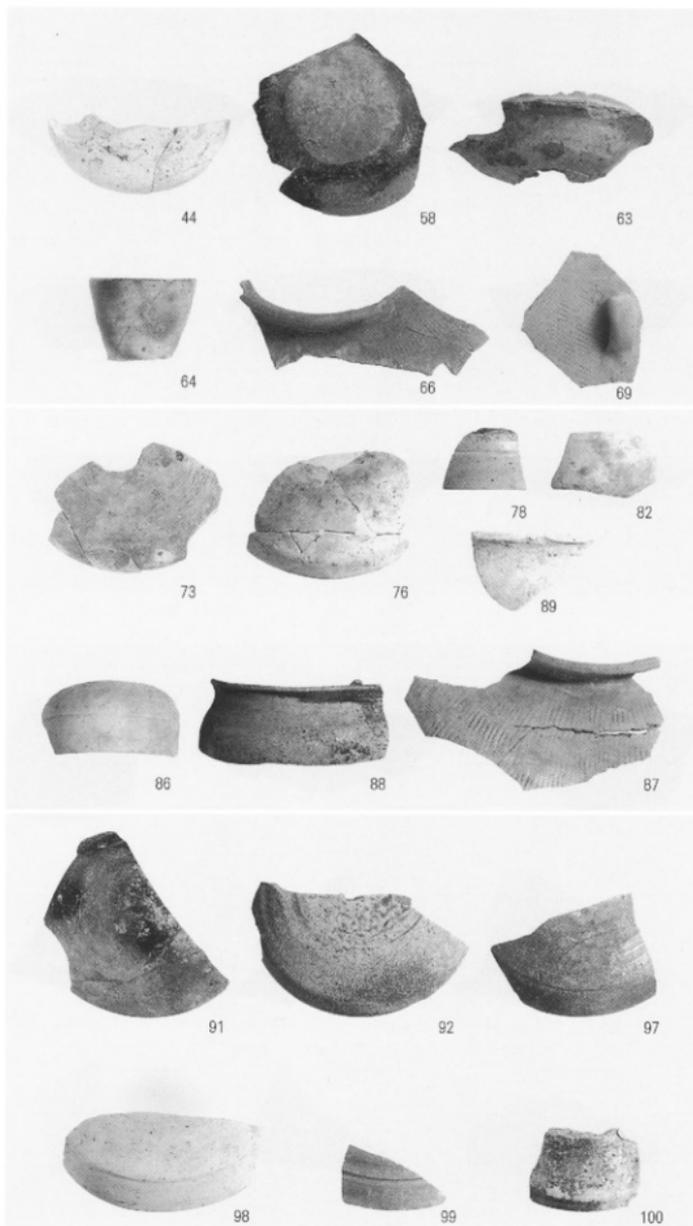




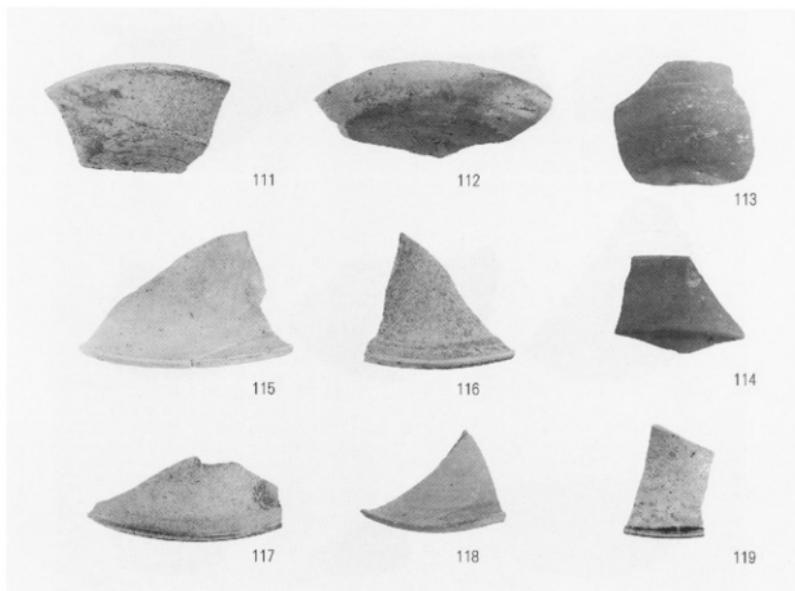
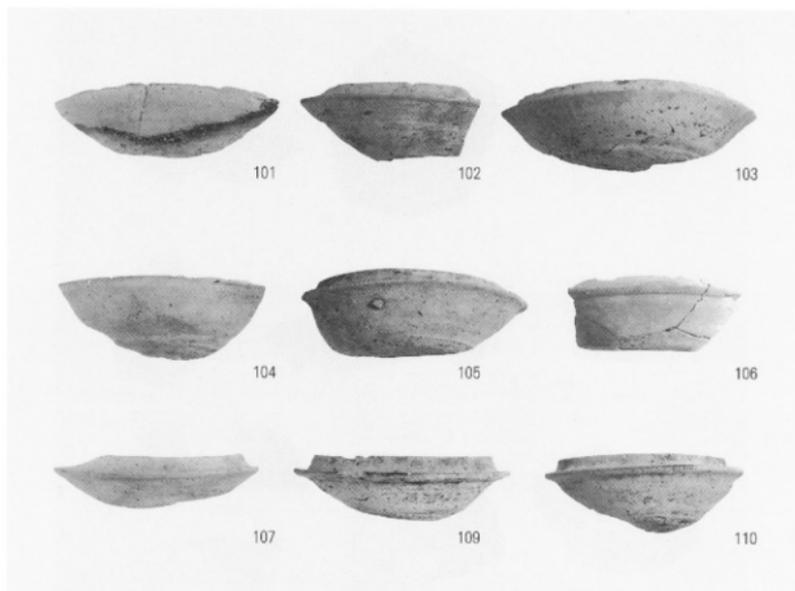


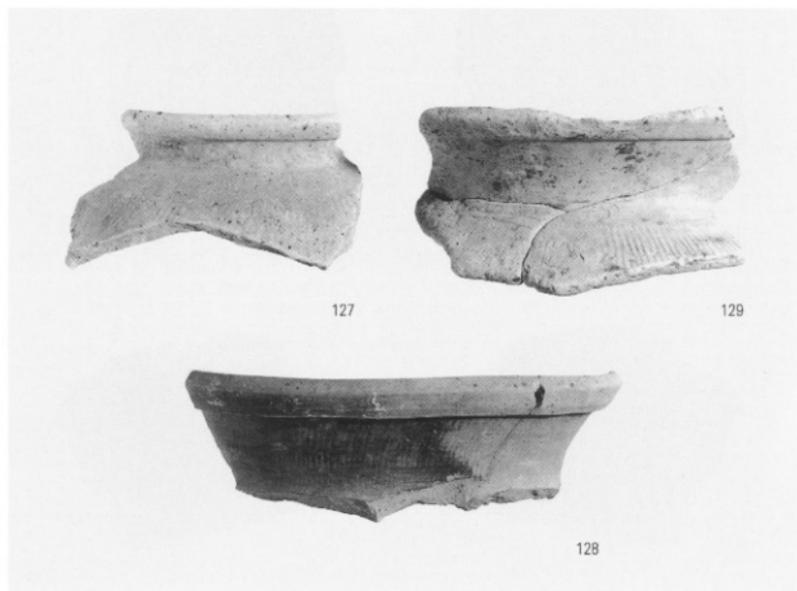
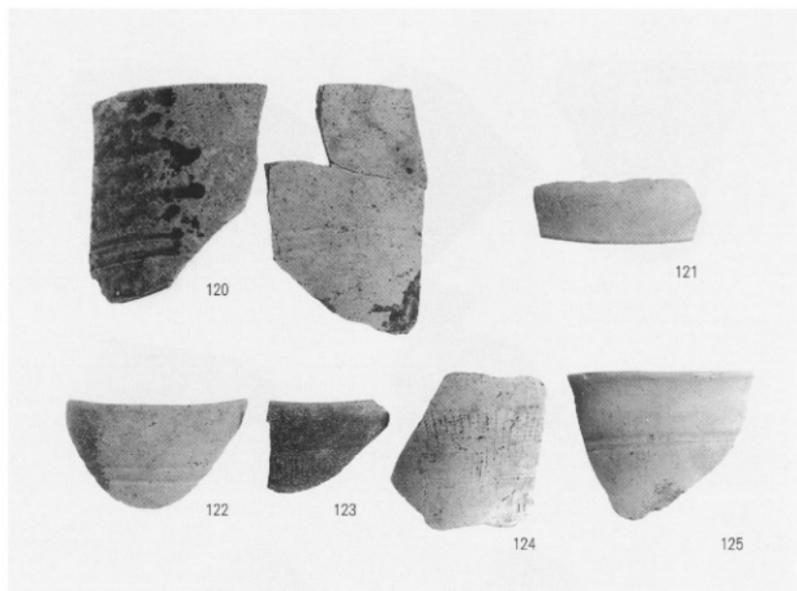




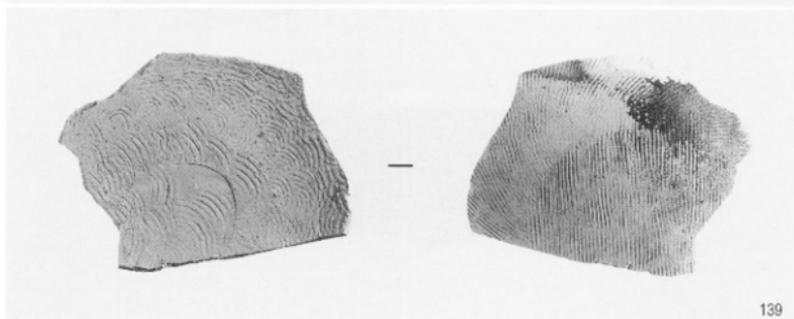
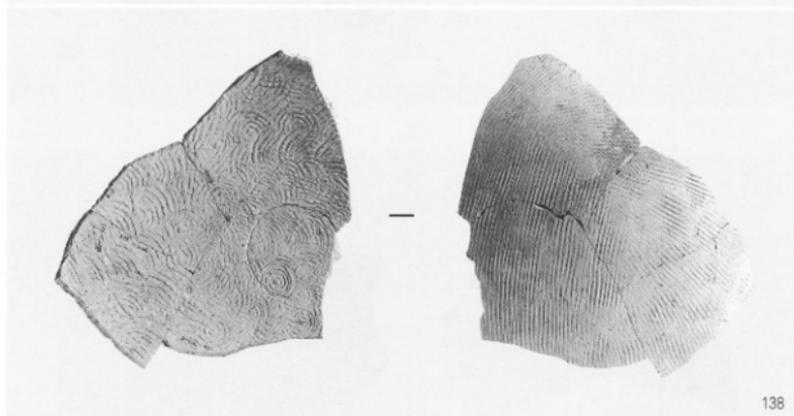
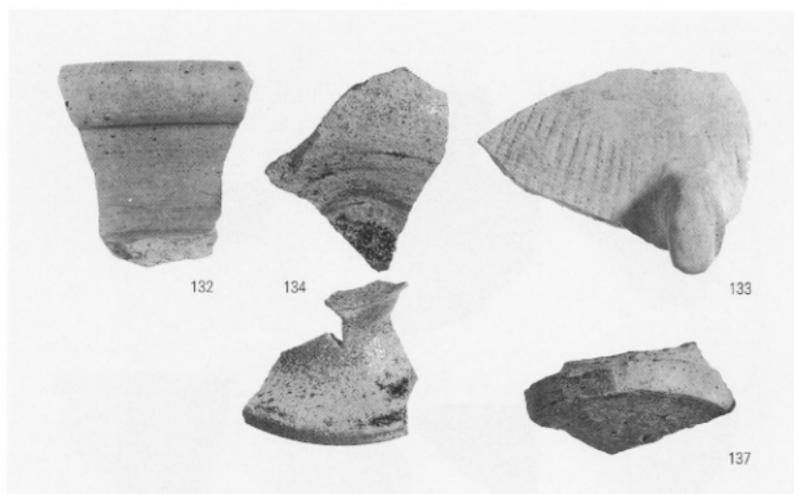


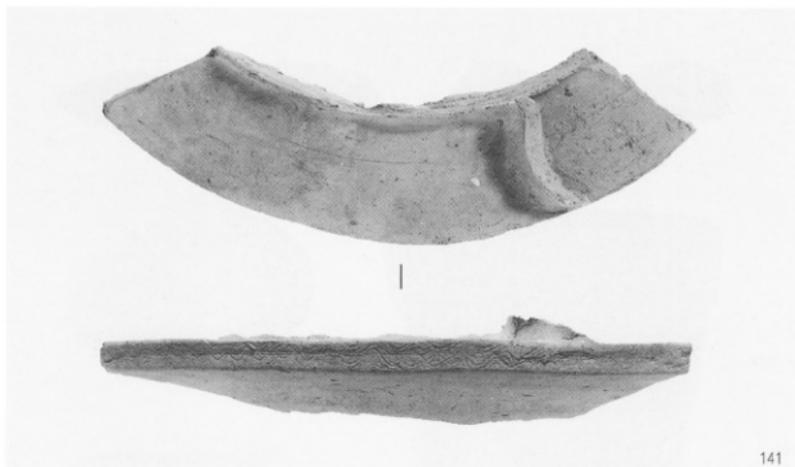
1号窯出土遺物(13)





1号窯出土遺物(15)





141



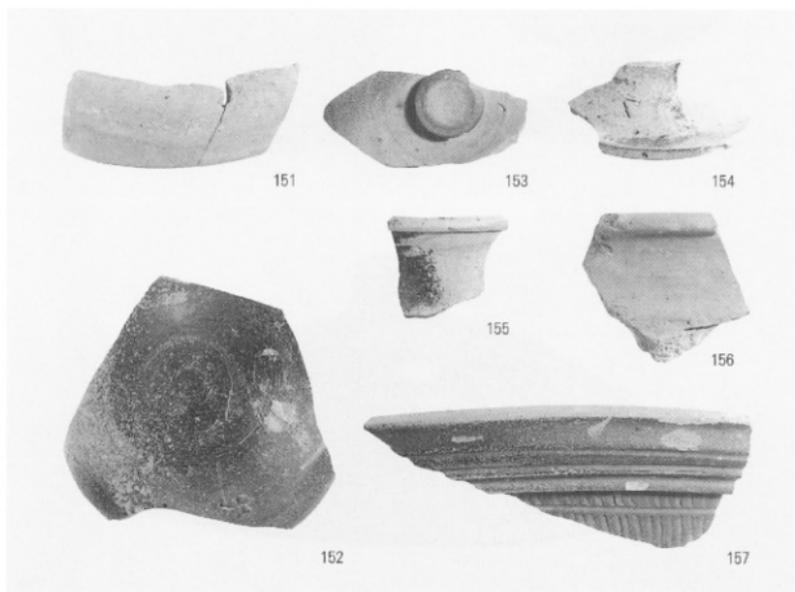
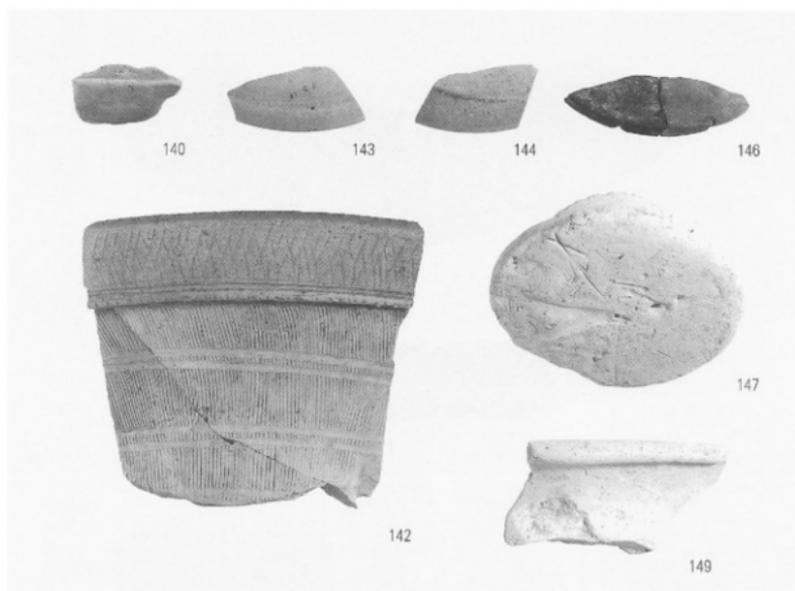
145

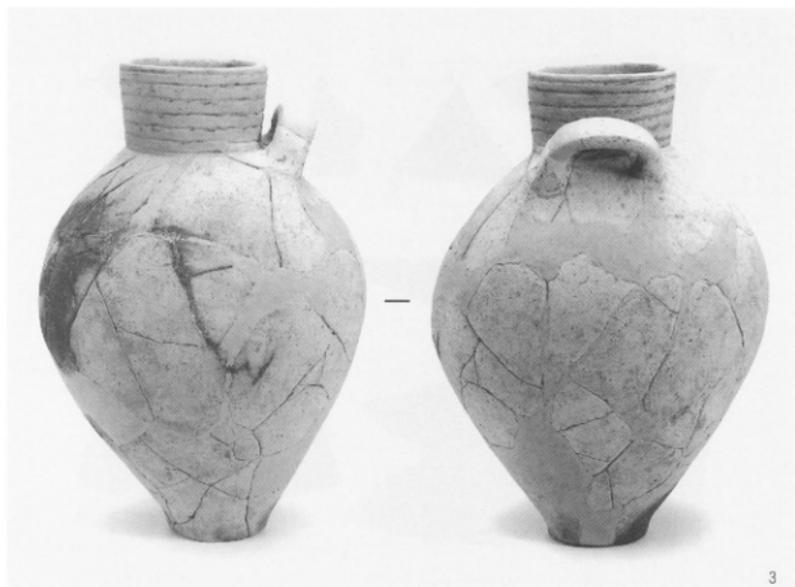


148



150

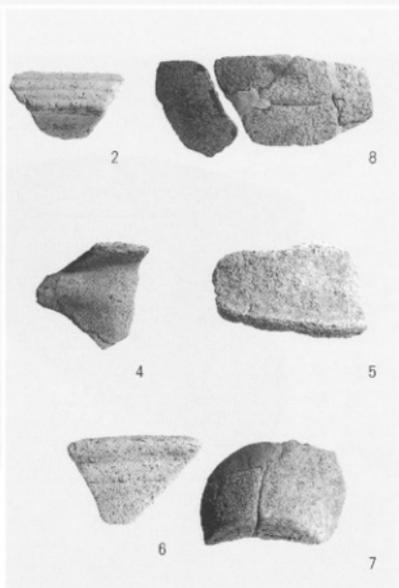




3



1



2

8

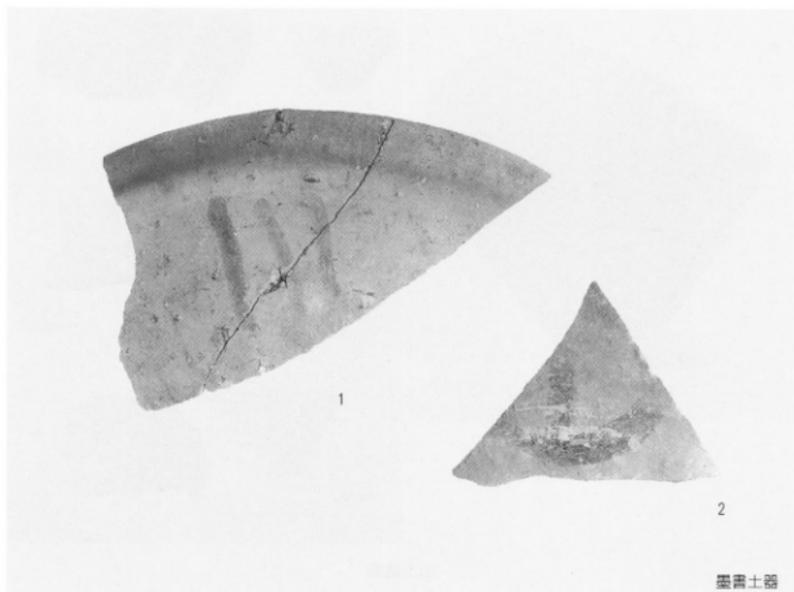
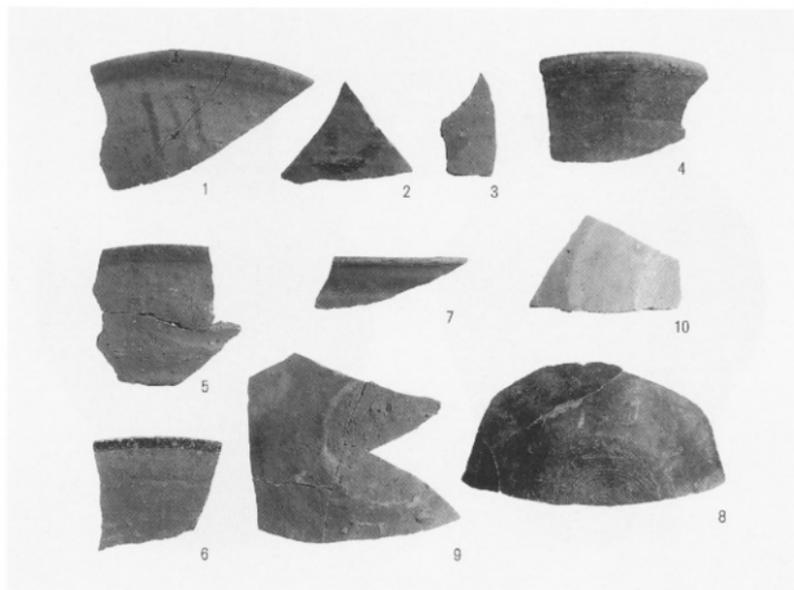
4

5

6

7

出土遺物



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	のだかまあと								
書名	野田窯跡								
副書名	青野運動公苑土地信託事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告								
シリーズ番号	第327冊								
編著者名	渡辺 昇								
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部								
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大寸500番地 Ⅱ 079 (437) 5589								
発行年月日	2008年3月21日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	調査番号						
確認調査	兵庫県加西市	28220	880012他	34°	134°	1988.10.13~11.11	214㎡	県民 スポーツ レクリ エーション 施設建設 事業	
	野上町・鍛冶屋町 他			56°	53°	1989.2.22~3.10	132㎡		
野田窯跡	加西市野上町		900010他		24°	38°	1990.6.21~8.24		820㎡
ロクロ谷窯跡	鍛冶屋町 田谷町		880017				1988.10.13~11.11		12㎡
ニラミ岩東遺跡	鍛冶屋町		880067他				1989.2.22~3.10		220㎡
高尾遺跡	田谷町		880068				1989.2.22~3.10		28㎡
									確認
									346㎡
							本発掘		
							1,080㎡		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項		
野田窯跡	窯跡	古墳時代	窯跡	須恵器					
ロクロ谷窯跡	窯跡	古墳時代	窯跡	須恵器					
ニラミ岩東遺跡	集落跡	中世	焼土坑						
高尾遺跡	墓跡	弥生時代	土器棺墓・土坑	弥生土器					

兵庫県文化財調査報告 第327冊

加西市

野田窯跡

—青野運動公苑土地信託事業に伴う発掘調査報告書—

平成20(2008)年3月21日発行

- 編集 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
〒675-0142 加古郡播磨町大中500番地
TEL 079-437-5589
- 発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL 078-341-7711
- 印刷 株式会社ソーエイ
〒673-0898 兵庫県明石市梅屋町6-6
TEL 078-911-2918